垂水廃寺

発掘調査報告書

新吉富村文化財調査報告書

第　2　集

1976・3・31

新吉富村教育委員会

垂　水　廃　寺

発掘調査報告書

新吉富村文化財調査報告書

第　2　集

序

新吉富村は福岡県と大分県中津市を分かつ山国川の左岸にある田園地帯で、縄文時代から歴史時代の遺跡が数多く残っています。この数多くの遺跡の一つである垂水廃寺を国・県の補助を受け昭和48年度から昭和50年度まで3カ年計画で新吉富村教育委員会が発掘調査を行いました。

この発掘調査は、九州芸術工科大学教授沢村仁先生・北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄両先生の指導・助言のもとに県文化課・九州歴史資料館の諸技師に担当していただき、地元の人達の参加のもとに一応ここに3カ年の調査を終了いたしました。この成果をまとめ、報告書を刊行いたします。この報告書が学術的に活用されることはもとより、郷土の文化財保護の一助となれば幸いであります。

昭和51年3月31日

新吉富村教育委員会

教育長　**高　橋　作　郎**

例　　言

1.　本書は、新吉富村教育委員会が国・県の補助を受けて、昭和48・49・50年度に実施した垂水廃寺および関係瓦窯の発掘調査報告書である。

2.　発掘調査は、福岡県文化課課長藤井功、主査宮小路賀宏、九州歴史資料館学芸員横田義章・同技師横田賢次郎・森田勉・高橋章が担当し、調査補助員として九州大学学生緒方悦子・亀田修一・立正大学卒業生村上久和が参加した。また、福岡県文化財専門委員重松敏美・文化保護指導委員宮本工両氏の助力を得た。

　なお、調査指導委員として、九州芸術工科大学教授沢村仁（建築史）・北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄（考古学）の両氏に委嘱した。

　庶務は、新吉富村教育委員会安元慶彦・矢野二太が担当した。

3.　掲載の遺構図面は各調査員が作成したものを森田が製図した。写真は、遺構を森田が、遺物を九州歴史資料館技師石丸洋が撮影した。

4.　遺物整理・実測・製図・拓本は九州歴史資料館調査課諸技師および補助員に多大な援助を得、また遺物整理にあたっては、福岡県文化課岩瀬正信氏に終始多くの助言を得た。

5.　垂水廃寺のトラバース測量は沢村、九州芸術工科大学学生田中忠久・加藤進一、日高正幸が行った。

6.　本書の執筆は、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ－２・３、Ⅴ－１〔１〕・〔２〕(1)(3)・〔３〕、Ⅵを森田、Ⅱ、Ⅳ－１、Ⅴ－３、Ⅵを亀田、Ⅴ－１〔２〕(2)、Ⅴ－２〔２〕〔３〕〔４〕を高橋、Ⅳ－２(2)を高倉洋彰、Ⅳ－４を八尋和泉、Ⅴ－２〔１〕を郷土史家大森勝留が担当した。

　編集は森田が行った。

目　　次

Ⅰ　調査にいたるまでの経過……1
Ⅱ　位置と環境……1
Ⅲ　遺　　跡
1.　調査の概要……6
2.　遺　　構……14
3.　寺跡以外の遺構……16
(1)　弥生時代の遺構……16
(2)　古　　墳……18
(3)　江戸時代の遺構……18
Ⅳ　遺　　物
1.　瓦　　……19
2.　土　　器……35
3.　石　　器……41
4.　塑像残片……41
Ⅴ　窯跡の調査
1.　山田窯跡……42
〔1〕　遺　　構……43
(1)　第1号窯跡……43
(2)　第2号窯跡……44
(3)　第3号窯跡……44
〔2〕　遺　　物……45
(1)　第1・2号窯跡出土土器……45
(2)　第1・2号窯跡出土瓦……45
(3)　第3号窯跡出土土器……48
〔3〕　ま　と　め……50
2.　友枝瓦窯跡の調査……51
〔1〕　調査の経過……51
〔2〕　遺　　構……51
(1)　第1号窯跡……52
(2)　第2号窯跡……54
〔3〕　遺　　物……54
〔4〕　ま　と　め……56
3.　桑野原瓦窯跡……57
Ⅵ　おわりに……58

挿　図　目　次

第１図　垂水廃寺周辺遺跡群
第２図　地 区 割 図
第３図　トレンチ配置図
第４図　Ⅳ－Ｂ区遺構実測図
第５図　Ⅱ－Ｈ・Ｉ・Ｊ区遺構実測図
第６図　Ｉ－Ｉ・Ｊ区遺構実測図
第７図　Ｉ－Ｏ区遺構実測図
第８図　ＳＡ 020 遺構実測図
第９図　ＳＢ 025 遺構実測図
第10図　ＳＤ 015 遺構実測図
第11図　土層図および断面図
第12図　弥生時代遺構実測図
第13図　ＳＸ 026 遺構実測図
第14図　軒丸瓦実測図・拓影
第15図　軒平瓦実測図・拓影（１）
第16図　軒平瓦実測図・拓影（２）
第17図　丸・平瓦実測図・拓影
第18図　叩文集成図（１）
第19図　叩文集成図（２）
第20図　叩文集成図（３）
第21図　文字瓦拓影
第22図　土器実測図（１）
第23図　土器実測図（２）
第24図　底部接合過程模式図
第25図　埴輪実測図
第26図　土器実測図（３）
第27図　Ｉ－Ｉ・Ｊ区出土石鏃実測図
第28図　塑像残片実測図
第29図　山田窯跡地形実測図
第30図　山田第１号窯跡実測図
第31図　山田第２号窯跡実測図
第32図　山田第３号窯跡実測図
第33図　山田第１・２号窯跡窯内出土土器実測図

第34図　山田第１・２号窯跡出土瓦拓影
第35図　山田第１号窯跡出土瓦実測図・拓影
第36図　山田第３号窯跡窯内出土土器実測図（１）
第37図　山田第３号窯跡窯内出土土器実測図（２）
第38図　山田第３号窯跡窯内出土土器実測図（３）
第39図　友枝瓦窯跡地形実測図
第40図　友枝第１号瓦窯跡遺構実測図
第41図　友枝瓦窯跡出土軒先瓦実測図・拓影
第42図　友枝瓦窯跡出土瓦拓影
第43図　桑野原瓦窯跡出土瓦拓影

表　目　次

第１表　垂水廃寺周辺遺跡群地名表

第２表　垂水廃寺（６ＫＴＭ）・山田窯跡発掘調査一覧表

第３表　叩文様集成表

図　版　目　次

図版１　垂水廃寺航空写真
図版２　Ⅰ　ＳＢ 010（第１トレンチ・西から）
　　Ⅱ　ＳＢ 010（第３トレンチ・南から）
図版３　Ⅰ　礎石および礎石落とし穴ＳＸ 011（南から）
　　Ⅱ　Ⅰ－Ｏ区第１トレンチ発掘調査北側部（西から）
図版４　Ⅰ　ＳＡ 020（第２トレンチ・南から）
　　Ⅱ　ＳＡ 020（第１トレンチ・南から）
図版５　Ⅰ　Ⅳ－Ｆ区発掘調査全景（南から）
　　Ⅱ　ＳＤ 015（南から）
図版６　Ⅰ　Ⅳ－Ｂ区発掘調査全景（南から）
　　Ⅱ　Ⅱ－Ｃ区第２トレンチ発掘調査（南から）

図版７　Ⅰ　Ⅱ－Ｈ・Ｉ・Ｊ区第１トレンチ発掘調査全景（西から）
　　Ⅱ　Ⅰ－Ｉ・Ｊ区発掘調査全景（北から）
図版８　Ⅰ　ＳＢ 002（東北から）
　　Ⅱ　ＳＫ 024（北から）
図版９　Ⅰ　Ⅳ－Ｈ区発掘調査全景（西から）
　　Ⅱ　ＳＸ 026（西から）
図版10　山田・友枝窯跡航空写真
図版11　Ⅰ　山田窯跡全景（東から）
　　Ⅱ　山田第１号窯跡（東から）
図版12　Ⅰ　山田第１号窯跡（東から）
　　Ⅱ　山田第１号窯跡焼成部右壁改修状態
図版13　Ⅰ　山田第１号窯跡焼成部第１次壁，第２次壁
　　Ⅱ　山田第２号窯跡（西から）
図版14　Ⅰ　山田第３号窯跡全景（西から）
　　Ⅱ　山田第３号窯跡窯内須恵器出土状態
図版15　Ⅰ　友枝瓦窯跡全景（東から）
　　Ⅱ　友枝第１号瓦窯跡保存施設（東から）
図版16　Ⅰ　友枝第１号瓦窯跡焼成部
　　Ⅱ　友枝第２号瓦窯跡陥没穴保存施設
図版17　垂水廃寺出土軒丸瓦（１）
図版18　垂水廃寺出土軒丸瓦（２）
図版19　垂水廃寺出土軒平瓦（１）
図版20　垂水廃寺出土軒平瓦（２）
図版21　垂水廃寺出土軒平瓦（３）
図版22　垂水廃寺出土丸・平瓦
図版23　垂水廃寺出土瓦叩文様（１）
図版24　垂水廃寺出土瓦叩文様（２）
図版25　垂水廃寺出土瓦叩文様（３）
図版26　垂水廃寺出土瓦叩文様（４）
図版27　垂水廃寺出土瓦（製作技法）
図版28　垂水廃寺出土文字瓦
図版29　出土塼 1無文塼 2文様塼
図版30　塑像残片
図版31　石器・縄文土器・埴輪
図版32　弥生土器
図版33　須恵器・陶磁器

図版34　山田第１号窯跡出土平瓦

図版35　山田第１号窯跡出土丸・平瓦

図版36　山田第１号窯跡出土丸瓦

図版37　山田第１・３号窯跡出土須恵器

図版38　山田第３号窯跡出土須恵器

図版39　友枝瓦窯跡出土瓦

I　発掘調査にいたるまでの経過

垂水(たるみ)廃寺は、優雅な瓦当文様を有する新羅系古瓦の出土で著名な遺跡である。昭和４年吉村氏により謄写版パンフレットにて出土瓦を紹介したのが最初とされ、その後昭和10年に森貞次郎氏が出土瓦や寺の性格について史的に紹介、論考し、その性格を大宝二年の正倉院文書から「帰化人」系の人達に関係深い寺であろうと結語された。

このように、その特異な出土瓦により古くから注目されていたにもかかわらず、この間、遺跡の発掘調査は一度も行われなかった。

ところが近年、この地域にも緩やかであるが、田畑の宅地化が進行し初め、早急に発掘調査を実施し、遺跡の性格およびそこに埋蔵されている文化財の保護が地元の研究者を中心として叫ばれてきた。

そこで、新吉富村教育委員会は遺跡の重要性に鑑み、３カ年計画を立て、国・県の補助を受けて緊急発掘調査を実施することとなった。

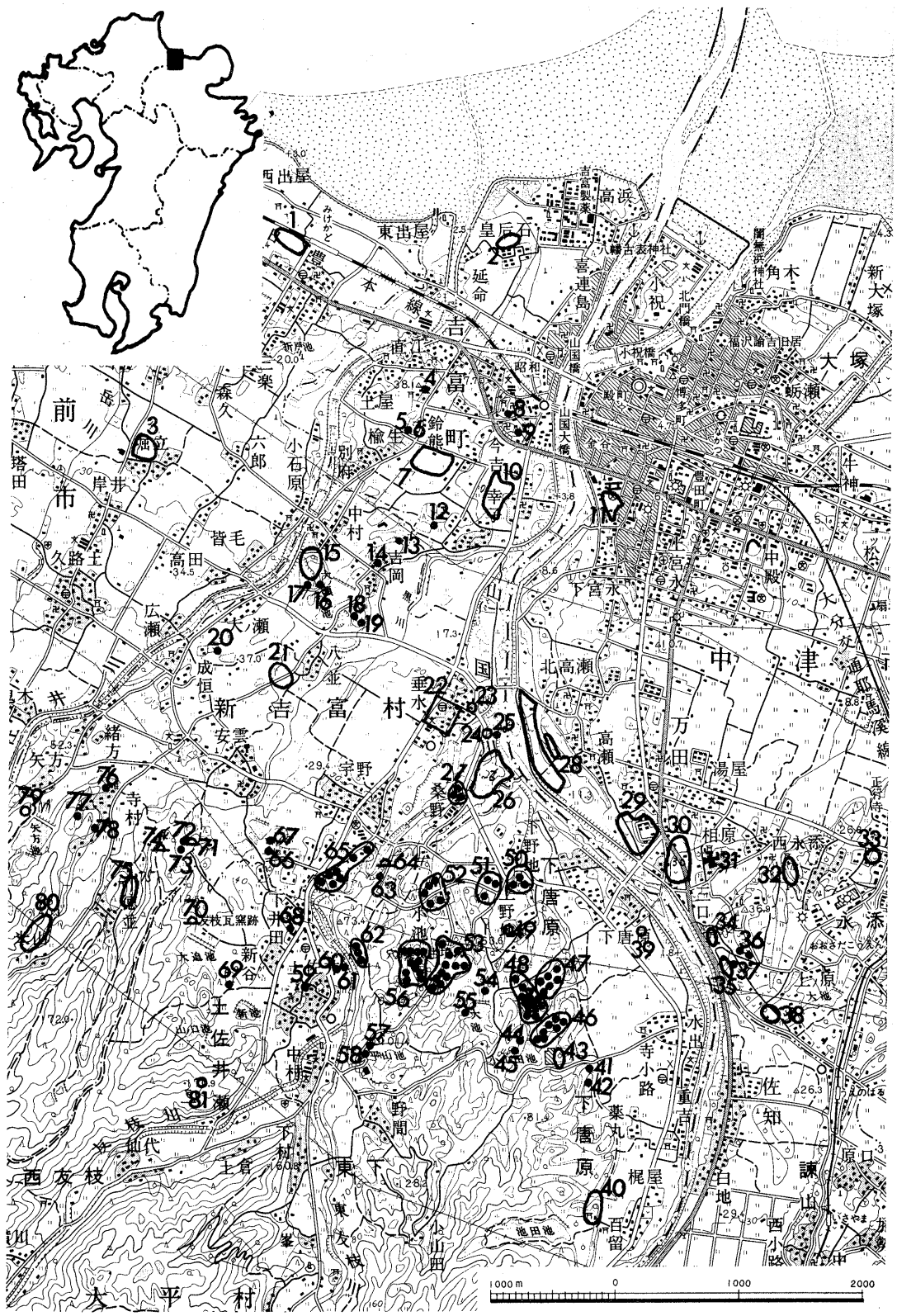
II　位置と環境

垂水廃寺は九州の東北部、瀬戸内海（周防灘）に面した中津平野の北西部に位置する。中津平野は山国川、駅館川等の河川によって作られた沖積平野であり、その南部は新洪積層の丘陵、更に耶馬溪溶岩台地へと続いている。垂水廃寺はこの中津平野の中の一大河川である山国川がその支流友枝川と合流する地点の西岸海抜20ｍ余を測る河岸段丘上に位置している。海岸までは約4.5kmある。

この地域の遺跡は旧石器時代のものはいまだ発見されていない。しかし今回の発掘調査において旧石器時代の可能性のある石器がいくつか出土している。縄文時代の遺跡ではっきりしているものは後期以降である。中津市東部の植野貝塚[(1)]、三万田式～御領式の土器と共に２個の土偶を出土した高畑遺跡[(2)]、そして垂水廃寺のすぐ付近に発見された垂水遺跡[(3)]などである。

弥生時代の遺跡としては垂水廃寺の南東数百ｍの下桑野遺跡において中期の土器を中心にかなり散布している。山国川東岸の上万田遺跡、三口遺跡では弥生時代後期の甕棺及び土器、古墳時代初期の古式土師器等が多量に出土している。また、今回の垂水廃寺の調査において前期（板付II式）から中期にかけての土器及び住居跡、貯蔵穴等が発掘された。

古墳時代になると、この地域は北西部の京都、行橋地域と東部の宇佐の二大勢力にはさまれ、いわゆる大古墳は、ほとんどなきに等しい。京都、行橋地域では石塚山古墳[(4)]、御所山古墳等を頂点に20基ばかりの前方後円墳や巨石墳が存在し、宇佐地域では赤塚古墳[(5)]、福勝寺（春日山）古墳を中心に10基ばかりの前方後円墳や大円墳が存在している。この垂水廃寺付近の地域には前方後円墳がかって１基あった。中津市の中央部の亀山古墳[(6)]である。この古墳は周溝をもち、全長62ｍ、周溝を加えると84ｍ



第1図　垂水廃寺周辺遺跡群

第1表　垂水廃寺周辺遺跡群地名表

地図番号	遺跡名	所在地	時代	概要	福岡県分布地図 1976	備考
1	三毛門遺跡	豊前市大字三毛門字塔の木外	弥生時代	散布地	150067	
2	皇后石遺跡	築上郡吉富町大字広津	〃	散布地	980014	
3	別府遺跡	豊前市大字堀立字別府	〃	散布地	150068	
4	鈴熊山古墳	築上郡吉富町大字鈴熊	古墳時代	円墳	980003	
5	楡生山古墳	〃　大字楡生	〃	円墳昭和２年調査　竪穴式石室(?)直刀、鉄槍、鉄鋤出土	980004	
6	楡生経塚	〃　〃	平安時代	経塚、楡生山古墳頂部に所在	980005	
7	今吉遺跡	〃　〃　、今吉	弥生時代	散布地	980006	
8	廣運寺山古墳	〃　大字広津	古墳時代	円墳、横穴式石室	980012	
9	天仲寺古墳	〃　〃	〃	〃　〃	980009	
10	矢頭田遺跡	〃　大字幸子	縄文時代	散布地	980008	
11	高畑遺跡	大分県中津市大字高畑	縄文時代～古墳時代	散布地縄文後期土器、土偶 弥生後期土器、須恵器		賀川光夫「縄文式文化」『中津市史』1965
12	篠塚山古墳	築上郡吉富町大字幸子	古墳時代	円墳、横穴式石室	980007	
13	大塚古墳	〃　新吉富村大字吉岡字大塚	〃	円墳、石室消滅	980004	
14	巨石塚	〃　字居屋敷	〃	巨石、横穴式石室のみ	970006	
15	雌熊山古墳群	〃　大字中村字日熊	〃	円墳群	970002	
16	日熊１号墳	〃　大字木ノ瀬字日熊	〃	円墳、横穴式石室	980027	
17	〃　２号墳	〃　〃	〃	〃　〃	980028	
18		〃　大字吉岡字雄熊	〃	〃　〃		
19	雄熊山古墳	〃　〃	〃	〃　〃	970009	
20	浅原古墳	〃　大字成恒字浅原	〃	〃	970029	
21		〃　大字八並	〃	包含地、断面に住居跡		
22	**垂水廃寺**	〃　大字垂水	白鳳時代～奈良時代	寺城２町四方	970010	森田勉『垂水廃寺発掘調査概報』1974
23	貴船畑遺跡	〃　〃 字貴船畑	縄文時代	散布地	970011	昭和23年発掘垂水遺跡のこと
24	牛頭天王遺跡	〃　〃 字山ノ下	〃	貝塚	970012	
25	向山古墳	〃　〃　字向	古墳時代	円墳	970013	
26	下桑野遺跡	〃　〃 字下桑野	弥生時代	散布地	970014	
27	上桑野古墳群	〃　〃 字上桑野	古墳時代	円墳、箱式石棺		
28	高瀬遺跡	大分県中津市大字高瀬	弥生時代～古墳時代	散布地		賀川光夫「弥生式文化」『中津市史』1965
29	上万田遺跡	〃　大字万田字三口	〃	包含地弥生後期甕棺、土師器		
30	三口遺跡	〃　〃	〃	〃　弥生終末期土器 土師器		
31	相原廃寺	〃　大字相原	白鳳時代～奈良時代	金堂跡　基壇、塔心礎、他礎石		賀川光夫『豊前中津市相原廃寺調査報告』1955
32	台遺跡	〃　大字永添字台	奈良時代～平安時代	散布地		
33	永添中園遺跡	〃　〃　字三口	〃	包含地		
34	坂手前横穴	〃　大字相原字坂手前	古墳時代	横穴 径2.5ｍのほぼ円形の玄室		
35	坂手隈横穴群	〃　〃 字坂手ノ下	〃	〃 13基、消滅		賀川光夫「古墳時代」『中津市史』1965
36	相原古墳１・２号	〃　〃　字大久保	〃	円墳、横穴式石室、消滅		
37	幣旗邸古墳	〃　〃	〃	〃　径７ｍ、高さ２ｍ		
38	上ノ原遺跡	〃　大字永添字上ノ原	〃	断面に住居跡遺構		
39	川ゐ上遺跡	築上郡大平村大字下唐原	弥生時代	甕棺、箱式石棺群	960049	
40	百留横穴群	〃　大字百留	古墳時代	横穴46基、装飾(円、木ノ葉)をもつものあり	960116～960161	
41	四ツ塚山１号横	〃　大字上唐原		円墳、横穴式石室	960109	

地図番号	遺跡名	所在地	時代	時代	福岡県分布地図 1976	備考
42	四ツ塚山2号墳	築上郡大平村大字上唐原	古墳時代	円墳、横穴式石室	960110	
43	上唐原横穴群	〃 〃	〃	横穴、4基	96105〜960108	
44	小山田1号墳	〃 大字下唐原	〃	円墳、横穴式石室	960102	
45	小山田2号墳	〃 〃	〃	円墳、横穴式石室	960103	
46	皿山古墳群	〃 〃	〃	〃 7基 〃 5号のみ複室	960093〜960099	
47	カネツカ古墳群	〃 〃	〃	〃 6基	960087〜960092	
48	上の熊古墳群	〃 〃	〃	〃 15基横穴式石室	960072〜960086	
49	上野池八幡宮遺跡	〃 〃	弥生時代〜古墳時代	箱式石棺群	960048	
50	能満寺古墳群	〃 〃	古墳時代	円墳3基、横穴式石室	960044〜960046	
51	下野池古墳群	〃 〃	〃	〃 3基 〃	960041〜960043	
52	小池古墳群	〃 〃 字小池	〃	〃 5基 〃	960036〜960040	
53	穴ケ葉山古墳群	〃 〃	〃	〃 11基 1号装飾古墳、複室 2号複室	960061〜960071	
54	新池南古墳	〃 〃	〃	〃 〃	960100	
55	新池西古墳	〃 〃	〃	〃 〃	960101	
56	ガサメキ古墳群	〃 〃	〃	〃 11基 〃	960050〜960060	
57	平山2号墳	〃 大字東下	〃	〃 〃	960028	
58	〃 1号墳	〃 〃	〃	〃 〃	960027	
59	土佐井古墳	〃 大字土佐井	〃	〃	960004	
60	向原1号墳	〃 〃	〃	〃	960005	
61	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	960006	
62	鳴向山古墳群	〃 〃	〃	〃 3基	960007〜960009	
63	桑野古墳	築上郡新吉富村大字字野字桑野	〃	〃 消滅	970016	
64	桑野原瓦窯跡	〃 〃 〃	奈良時代	丸瓦、平瓦出土、消滅		
65	宇野古墳群	〃 〃 字塚原	古墳時代	円墳7基 横穴式石室	970017〜970023	
66	岩木山1号墳	〃 〃 字岩木	〃	〃	970024	
67	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	970025	
68	新谷古墳	築上郡大平村大字土佐井	〃	〃	960002	
69	尻無古墳	〃 〃	〃	〃	960003	
70	**友枝瓦窯跡**	〃 〃	白鳳時代〜奈良時代	地下式有階有段登窯 2(+2?)基	960001	弘津史文「瓦窯址発見」他『考古学雑誌』12－3、1921
71	**山田窯跡群**	築上郡新吉富村大字安雲字テルヒ	〃	須恵器窯跡1基、瓦陶兼業(?)窯跡2基	970057	
72	山田1号墳	〃 〃 〃	古墳時代	円墳、横穴式石室線刻	970058	
73	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃		970059	
74	山田須恵器窯跡群	〃 〃 〃	〃	登り窯、7世紀	970060	
75	徳並横穴群	〃 大字尻高字丸尾	〃	横穴3基 1号は敷石がある	970053〜970055	
76	寺村1号墳	〃 〃 字木楽寺	〃	円墳、横穴式石室	970039	
77	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃		970040	
78	鬼塚古墳	〃 〃 字迫の山	〃	横穴式石室	970041	
79	辻山遺跡	〃 大字矢方字辻山	縄文時代	散布地、石器	970036	
80	穴井横穴群	〃 大字尻高字穴井	古墳時代	横穴、9基	970042〜970050	
81	経塚山遺跡	築上郡大平村大字土佐井	平安時代	銅製経筒、経巻8本、香合	960011	

に及ぶ大きな古墳であったが、残念ながら現在は破壊されてしまった。中津市地域では他に顕著な古墳はない。築上郡地域では大古墳はないが小古墳が多く存在している。その中で特徴的なものとしては、穴ケ葉山１号墳、山田１号墳、百留横穴群、巨石塚がある。穴ケ葉山１号墳は複室の横穴式石室を内部主体とする円墳であり、この石室は線刻によって木の葉、鳥、虫、魚、人物、旗、格子目が描かれている。山田１号墳は、垂水廃寺の瓦供給窯の１つである山田瓦窯跡のすぐ近くにある。内部主体は単室の横穴式石室であり、この石室にも線刻で木葉文、水鳥などが描かれている。その文様のタッチは穴ケ葉山１号墳のものと類似する点がみられる。百留横穴群は、穴ケ葉山古墳群などの中心部の古墳群から南にやや離れた所に存在している。単室の平凡な横穴であるが全部で46基確認され、その中の１基に赤の彩色によって円文、木葉文が描かれている。巨石塚は、前述の穴ケ葉山１号墳から北西方向約２～３kmの地点にあり、現在は墳丘がなくなり石室のみ残っているが、巨石を利用した大きなものである。また山田１号墳は山田瓦窯跡のすぐ近くにあるが、この付近は瓦窯のみでなく須恵器の窯跡群もあり、その時期も山田１号墳と同じ６世紀末から７世紀前半代のものもあることは興味のある点である。

律令時代に入ってこの地域には豊前でも早い時期に２つの寺院が出現する。一つが下毛郡の相原廃寺であり、もう一つが上毛郡の垂水廃寺である。相原廃寺は山国川東岸、垂水廃寺より南東約2.5kmの所にあり[(7)]、現在原位置の礎石を２個もった基壇が残っており、金堂跡に推定されている。他に移動した塔心礎、多数の礎石がある。相原廃寺の特徴はその出土瓦にある。軒先瓦はいわゆる百済系単弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦が発見され、７世紀後半に位置づけられている。この廃寺の供給瓦窯としてはこの廃寺から東南約６km離れた所に位置する伊藤田瓦窯跡が確認されている。この瓦窯跡の近くには須恵器の大窯跡群があり、須恵器と同じ同心円文の叩きをもつ瓦も出土している[(8)]。そしてこの瓦窯跡及び相原廃寺で出土している単弁瓦の中に垂水廃寺出土の単弁瓦と同形の瓦がある[(9)]。

垂水廃寺は百済系古瓦と新羅系古瓦を出土する寺院として注目を集めていたが、寺跡が垂水の集落の中にあるため遺構は全くわかっていなかった。その瓦を生産している瓦窯跡として大正時代から友枝瓦窯跡が知られ、垂水廃寺から南西約2.5km離れた所に、それは位置している。友枝瓦窯跡の構造は地下式有階有段登窯で、瓦は垂水廃寺と同じ軒瓦や特殊叩文の平瓦などを出土している。全体で何基あるか詳らかではないが、２基は確認され、他に２基あるのではないかと推定されている。友枝瓦窯跡の他には近年発見された山田窯跡、桑野原瓦窯跡がある。山田窯跡は垂水廃寺の西南西約2.3kmの地点にあり瓦は軒先瓦はなく行基葺丸瓦と平瓦のみである。桑野原瓦窯跡は垂水廃寺の南約1.2kmで３つの瓦窯跡の中では一番近い。窯は遺存していないが、丸瓦、平瓦が出土している。

また文献では正倉院文書中の大宝２年の戸籍残簡から、渡来系氏族との関係が注目されている。

以上垂水廃寺付近の遺跡を概観してきたがこの上毛郡、下毛郡の地域は古墳時代には大きな力をもをもっていなかったにもかかわらず、歴史時代に入って、九州の他地域に比して早い時期に寺院が２つも建立されている。これは先にのべた渡来系氏族との関係の上で注目されるべき事柄であろう。

註

(1) 賀川光夫「植野貝塚」『中津市史』1965

(2) 賀川光夫「高畑遺跡」『中津市史』1965
(3) 「垂水」『北九州古文化図鑑』1950
(4) 島田寅次郎「石塚山の古墳」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第1輯 1925
(5) 小田富士雄「古墳時代」『宇佐市史』1975に主要な古墳は詳しく説明されている。
(6) 賀川光夫「亀山古墳」『中津市史』1965
(7) 賀川光夫『豊前中津市相原廃寺調査報告』1955
(8) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・二—九州発見朝鮮系古瓦の研究（三)—」『九州文化史研究所紀要』20 1975.3
(9) 賀川光夫「伊藤田瓦窯跡」『中津市史』1965

III 遺　　跡

1. 調査の概要

遺跡のある新吉富村一帯は古代の条里遺構と指摘されていた所で、方格地割がある程度整然とし垂水廃寺のすぐ北に「尻ケ坪」の坪名も遺存している。条里方向はN－30°－Eの傾きを持つ。

この条里方向と方位を異にする地域を調べると方2町の四辺は略条里方向と同方位であるがその中に囲まれた地域の畦畔の方向が大きく乱れ、また、この地域から今日まで多量の瓦が発見されていることからこの地域を一応寺域と考え、調査を開始することにした。

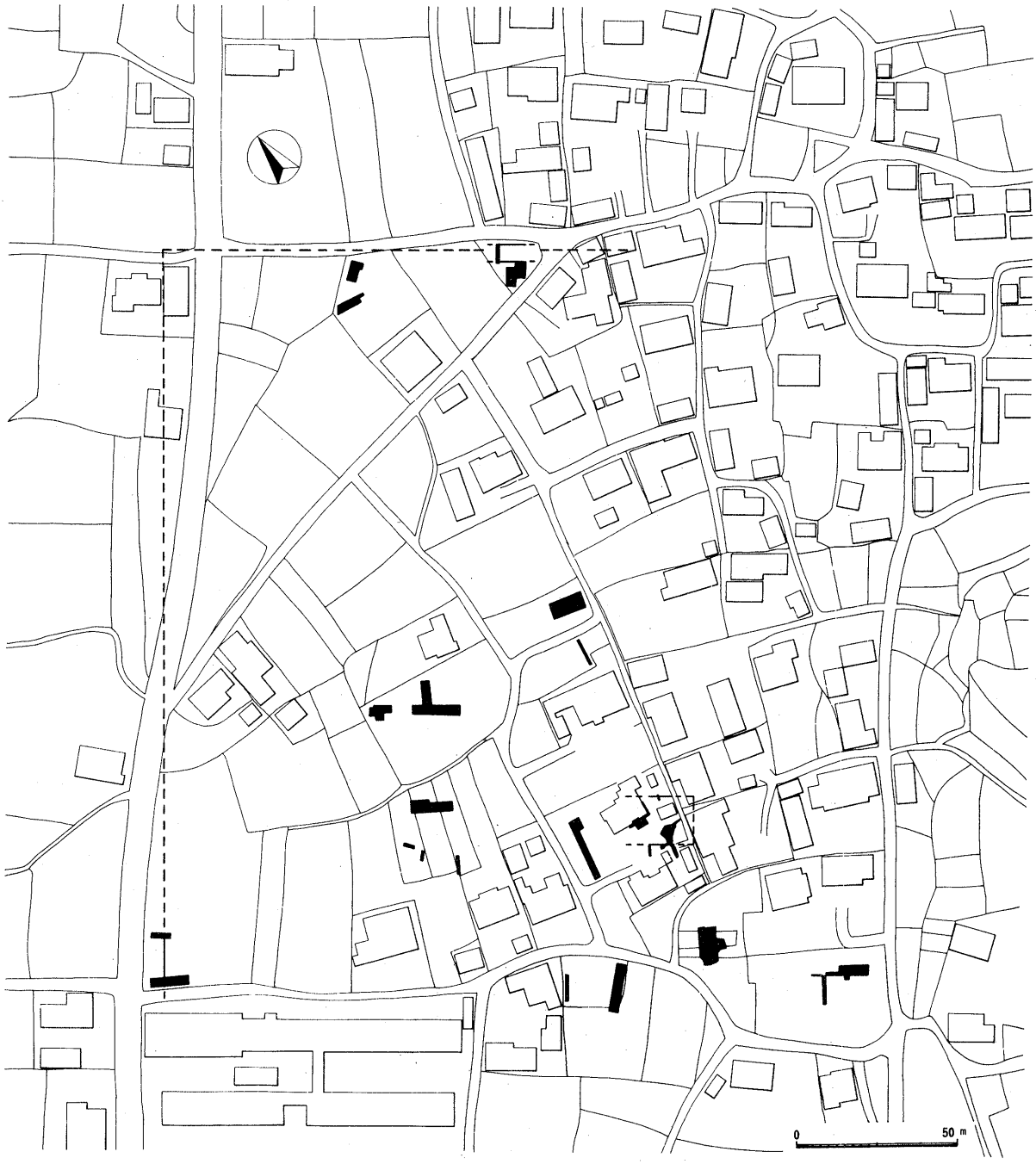
推定寺域が2町四方と広大なため地籍図をもとに、I・II・III・IV区に大きく分割し、更にそれらを地番毎にA・B・C……のアルファベットで地区を標示することにした。

遺跡内の現況は西から東、南から北へ傾斜を持っている。また、I区西半、II区東半が他地区と比して若干高くなっている。また、I・III区の大部分は宅地化され、調査の困難が予想された。

第2表　垂水廃寺（6KTM)・山田窯跡発掘調査一覧表

調査次数	調査地区		面積 m²	期間	備考
第1次調査	6KTM	I－B	11	1974・3・4～1974・3・31	寺域確定の調査
		II－S	44		
		II－C	90		
		IV－B	50		
		IV－F	38		
第2次調査	6KTM	I－O	48	1975・2・24～1975・3・13	寺域南限および西半部の調査
		I－S	53		
		II－H・I・J	57		
第3次調査	6KTM	I－O	15	1975・7・1～1975・7・4	改築に伴う事前調査
		I－I・J	68	1976・2・17～1976・3・24	古墳および寺跡の調査
		I－O	30		
		IV－A	8		
		IV－H	37		倉庫建設前の緊急調査
	山田窯跡		70		1・2号は瓦窯 3号は須恵窯

第2図　地　区　割　図（橋本啓子製図）



第3図　トレンチ配置図（橋本啓子製図）

第１次調査

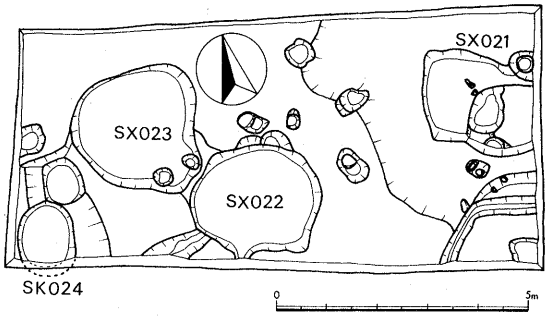
畦畔の乱れた地域方２町が一応寺域と考えられるので、Ⅰ－Ｂ区・Ⅱ－Ｓ区・Ⅳ－Ｆ区にそれぞれトレンチを設定するとともに、寺域南半中心地域が若干高いので、方１町の場合も想定してⅡ－Ｃ区、Ⅳ－Ｂ区にもトレンチを設定した。

Ⅰ－Ｂ区　南北・東西のトレンチを各１本設定した。調査区の西半は、表土直下は地山の礫層で、この礫層は東に向って下がっている。遺構は存しなかった。

Ⅱ－Ｃ区　２本のトレンチを設定した。第１トレンチでは表土下1.5ｍまで下げたが、その間の層に瓦や中国輸入陶磁器類を発見したのみで遺構はなく、第２トレンチでは、表土下0.7ｍで地山の礫層に達し、その地山に掘り込まれたピット群を発見したが、出土遺物もなく、またまとまりもないことから寺院とは無関係のものと考えられる。

Ⅱ－Ｓ区　南西部に先ず３ｍ×11mの東西方向のトレンチを設定した。床土下に２層の盛土層が認められ、その下に地山の土砂と相違した南北に延びる黄褐色のブロックを多量に含む茶褐色土層を検出した。そこで、更にその層が北に延びるかどうか確認するために第２トレンチを設定した。その結果、第１トレンチと同様の層を検出した。このことから、この層は寺の西を限る何らかの施設の積土の最下段の一部であろうと推定される。

Ⅳ－Ｂ区　表土・床土を除去すると直に地山の礫層であった。遺構として検出したのは弥生時代前期後半の貯蔵穴１のみである。しかし、このトレンチ東南隅からトレンチ外にかけて多量の瓦堆積層が認められたことから、このトレンチ南に何等かの遺構の存在が考えられる。



第４図　Ⅳ－Ｂ区遺構実測図

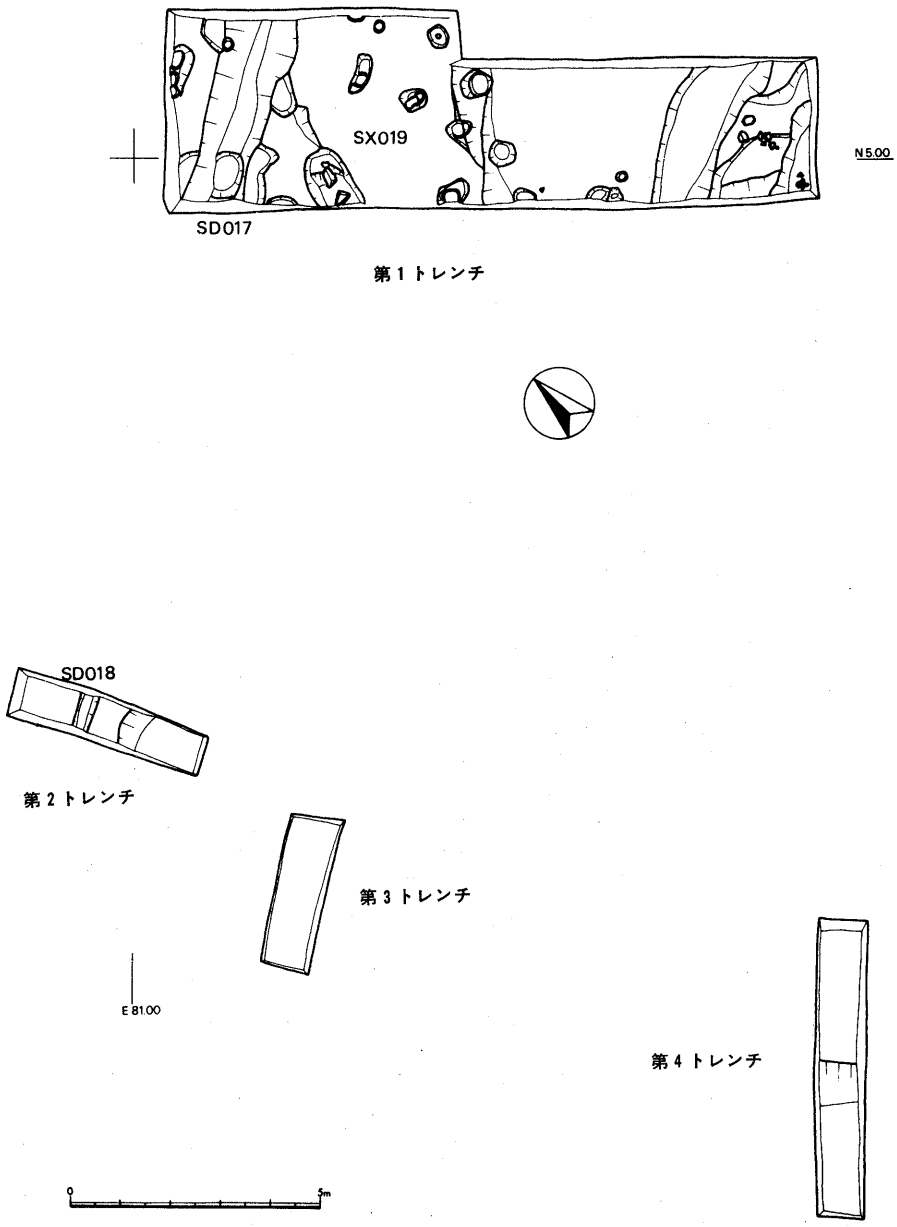
Ⅳ－Ｆ区　調査区中央部に第１トレンチを設定した所、トレンチ北端で東西に走る溝を１本検出した。この溝を追求するため西側に南北のトレンチを設定した。その結果、さきのそれに続く溝とその北側に東西の溝１を検出した。この両者の溝に挟まれた部分に積土様の土層が認められた所から、これは寺域北を限る施設の一部であると考えられる。

第２次調査

第１次調査で、寺域を限る西・北の遺構を得たので、今次調査の主眼を南限施設と建物の追求に置くことにした。建物の追求は、寺域東半部の大部分は住宅化しているので西半部に重点を置き調査を行なうこととした。

Ⅰ－Ｊ区　高さ１ｍ前後を測り東西に狭長なⅠ－Ｊ区の性格を知るため東西のトレンチを入れた所、この隆起は石室を内部主体とする古墳であることが判明した。今次調査では時間の余裕がないため次回に調査することとし埋め戻した。

Ⅰ－０区　この区の東部分で古くから多量の古瓦が採集されていることと大きな花崗岩が数個あることから建物の存在が考えられていた地区である。東半分は住宅と築庭のため、西側の畑地にトレン



第5図　II－H・I・J区遺構実測図

チを設定することにした。その結果、建物は検出されず、トレンチ北部では、地表下0.4m～0.5mで地山に達し、それ以外の部分は深さ約1.7mまで大きく攪乱を受けていた。その攪乱土中から塑像残片を検出したことは注目に値する。

I－S区　当区東端および西端に南北のトレンチ各1を設定し調査を開始した。その結果、表土下約1.0mで東西の溝を検出した。この溝からは古墳時代の須恵器、瓦および龍泉窯系の青磁椀片を検出した。

II－H・I・J区　この区はI－O区と対象地域であることから建物の存在が予想された地区である。

調査の結果、北東から南西に走る溝と多数のピット群を検出したのみで、寺院関係の遺構は存しなかった。この地域もⅠ－Ｏ・Ⅱ－Ｃ区と同様に鎌倉期に地下げと整地を行ったと考えられ、陶磁器類を含んだ層が厚く堆積していた。出土遺物の中に完形の丸瓦があり、また、すぐ西隣のⅡ－Ｎ区のブドウ畑からほぼ完形の平瓦が出土している所から、過去に建物が存していたのではないかと考えられる。

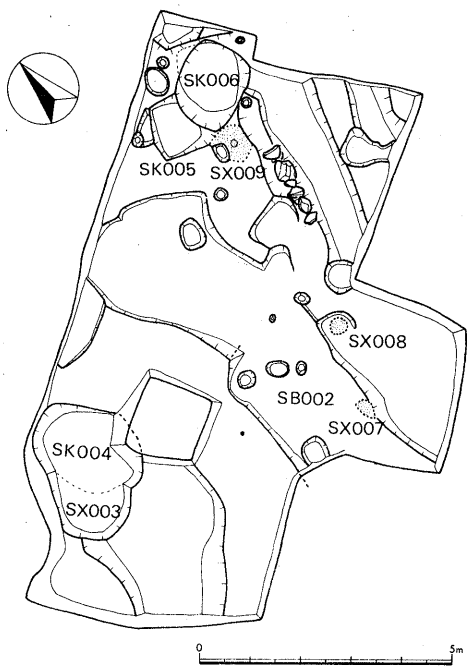
第３次調査

本次調査は、２回行った。第１回目はⅠ－Ｏ区の住宅建替え時に若干の発掘を伴った立会調査で、２回目は２～３月にかけて行った調査である。

最終年度であるため、寺跡の調査と昭和43年に発見された山田瓦窯の調査も合わせて実施することにした。

Ⅰ－Ⅰ・Ｊ区　昨年度確認された古墳の調査を実施することにしていたが、墳丘は造成され破壊されてしまっていた。

そこで、その古墳の痕跡を探し、規模を確認するためトレンチを設けた。その結果、古墳関係の遺構は残っていず、検出した遺構は弥生時代中期の住居跡と弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴と炉跡および時期不詳の溝である。なお、攪乱土中から古墳に使用されたと考えられる埴輪片を数点発見した。



第６図　Ⅰ－Ⅰ・Ｊ区遺構実測図

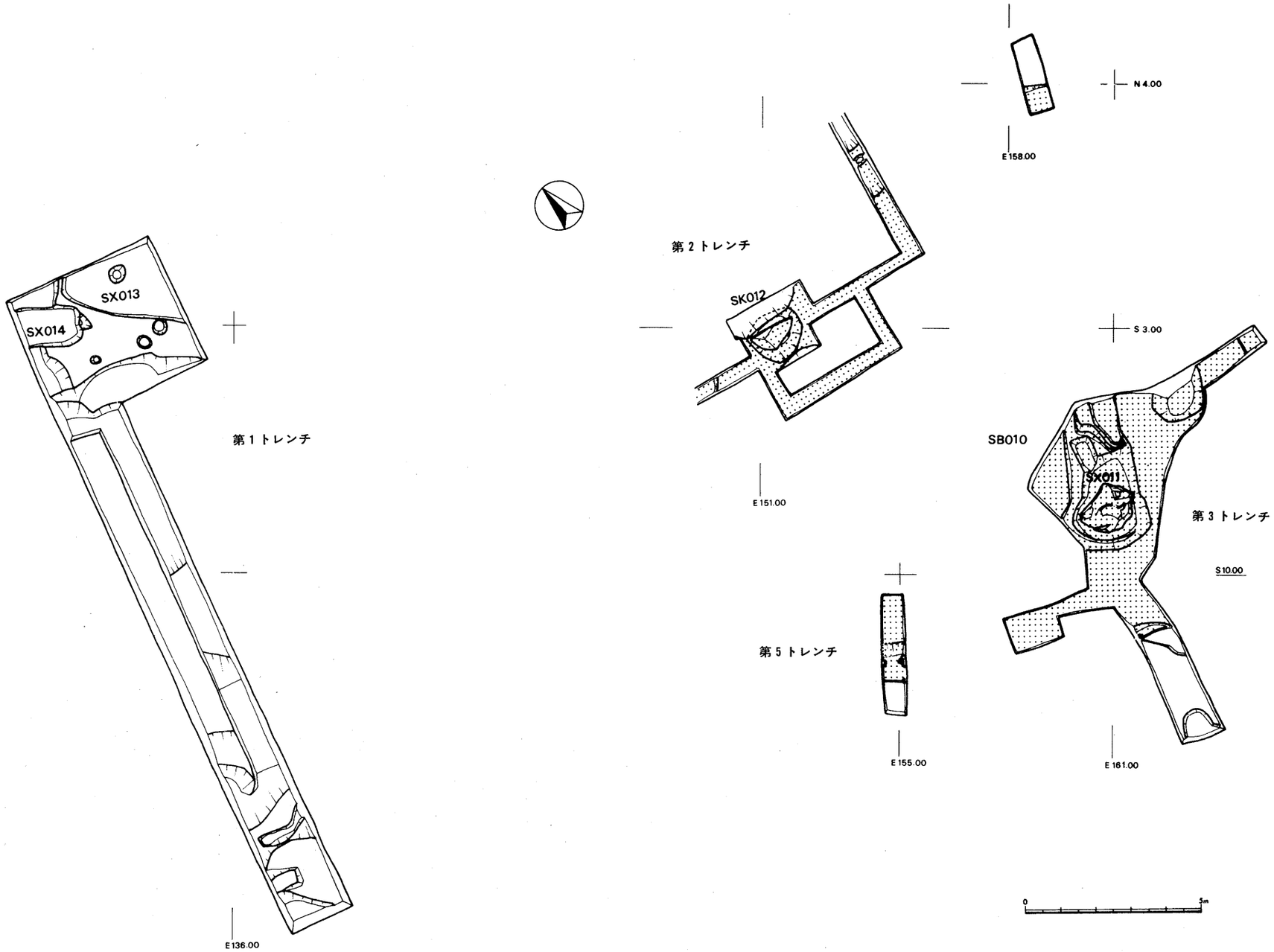
Ⅰ－Ｏ区　この区の調査は昨年度１回、本年度２回計３回実施した。予想されていたとおり、今回の調査で、建物の基壇を検出した。礎石は落とし込まれ原位置では検出できなかった。この落とし込んだ穴から龍泉窯系の青磁と同安窯の椀の破片が発見されたことから鎌倉時代に破壊されたと考えられる。基壇を検出したのであるが、現在この地が住宅と内坪が造られているため十分なる調査はできなかった。

Ⅳ－Ａ区　第１次調査のⅣ－Ｂ区のトレンチ南西端部で瓦層を発見し、またⅢ－Ｙ区から完形の軒丸片が出土していることからこの区に南北トレンチ１本を設け発掘調査を実施したが、表土直下は地山の礫層で遺物は１点も出土しなかった。このことから、Ⅳ－Ｂ区で検出された瓦層は二次的に集積されたものか若しくはⅣ－ＡとⅣ－Ｂとの間に何らかの遺構が存しているのか今次調査では明らかにし得なかった。今後の追求課題である。

Ⅳ－Ｈ区　倉庫建設前の緊急調査として実施した。この区はⅣ－Ｆ区で検出した東西に延びる遺構の延長線上にあたることから、それの調査を行うと共に、倉庫基礎掘り時に発見された礫層の性格を追求することを目的としてトレンチを２本設定した。

その結果、礫層は江戸時代末期と考えられる盲暗渠で北限遺構を推定した部分までおよんでいたため寺院関係の遺構は検出できなかった。

山田窯跡　２基の瓦窯跡と１基の須恵器窯跡の調査を実施した。1・2号窯は瓦窯で、１号窯は焼成



第7図　I－O区遺構実測図

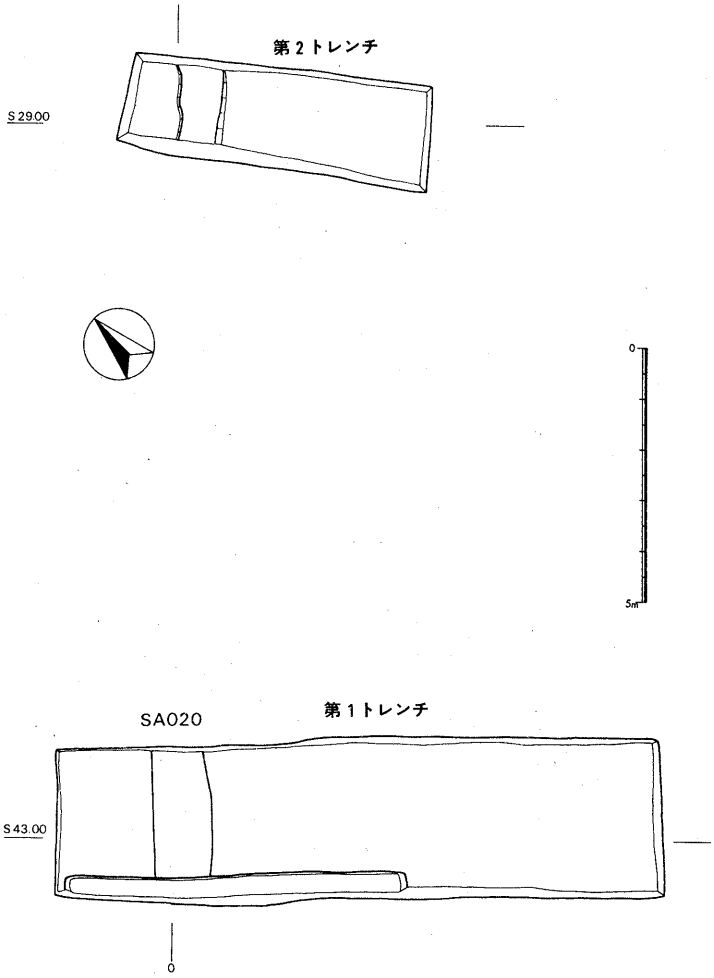
部が比較的良く残り、１回改修していた。２号窯は焼成室の床が一部残存しているのみできわめて遺存状態は悪い。３号窯は須恵器窯で、２回改修され最後は焼成途中で天井・壁が崩れたと考えられ多量の須恵器を検出した。

2. 遺　　構

寺跡関係で検出した主要な遺構は、東方建物ＳＢ010、西限遺構ＳＡ020、北限遺構ＳＢ025および南限遺構に影響されて掘られたと考えられるＳＤ015がある。

ＳＢ010（第７図、図版２・３）　寺域東側で検出した礎石を持つ建物である。

住宅改築時に実施した第２トレンチの調査で、礎石を落し込んだ穴ＳＸ012および多量の瓦を検出していたので、第３次の建物の調査はこのＩ－Ｏ区の東半に主眼を置くことにした。第３トレンチでは第２トレンチで検出したと同様な穴ＳＸ011および版築のある基壇を検出した。基壇版築は先ず地山を掘り込み、そこから積み上げていくいわゆる掘込地業を行っている。現存基壇高は0.7ｍ前後を測る。基壇の南端を第3トレンチで確認したので、北端を調査するため第４トレンチを設定した。その結果、基壇南端から15.8ｍ北の地点で、北側の掘り込み跡と基壇積み土を検出した。そこで、建物の方向を知るため第５トレンチを内坪の東側に接して設けた。その結果、建物の掘り込みが予想された地点よりも更に南に積み土が延び、そしてこの積み土は３段にわたって下っていることがわかった。この落ちのうち最初の落ちと第３トレンチの基壇南端を結ぶとＳＡ020と同一方向になるので、後世削られていることを考慮に入れても、この段落ちを階段の一部と考えることが出来る。これを階段の一部と考え、SA020

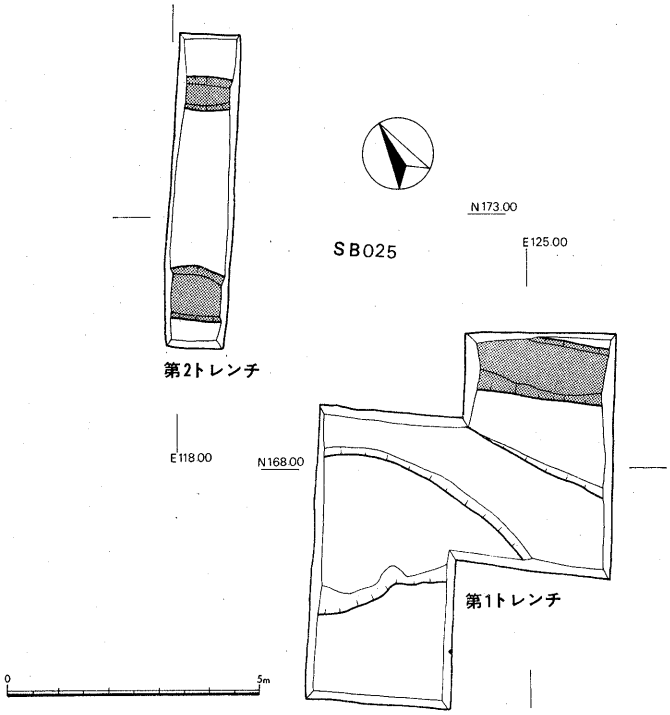


第８図　ＳＡ020 遺構実測図

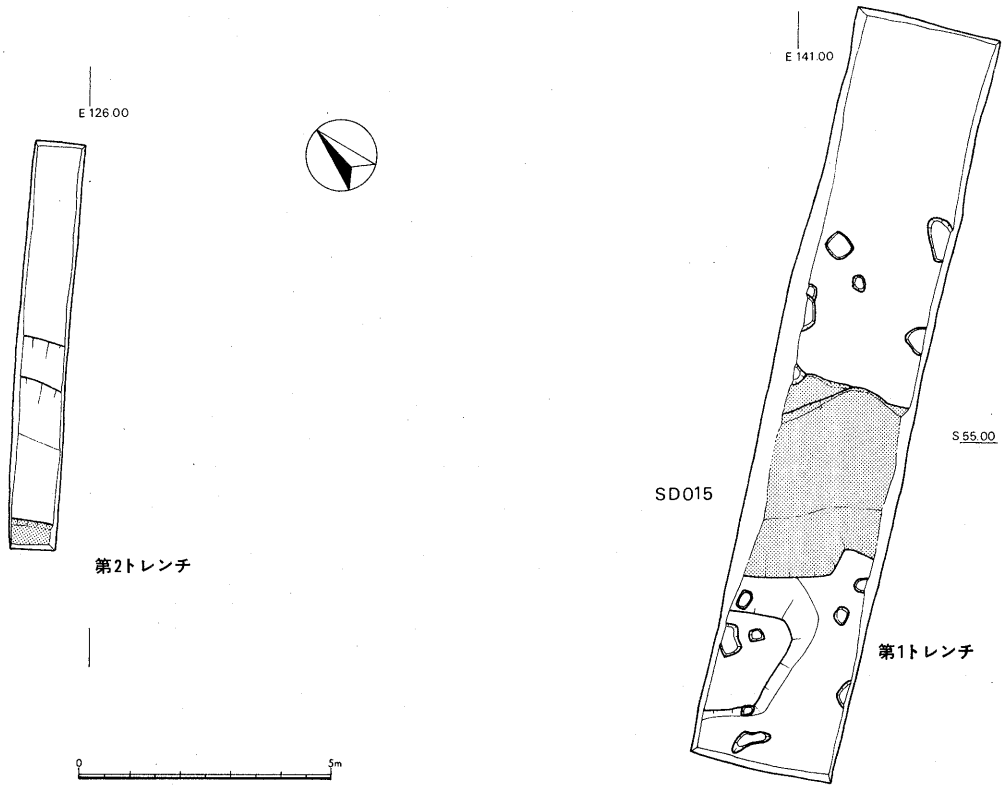
と建物が同一方向であると考えると、南北長は約16m、東西長は、第1・2・3トレンチから16m以上33m以下であることがわかり南面する東西棟の建物ということができ、その位置から金堂跡ではないかと考えられる。

ＳＡ020（第８図、図版４）第１トレンチでは幅1.2ｍ、厚さ2 ㎜の南北に走る積み土、第２トレンチでは幅0.8ｍ、厚さ２㎜の積み土の残存層を検出した。この両トレンチから検出した南北に走る層は幅1.2ｍ以上の幅を有する築地の基壇の最下層ではないかと考えられる。

ＳＢ025(第9図、図版5）南北に

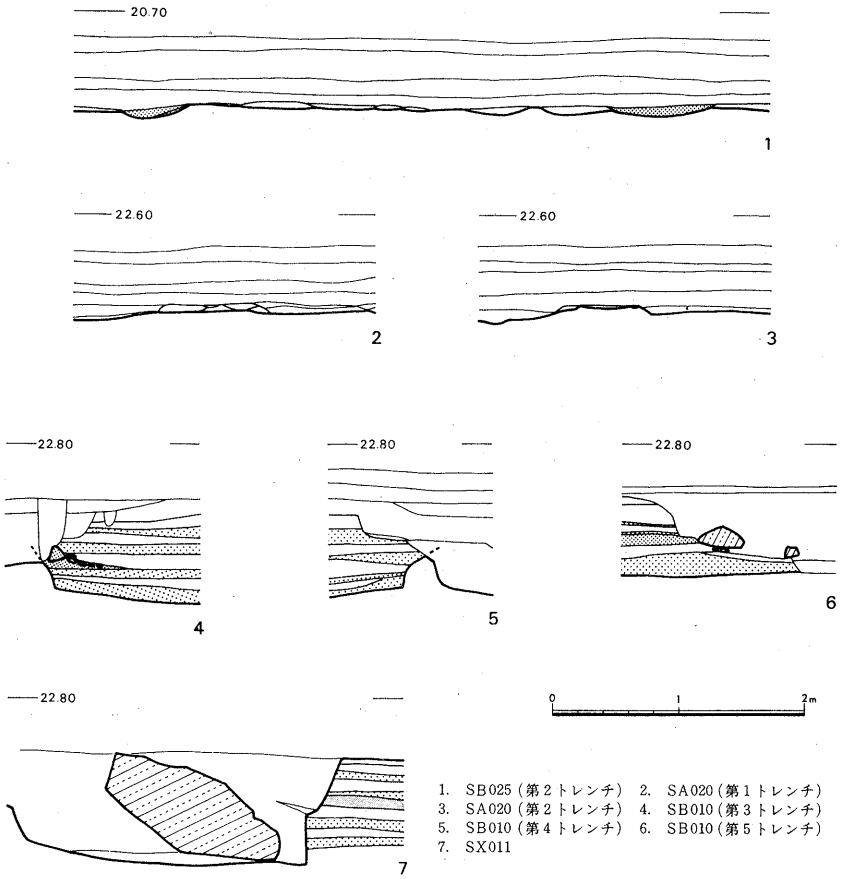


第９図　ＳＢ025 遺構実測図



第10図　ＳＤ015 遺構実測図

溝を配した東西に走る遺構で幅3.3ｍを測る。この溝に挟まれた部分には、地山の灰黄色礫層とは異質な黄色の斑点が入った暗茶色土層が厚さ3㎝前後に積まれている。それは、寺域北限中心地域にあたることから北門の基壇の最下層と考えられる。第2トレンチで検出した北溝は幅0.6～0.7ｍ、深さ6㎝を測り、最下層には暗灰砂が堆積している。南溝は、第1トレンチでは幅1.2ｍ、深さ17㎝、第2トレンチでは幅1.0ｍ、深さ7㎝を測る。溝底は東が低く、西が高い。両溝から遺物は出土しなかった。



第11図　土層図および断面図

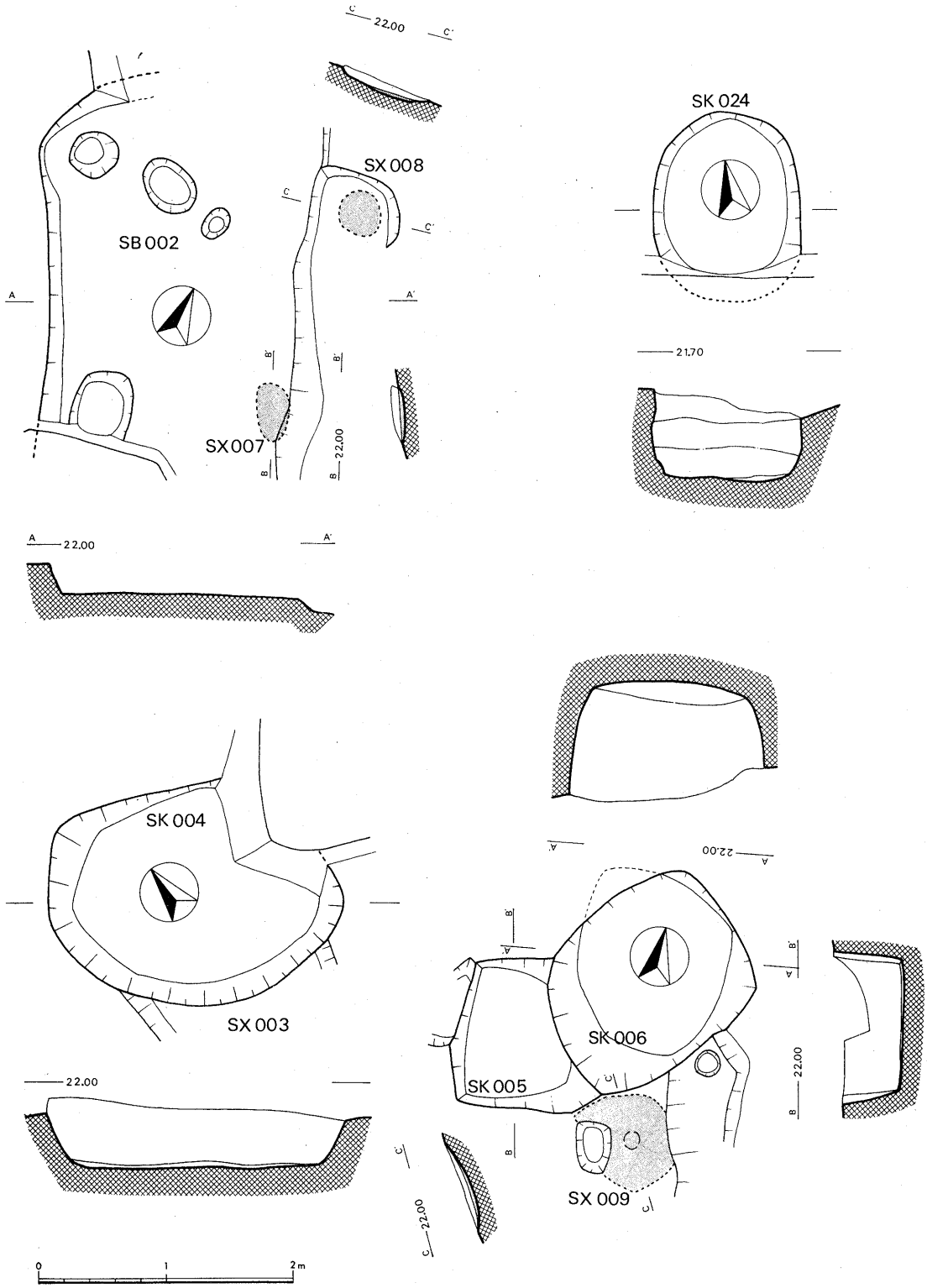
ＳＤ015（第10図、図版５）　南限施設の検出を目的としてＩ－Ｓ区に南北のトレンチを２本設定したのであるが、直接寺跡と関係ある遺構なく、鎌倉時代の東西溝を検出した。この東西溝は、第１トレンチでは幅約1.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。第２トレンチでは、この溝の北岸を検出したのみであるが、第１トレンチの北岸と第２トレンチのそれを結ぶと溝は南に迂回していることがわかる。このことは、北にその当時何らかの障害物があったため溝は迂回したとも考えることができ、またこのことは北側の道路が北に迂回していることからも妥当性を持つと考えられる。この両者に挟まれた地域は、寺域中心南端にあたることから南門およびそれに接続する築地跡があったのではないかと思われる。

3.　寺跡以外の遺構

寺跡調査時に検出した寺院関係以外の主な遺構としては、弥生時代の住居跡１・貯蔵穴４・炉跡３と古墳１および江戸時代の暗渠である。

(1)　弥生時代の遺構（第12図、図版６・７・８）

ＳＢ002・ＳＫ004･5･6・ＳＸ007･8･9 はＩ－Ｉ・Ｊ区で、ＳＫ024はⅣ－Ｂ区で検出した。



第12図　弥生時代遺構実測図

ＳＢ002　中期前半から中期中頃の竪穴住居跡で、北壁と西壁の一部が残存しているのみである。

ＳＫ004　発掘区南端で検出した不整円形を呈す貯蔵穴で、南側のＳＸ003を切っている。長径2.3ｍ、短径1.7ｍ、深さ0.5ｍを測る。

ＳＫ005　南北1.2ｍ、深さ0.55ｍを測る方形の小型貯蔵穴である。ＳＫ006によって東壁を切られていることから前期末を下らないと考えられる。

ＳＫ006　上辺1.6ｍ×1.2ｍ、下辺1.3ｍ×1.2ｍ、深さ0.9ｍを測る隅丸長方形の貯蔵穴で、上辺と下辺はその方向を異にしている。前期末から中期初頭である。

ＳＫ024　上辺1.4（？）ｍ×1.15ｍ、下辺1.0ｍ×1.2ｍ、深さ0.7ｍを測る長円形の貯蔵穴で、中位で若干脹む。礫層に切り込んでいるため内部は凹凸が激しい。前期後半のものである。

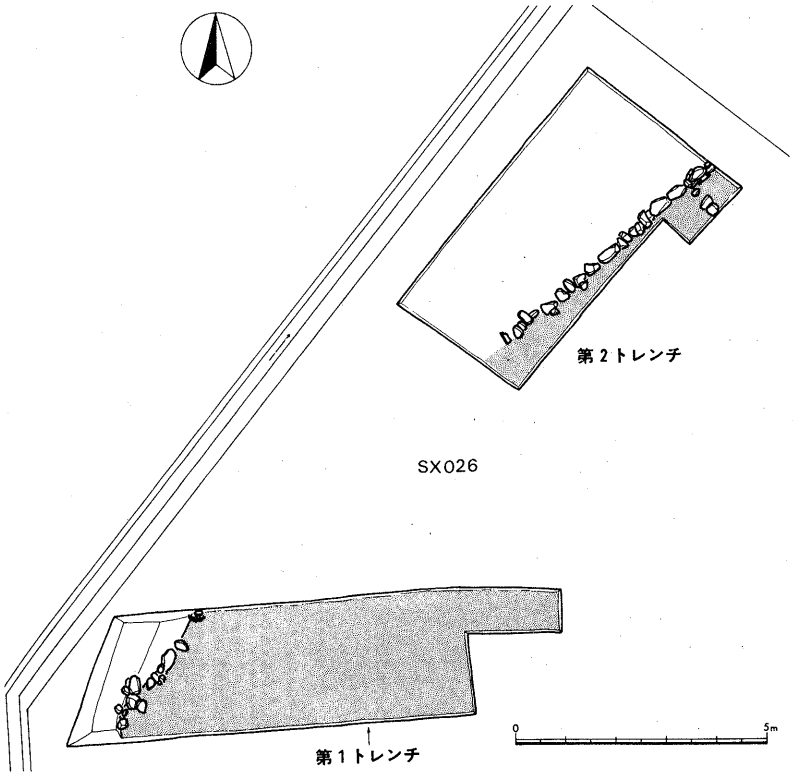
ＳＸ007･8･9　全て底は丸味を有し、内部は赤化している炉跡である。ＳＸ007かＳＸ008のいずれかがＳＢ002と伴うと考えられる。

(2)　古　　墳

破壊されてしまったため規模や構造は知り得ないので、第２次調査時の所見を記述する。川原石を小口積みにした小規模な石室で、小口面全体に赤色顔料を塗布していた。長さは知り得ないが、幅は約0.8ｍ程度であった。

この古墳の位置は推定金堂跡の南に位置し、寺域内にあることになる。このような例はきわめて珍らしく管見の範囲では若狭国分寺・大宅廃寺・大安寺等があるだけである。

(3)　江戸時代の遺構



第13図　ＳＸ026遺構実測図

寺域西北部（Ⅳ－Ｈ区）で検出した南西から東北に走る盲暗渠である。この遺構は西側の一部を検出したのみであるが、その構造は西端を乱石積にし、その内側最下に礫を高さ20cm～30cm前後に充塡し、その上に黄色の粘質土を貼り付けて目張りとし、更にその上に灰茶色土層および暗茶色粘質土層を積んでいる。水は南西から東北に流れる。何の目的で、何に使用したのか不明である。

Ⅳ 遺　　物

1. 瓦

調査の結果瓦塼類は軒丸瓦（２種)、軒平瓦（２種)、丸瓦、平瓦、文字瓦（３種)、塼などが出土した。ここではこれらをそれぞれ説明していく。

(1) 軒 先 瓦

当廃寺ではいわゆる百済系単弁八葉軒丸瓦、新羅系複弁八葉軒丸瓦、重弧文軒平瓦、扁行唐草文軒平瓦の計４種の軒先瓦が出土している。これらの瓦を軒丸瓦第Ⅰ類、第Ⅱ類、軒平瓦第Ⅰ類、第Ⅱ類と分類していく。

軒丸瓦（第14図、図版17・18)

第Ⅰ類（単弁八葉軒丸瓦・１、２）

第Ⅰ類の瓦は弁形、間弁の形などの違いから２種に分類できる。

ａ　周縁に一重圏文を飾り、その中に八葉の単弁、逆三角形の間弁を配す。蓮弁は先端部が反転し、弁形が小さく丸いもの、やや先端部が狭くなるものなど不定形のものが集まっている。間弁はややずっしりした感じである。出土瓦には完形に近いものはないが、表採資料から中房内の蓮子は１＋６である。瓦当は復原径約17.6cm、周縁幅1.3cm、中房径約4.5cmである。

ｂ　周縁は一重圏文を飾り、その中に八葉の単弁、中房内に１＋６の蓮子を配している。これらはａと同様であるが、弁形、間弁の形が異なる。蓮弁はａと同様先端部が反転するが、弁形はすべて大きく丸い形の整ったものである。間弁は逆三角形の底辺部分がややとがり気味になり、形もスマートになる。この種の瓦は一般的にａのものより焼成はよく、灰色を呈するものが多い。またこの種の瓦で凸面に１mm×1.5mm～２mm×２mmの小さな格子目叩文がみられ、凹面に幅約0.8cmの細い竹状のものを使用した模骨痕をもつものがある。これによってこの種の瓦に接合した丸瓦が行基葺丸瓦であることがわかる。瓦当径は復原して約19.8cm、周縁幅は約1.4cmである。

第Ⅱ類（複弁八葉軒丸瓦・３）

この類の瓦は外縁に渦巻文状に略化した唐草文、内縁に珠文（25個）を飾る。蓮弁は複弁八葉で、弁は小さい。中房との間には一本の圏線があり、中房内の蓮子は４＋７である。丸瓦部分は一般的な筒状の模骨を用いた玉縁付丸瓦である。瓦当径16.8cm、外縁幅1.5cm、中房径4.7cm、瓦全長39.8cm、玉縁長4.1cm。

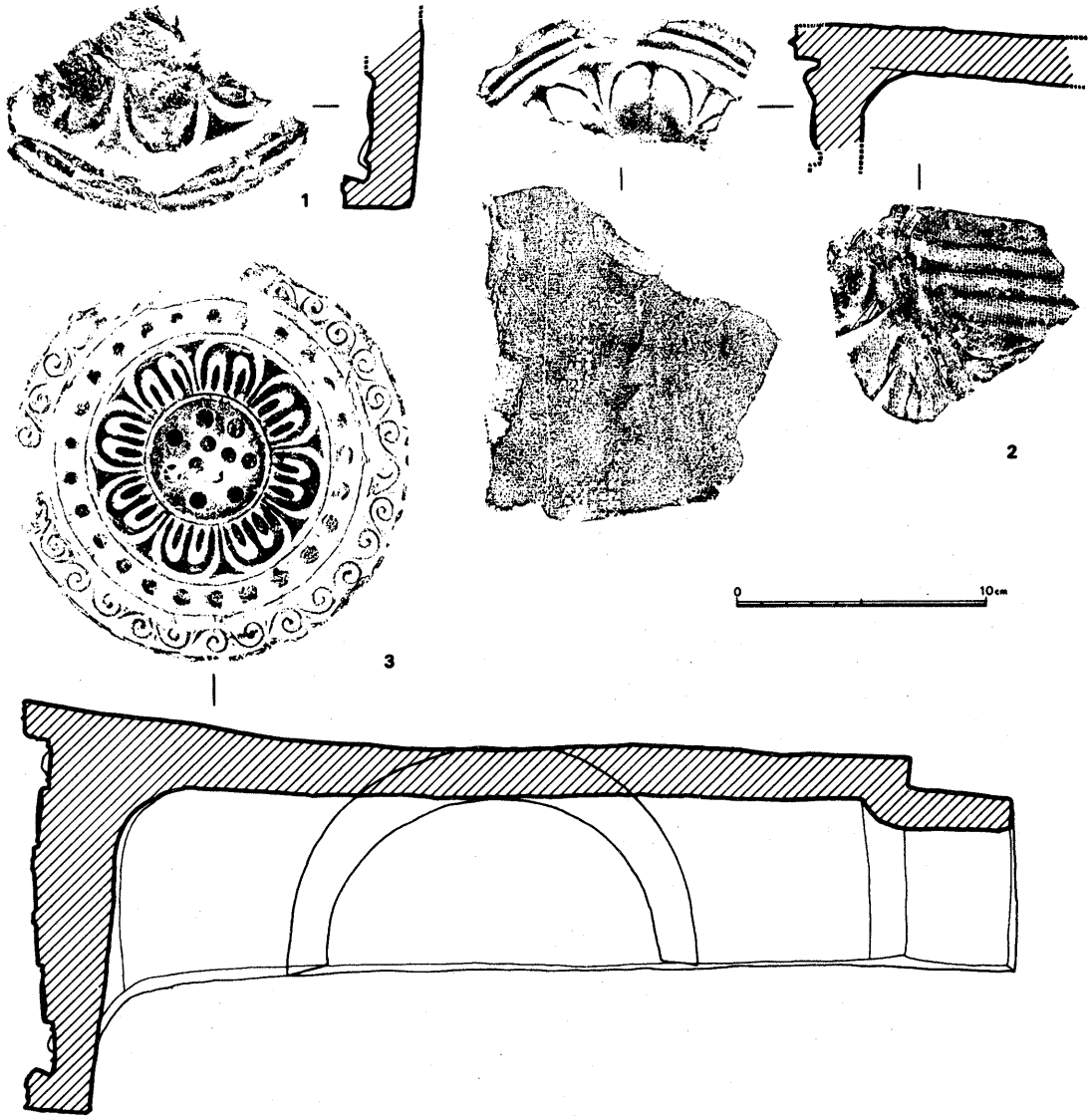
軒平瓦（第15・16図、図版19～21)

第Ⅰ類（重弧文軒平瓦・１～６）

細い１本の沈線を瓦当面に持つ二重弧文を主文様とする軒平瓦であり、下顎面に木葉文などの文様を飾ったものがある。

瓦当面は幅2.9cm～3.5cmで、その中に幅２mm～３mm、深さ１mm～３mmの沈線を施している。その沈線の形はほぼ一定で、それをひく際についたと思われる道具痕が凹面先端部に残っている。

下顎面の文様は木葉文（３種)、翳(さしば)状木葉文、ヘラ描き木葉文の３種に大別でき、それらをａ類（１



第14図　軒丸瓦実測図・拓影

～３)、ｂ類、ｃ類とする。

ａ－１　文様は長さ6.5cm、幅1.5cmを測る。葉の中に葉脈をもち、葉全体は細長の感じである。２個の木葉文を並べて押し、心々距離3.8cmを測る。

ａ－２　文様はａと似ているが、葉のつけ根部分が曲線ではなく、直線になった葉文である。先端部が欠けているためはっきりしないが、長さは推定4.5cm、幅は1.7cmを測る。押し方は２個の木葉文を並列し、その心々距離1.7cm～1.8cmと狭い。

ａ－３　文様は推定長8.4cm、幅2.1cmを測る大形の木葉文である。押し方は次にのべるｂの翳状木葉文と併用したものがある。

ｂ　文様は長さ6.9cm、葉部幅3.6cm、葉柄部長4.3cm、葉柄部幅５mm～９mmの翳状木葉文である。押し方は心々距離8.4cm～8.6cmに並列したり、縦方向に並べるものがある。またａ－３と併用したも

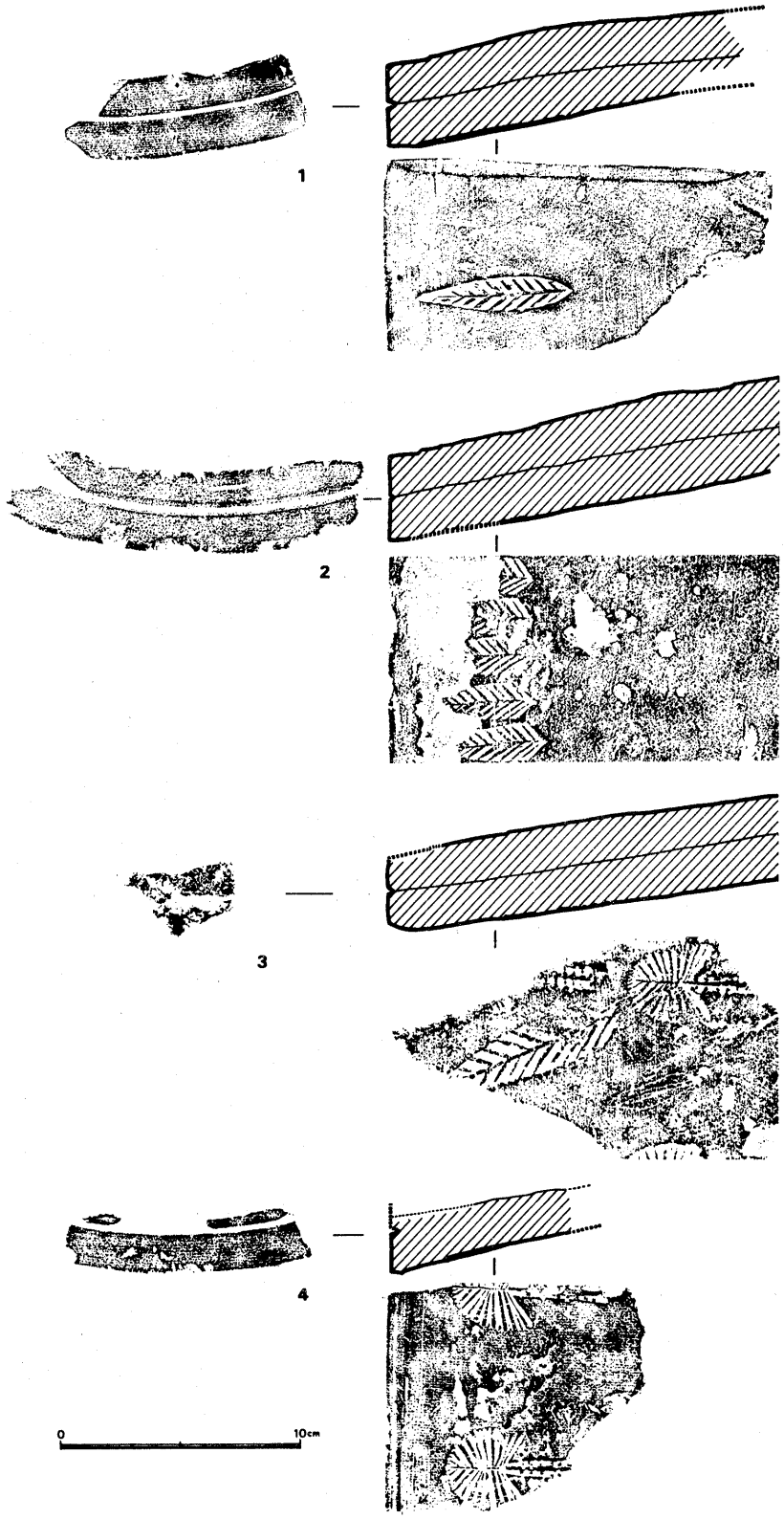
のがある。

c　文様はヘラで描いた木葉文であるが、葉脈は描いていない。大きさは長さ5cm以上、幅4.6cmを測る。描き方は葉部を接して並列している。

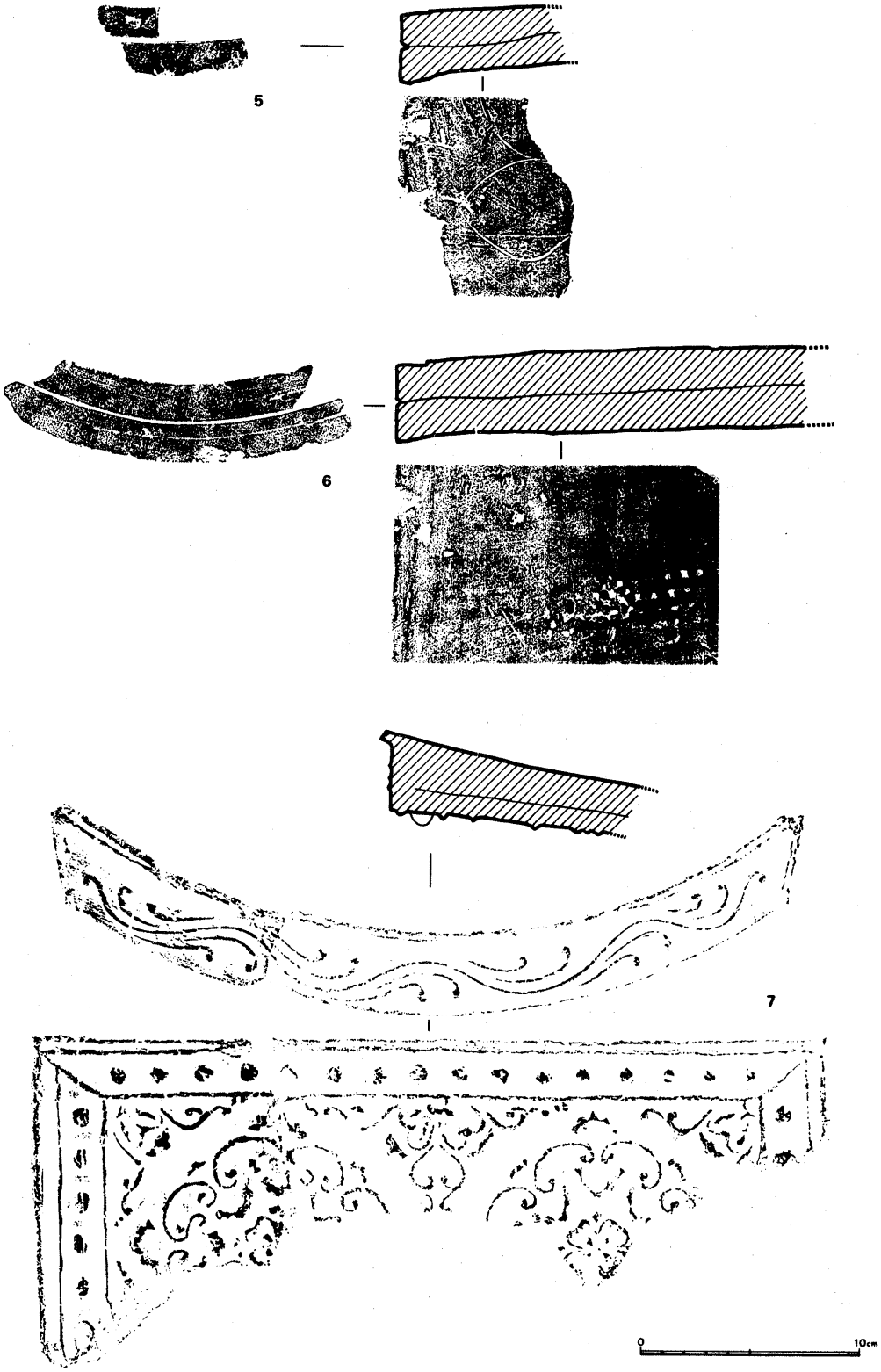
以上下顎面の文様についてのべたが、量的には何も文様をもたないものの方が多く出土している。またこの重弧文軒平瓦の製作時に使用している叩文は格子目文のみで、その大きさは2mm×2mm～3mm×4mmと小さい。

第II類（扁行唐草文軒平瓦・7）

瓦当面は右流れの扁行唐草文を配している。その唐草文はすべて先端部がやや珠粒状を呈し、2個の小唐草を1単位にしたものが7個ある。下顎面には回りを珠文（46個）で囲み、その中に華麗な宝相華文を2個並列し、その四隅にそれぞれ覗花文を配したすばらしい文様を飾っている。平瓦部分の叩文は5mm×6mm～6mm×7mmの格子目文と幅3mm～4mmの平行



第15図　軒平瓦実測図・拓影（1）



第16図　軒平瓦実測図・拓影（2）

線文を併用したものがある。瓦当面幅3.9cm、上弦弧長約34.2cm、弧深7.4cm、下弦弧長約32.7cm、下顎面幅28.9cm。

以上垂水廃寺出土の軒丸瓦、軒平瓦（それぞれ２種）を述べてきたが、これらのセット関係は文様及び他遺跡における出土瓦[(1)]から、単弁八葉軒丸瓦と重弧文軒平瓦、複弁八葉軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦がそれぞれ組合うものと考えられるが、出土数では重弧文軒平瓦が扁行唐草文軒平瓦よりかなり多く、また単弁八葉軒丸瓦が少ないことから、瓦の使用の仕方について今後に残された問題点となろう。

(2) 丸瓦、平瓦（第17図、図版22）

垂水廃寺では丸瓦は玉縁付、行基葺の２種が併在する。玉縁付のものは小破片しか出土していないため、その大きさ等ははっきりしない。しかし、複弁八葉軒丸瓦に接合した玉縁付丸瓦（第14図３）からわかる部分をのべる。全長約36cm、広端部幅約15.8cm、高さ約9.5cm、玉縁幅12cm、高さ７cmである。叩文はすり消しているためわかるものはほとんどないが、わかっているものでは細い縄目文がある。模骨は普通の筒状のものを使用している。

行基葺丸瓦は全長34.5cm、広端部幅17.3cm、高さ9.6cm、狭端部幅11.2cm、高さ5.85cmを測る。凸面すり消しは行なったものと行なっていないものがあり、前者の叩文はわかるものでは小さな格子目文を使用している。後者の叩文は正方形格子目文、長方形格子目文、平行線文、平行線に数本の直線を入れたもの、長方形格子目文に数本の直線を入れたものなどがある。模骨は普通の筒状のものではなく、径１cm前後の竹状のものをつないで使用している。その竹状のものの本数は広端部で24～25本、狭端部でははっきりしない。よって模骨としては48～50本[(2)]の竹状のものを使用したと考えられる。その竹状のものをつないだ紐は６ケ所で認められる。その間隔は約６cm等間である。

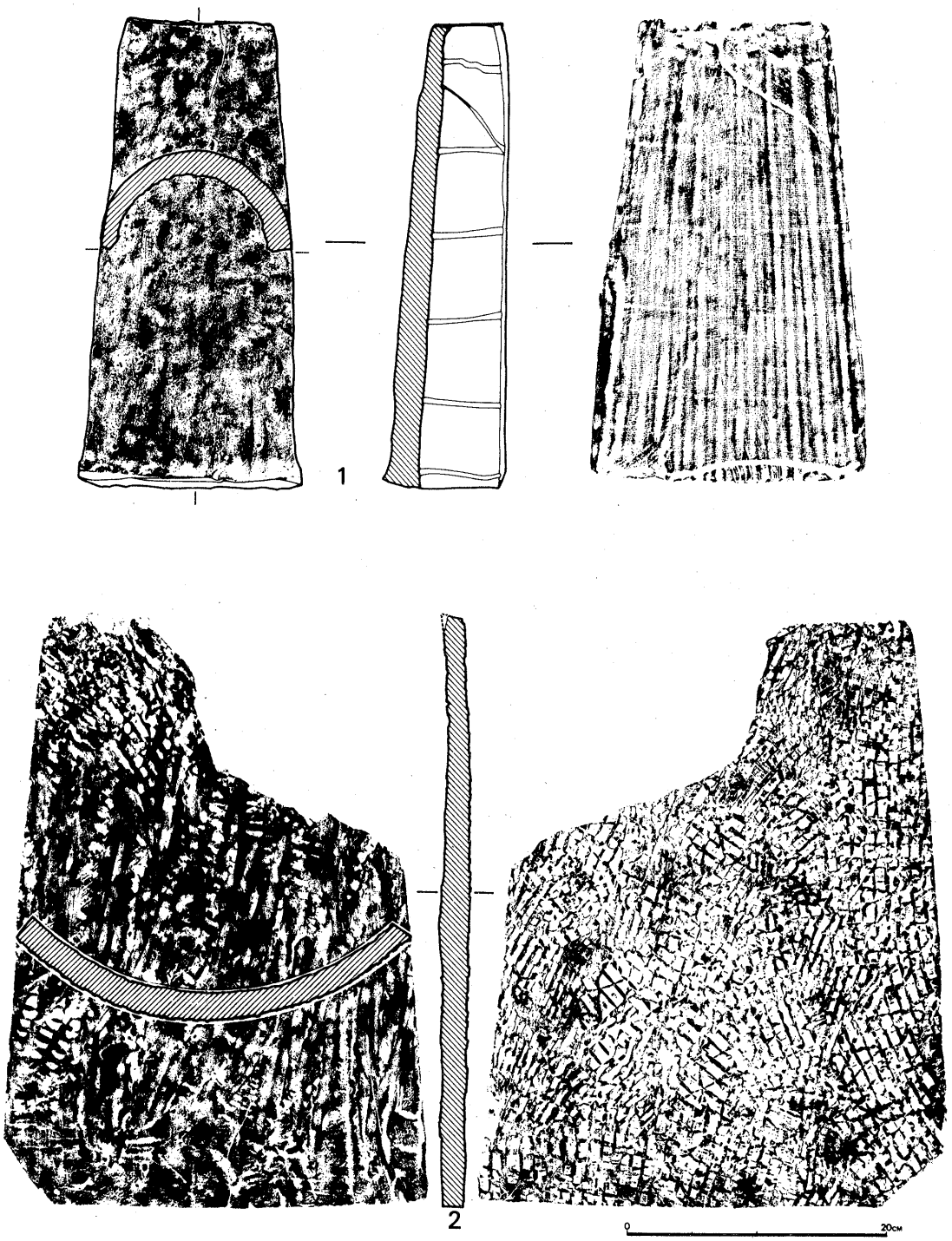
平瓦は全長45cm、広端部幅31.7cm、弧深6.65cm、狭端部幅26.2cmである。凹面にみえる桶の１枚の幅は2.5cm前後のものが多い。使用した桶は焼縮を考慮して広端部径約53.7cm、高さ約44.8cmのものと考えられる。また、これによって、この瓦が四枚作りのもの[(3)]であることがわかる。叩文は多種あり、次にのべる。

(3) 叩文様（第18～20図、第３表、図版23～26）

垂水廃寺出土の瓦は非常に多種の叩文様を使用している。小破片が多く、叩板全体の叩文がはっきりしないため同じものを別種として分類している可能性もあるが一応分類すると、格子目文－39種、平行線文－6種、格子目文や平行線文に直線を加えた複合文－８種、特殊文－11種、以上のものを２種又は３種併用したもの－12種、縄目文－８種で計84種となる。ここでこれらの文様を分類上Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆとする。それらの個々の説明は第３表にゆずり、ここではそれらに関して、気づいた点を述べる。

まず、格子目文は上に示したように39種と一番多い。その内訳は正方形格子目文10種、長方形格子目文14種、斜格子目文12種、その他３種である。文様は全体的に雑であるが、いくつか整ったものもある。また、須恵器の叩文に近いＡ－36～38を使用した瓦の中には砂粒をほとんど含まず、焼成が堅緻で青灰色を呈した薄手の瓦もある。

平行線文は平行線の幅が狭く、須恵器の叩文に似たものと、幅の広いものとに大別できる。その種



第17図　丸・平瓦実測図・拓影

類の数及び出土量は両者だいたい同じである。瓦の質では前者の叩文をもつ瓦は叩文様のみならず、胎土、焼成においても須恵器に近いものがある。

複合文や特殊文は他の遺跡ではあまり例を見ず、特に特殊文は放射状文、草葉文などいろいろな文様をもち、特異であると同時に華やかである。その中でD－1、D－2は類似文様が河内高井田・鳥坂寺跡[(4)]、河内船橋遺跡[(5)]から、D－3は陸奥伏見廃寺[(6)]から出土している。また鳥坂寺跡ではC－2に類似したものもある。

叩文を併用したものは12種あるが、使用文様数は格子目文9種、平行線文2種、複合文1種、特殊文1種であり、主に格子目文を使用している。これはこの頃の初めにのべた数に対応するものであろうか。また縄目文がこれらの中にみられないことは注意すべきであろう。

縄目文の種類は8種とあまり多くなかったが、出土数は格子目文についで多い。この縄目文を使用した瓦は一般的に、焼成が悪く、灰色や赤褐色～黄褐色を呈するものが多い。しかし、F－1を使用したものに焼成が良く、焼きしまったものを数点みることができる。

軒先瓦と叩文の関係では、軒丸瓦は凸面を一般的にすり消しているのでわかるものが少ないが、単弁瓦I－bにA－2とA－4の中間くらいの大きさの格子目文が使用されている。単弁瓦I－a、複弁瓦に関しては使用している叩文はわからない。軒平瓦では、重弧文軒平瓦もすり消しているものが多く、わかりにくいが、わかっているものはA－2またはそれに近い格子目文を使用している。扁行唐草文軒平瓦の叩文は1点わかるものがあり、それはA－7とB－4を併用している。

丸瓦と叩文の関係は先程Ⅳ2.(2)の丸瓦、平瓦の項でふれたように、玉縁付丸瓦はわかっている範囲内では細い縄目文（F－1）を使用しているのみである。行基葺丸瓦では、凸面をすり消したものとすり消さなかったものがあり、すり消したものでは出土品中に消し残したものがなく、叩文はわからない。すり消さなかったものでは格子目文4種（A－3、4、36、37)、平行線文1種（B－1)、複合文3種（C－1、5、6）の計8種ある。[(7)]そしてこの種の瓦の特徴としては一般的に薄手のものが多い。

以上のべたことをまとめてみると、格子目文が群を抜いて一番多い。軒先瓦との関係ではわかっているものの範囲では格子目文と平行線文を使用されている。丸瓦との関係では玉縁付丸瓦には細い縄目文のみ、行基葺丸瓦では格子目文、平行線文、複合文など多種使用している。

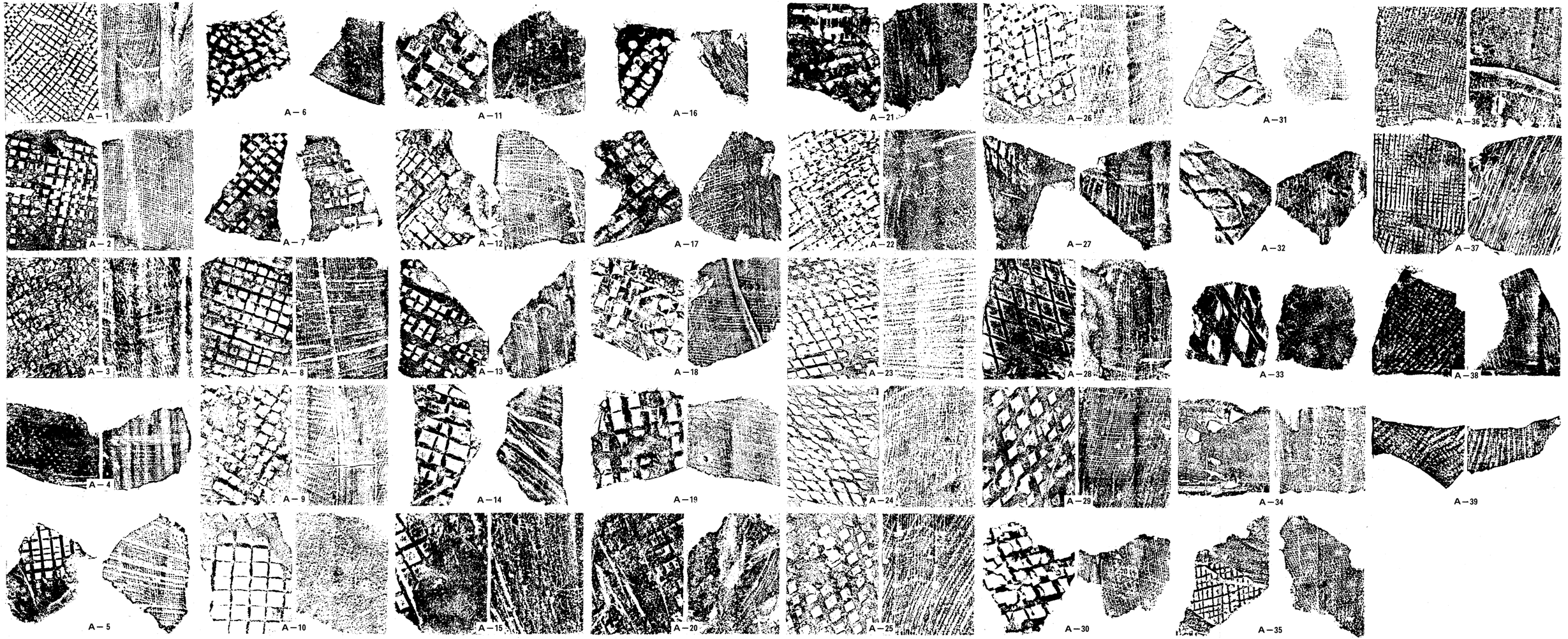
友枝、山田、桑野原の各瓦窯跡との関係では、友枝瓦窯跡で4種（A－22、26、B－6、D－2)、山田瓦窯跡で3種（A－19、28、33)、桑野原瓦窯跡で3種（A－22、E－2、F－8(?)）垂水廃寺出土の瓦と同種の瓦が出土している。ここで注意しなければならないことは垂水廃寺において量的にはかなり多く出土している縄目文瓦が確認された範囲内ではあるが、桑野原瓦窯跡以外では出土していないことである。

(4) 文字瓦（第21図、図版28）

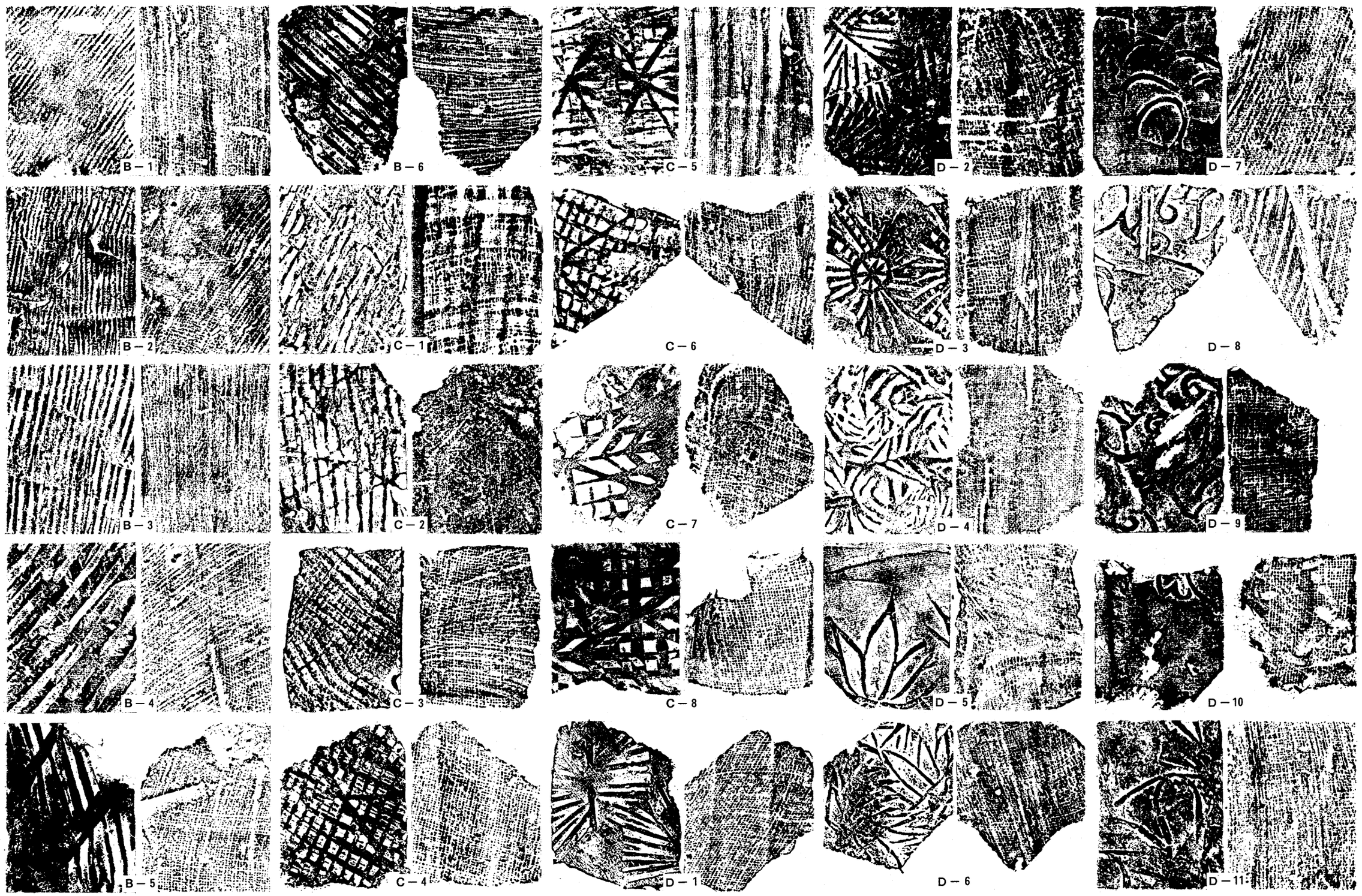
文字瓦は3種発見されている。そのうち2種は押印で、大きさ、形は異なるが、いずれも「大」と判読できるものである。もう1種はヘラ描きである。

1. 「大」と読める押印が平瓦の凸面にあるものと凹面にあるものがある。その押印は2.8cm×3.0cmのほぼ正方形の凹んだ大枠の中に2.4cm×2.4cmの正方形の小枠があり、その中に不整形ではあるが「大」がある。

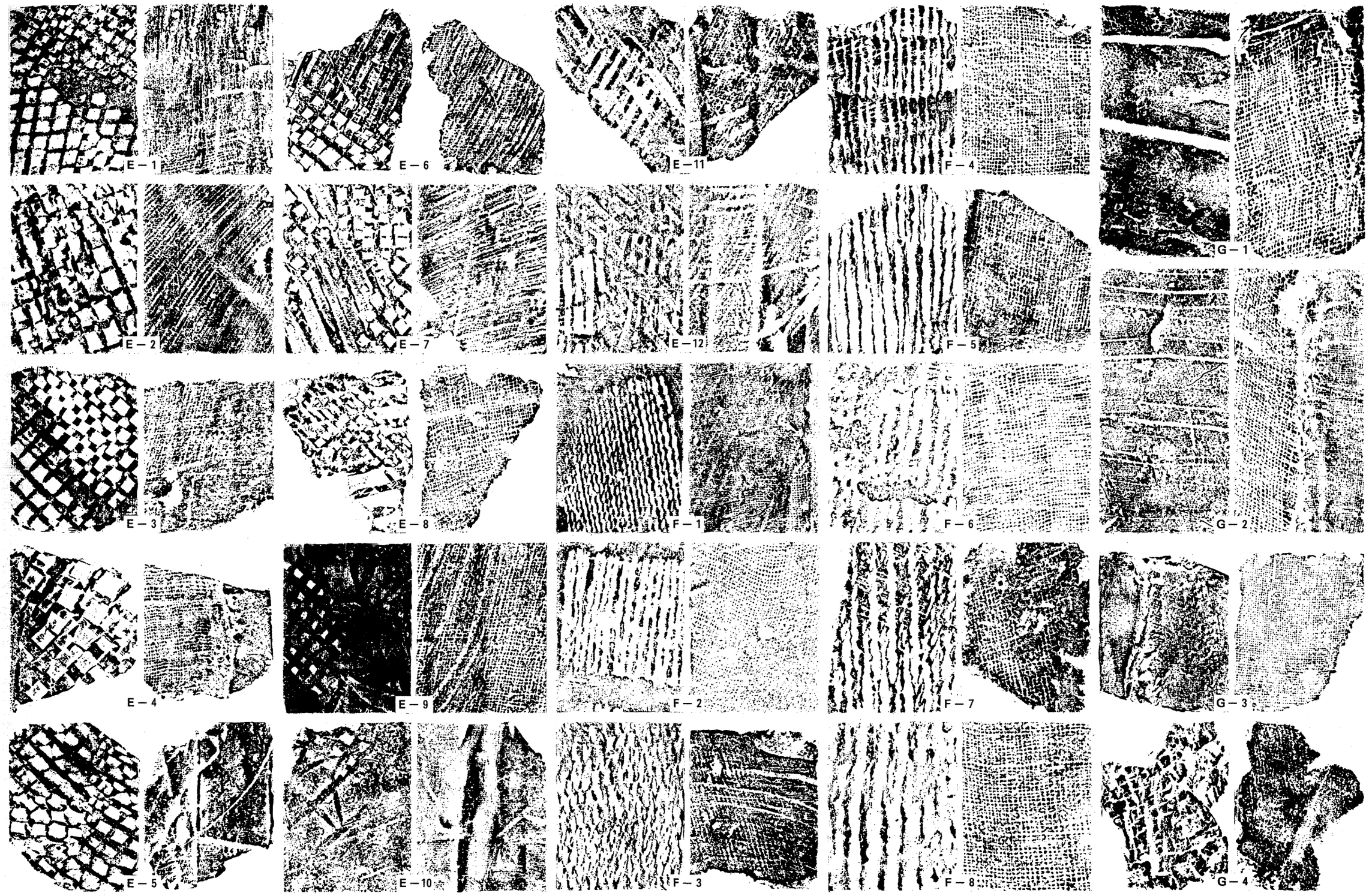
2. 平瓦の小破片の凸面に$\frac{2}{3}$ほど字が残っている。押印は4.5cm四方の大枠の中に3.4cm四方の小枠があり、その中に「大」を入れたものである。字は1より整っているが、小枠と文字とのすき間に点


A－1
A－2
A－3
A－4
A－5
A－6
A－7
A－8
A－9
A－10
A－11
A－12
A－13
A－14
A－15
A－16
A－17
A－18
A－19
A－20
A－21
A－22
A－23
A－24
A－25
A－26
A－27
A－28
A－29
A－30
A－31
A－32
A－33
A－34
A－35
A－36
A－37
A－38
A－39

第18図　叩 文 集 成 図（1）


B－1
B－6
C－5
D－2
D－7
B－2
C－1
C－6
D－3
D－8
B－3
C－2
C－7
D－4
D－9
B－4
C－3
C－8
D－5
D－10
B－5
C－4
D－1
D－6
D－11

第19図　叩　文　集　成　図（2）


E－1
E－2
E－3
E－4
E－5
E－6
E－7
E－8
E－9
E－10
E－11
E－12
F－1
F－2
F－3
F－4
F－5
F－6
F－7
F－8
G－1
G－2
G－3
G－4

第20図　叩　文　集　成　図（3）

第3表 叩 文 様 集 成 表

類	瓦の種類	単 位 文 様	特 徴 他
A－1	平 瓦	3㎜×4㎜～4㎜×4㎜の正方形格子目文	
A－2	平 瓦	3㎜×3㎜～4㎜×6㎜の長方形格子目文	重弧文軒平瓦に使用（？）
A－3	丸 瓦	3㎜×4㎜～4㎜×5㎜の長方形格子目文	煩雑に叩文を重ねている・行基葺丸瓦
A－4	丸 瓦	約2㎜四方の正方形格子目文	すり消している・単弁瓦に使用（？）行基葺丸瓦
A－5	平 瓦	3㎜×4㎜の長方形格子目文と4㎜～6㎜四方の正方形格子目文	
A－6	平 瓦	4㎜×6㎜～5㎜×7㎜の長方形格子目文	小破片のためはっきりしないが二種の叩きを使用した可能性がある
A－7	平 瓦	2㎜×3㎜～4㎜×5㎜の長方形格子目文	凹面に2㎜×3㎜～4㎜×6㎜の長方形の格子をもつ
A－8	平 瓦	4㎜×5㎜～6㎜×7㎜の長方形格子目文	
A－9	平 瓦	3㎜×4㎜～7㎜×7㎜の正方形格子目文	
A－10	平 瓦	9㎜×9㎜の正方形格子目文、界線の幅1㎜～2㎜	
A－11	平 瓦	8㎜×8㎜～10㎜×10㎜の正方形格子目文	
A－12	平 瓦	4㎜×6㎜～6㎜×6㎜の長方形格子目文	
A－13	平 瓦	11㎜方形の中に4㎜～5㎜の方形を4個もつ正方形格子目文	
A－14	平 瓦	5㎜×7㎜～9㎜×14㎜の長方形格子目文	方形がややくずれている
A－15	平 瓦	7㎜×9㎜～9㎜×10㎜の正方形格子目文	A－10と似るが界線などがやや異なる
A－16	平 瓦	一辺2㎜～3㎜の六角形に近い格子目文	
A－17	平 瓦	3㎜×5㎜～8㎜×8㎜の正方形格子目文	
A－18	平 瓦	6㎜×7㎜の長方形格子目文	
A－19	平 瓦	5㎜×5㎜～8㎜×11㎜の長方形格子目文	山田第2号窯跡出土瓦に類似例がある
A－20	平 瓦	4㎜×5㎜～4㎜×7㎜の長方形格子目文	
A－21	平 瓦	4㎜×5㎜～4㎜×7㎜の長方形格子目文　列間隔6㎜	
A－22	平 瓦	約3㎜×6㎜の長方形格子目文	友枝瓦窯跡出土・桑野原瓦窯跡出土
A－23	平 瓦	4㎜×6㎜～5㎜×7㎜の斜格子目文	
A－24	平 瓦	3㎜×5㎜～5㎜×6㎜の斜格子目文	
A－25	平 瓦	4㎜×5㎜～6㎜×7㎜の斜格子目文	
A－26	平 瓦	7㎜×7㎜～7㎜×8㎜の斜格子目文	友枝瓦窯跡出土
A－27	平 瓦	4㎜×5㎜の斜格子目文	
A－28	平 瓦	7㎜×10㎜～8㎜×10㎜の斜格子目文	山田第1号窯跡出土
A－29	平 瓦	5㎜×6㎜～7㎜×7㎜の斜格子目文	
A－30	平 瓦	6㎜×6㎜～7㎜×8㎜の斜格子目文	
A－31	平 瓦	9㎜×16㎜～11㎜×16㎜の斜格子目文	
A－32	平 瓦	8㎜×14㎜～12㎜×15㎜の斜格子目文	
A－33	平 瓦	8㎜×10㎜～10㎜×11㎜の斜格子目文	
A－34	平 瓦	一辺が5㎜～6㎜の三～五角形文様	
A－35	平 瓦	2㎜×3㎜～3㎜×7㎜の斜格子目文	叩板の幅4㎝
A－36	丸瓦、平瓦	1㎜×1.5㎜の長方形格子目文	行基葺丸瓦
A－37	丸瓦、平瓦	2㎜～2.5㎜の正方形格子目文	行基葺丸瓦・山田第1号窯跡出土
A－38	平 瓦	2㎜～3㎜の正方形格子目文	
A－39	平 瓦	1.5㎜×2㎜の長方形格子目文	
B－1	丸 瓦	幅2㎜の平行線	行基葺丸瓦
B－2	平 瓦	幅2㎜の平行線に幅1㎜の木目らしきものがある	
B－3	平 瓦	幅2㎜～3㎜の平行線	
B－4	平 瓦	幅3㎜の平行線　界線幅4㎜～6㎜	
B－5	平 瓦	幅3㎜～6㎜の平行線	叩板の幅3㎝

類	瓦の種類	単　位　文　様	特　徴　他
B－6	平　瓦	幅4㎜～5㎜の平行線	友枝瓦窯跡出土
C－1	丸　瓦	幅3㎜～4㎜の平行線を数本の直線が横切る	
C－2	平　瓦	幅4㎜～5㎜の平行線を数本の直線が横切る	
C－3	平　瓦	B－4の平行線を直線が数本横切る	
C－4	平　瓦	4㎜×5㎜長方形格子目文に2本の直線	
C－5	丸　瓦	4㎜×8㎜の長方形格子目文に4本の直線	黄褐色を呈するものが一般的である・行基葺丸瓦
C－6	丸　瓦	3㎜×4㎜～3㎜×6㎜の長方形格子目文に3本の直線	行基葺丸瓦
C－7	平　瓦	5㎜×6㎜～7㎜×8㎜の正方形格子目文に5㎜×6㎜～7㎜×9㎜の斜格子目文	
C－8	平　瓦	4㎜～6㎜の正方形格子目文と3㎜×7㎜～5㎜×6㎜の斜格子目文	文様がC－7よりやや小さい
D－1	平　瓦	1本の直線に放射状に多数の直線	河内高井田鳥坂寺跡に類似品あり
D－2	平　瓦	〃　本数が異る	友枝瓦窯跡出土
D－3	平　瓦	円中に4本の交錯直線・円の回りに放射状に直線を配する	中心部分を削ったものがあり、叩板は3種類ある。類似のものが宮城県伏見廃寺に出土している。
D－4	平　瓦	蜘蛛の足状の文様	
D－5	平　瓦	草葉文	
D－6	平　瓦	草葉文	D－5に似る・やや小形
D－7	平　瓦	楕円形に曲線をあわせた文様	
D－8	平　瓦	先端部を巻いた蔓状文様に曲線をあわせる	
D－9	平　瓦	〃	
D－10	平　瓦		
D－11	平　瓦		
E－1	平　瓦	A－22と6㎜×8㎜～6㎜×9㎜の格子目文を併用	
E－2	平　瓦	A－22と6㎜×9㎜の長方形格子目文を併用	桑野原瓦窯跡出土
E－3	平　瓦	A－7とA－9の併用	
E－4	平　瓦	5㎜×8㎜～8㎜×8㎜の長方形格子目文と8㎜～11㎜の正方形格子目文併用	
E－5	平　瓦	A－8とA－9の併用	
E－6	平　瓦	A－9とB－6の併用	
E－7	平　瓦	A－9、B－4、5㎜×6㎜～5㎜×7㎜の長方形格子目文を併用	
E－8	平　瓦	A－22とB－4の併用	
E－9	平　瓦	A－2とD－7の併用	
E－10	平　瓦	A－2と「Ⅱ」を併用	
E－11	平　瓦	B－9とB－6の併用	
E－12	平　瓦	C－3とB－6の併用	
F－1	丸瓦、平瓦	幅3㎝に11～13本の縄目	玉縁付丸瓦
F－2	平　瓦	幅3㎝に8本の縄目	叩板の幅5.8cm
F－3	平　瓦	幅3㎝に8～10本の縄目	
F－4	平　瓦	幅3㎝に7本の縄目	
F－5	平　瓦	幅3㎝に6本の縄目	
F－6	平　瓦	幅3㎝に5本の縄目	
F－7	平　瓦	幅3㎝に7～8本の縄目	
F－8	平　瓦	幅3㎝に4本の縄目	桑野原瓦窯跡出土（？）
G－1	丸　瓦	幅4㎜～5㎜、深さ3㎜～5㎜の沈線を長軸に垂直にひく	桑野原瓦窯跡出土、玉縁付丸瓦
G－2	丸　瓦	幅2㎜、深さ1㎜～2㎜の沈線を長軸に垂直にひく	
G－3	平　瓦	布目	
G－4	平　瓦	荒い布状の痕	

註　G類は叩文ではないが一つの文様であるので載せた。

をそれぞれおいている。

3. 丸瓦の凸面にヘラで「コロ四攸」(卅カ)「コロ五攸」(百カ)と書いているが上部が欠けており、その意味は不明である。この瓦の模骨は竹状のものを使用したものである。

第21図 文 字 瓦 拓 影

(5) 製作技法上の特徴

垂水廃寺の調査により多量の瓦を検出した。軒先瓦では軒丸瓦2種、軒平瓦2種があり、その他に多種多様の叩文様をもった丸瓦、平瓦が出土した。ここではこれらの瓦の中で瓦製作上興味あるもの、特徴的なものをあわせ記述することにする。

軒丸瓦では複弁八葉軒丸瓦に玉縁付丸瓦、単弁八葉軒丸瓦に行基葺丸瓦をそれぞれ接合しており、それらは製作時に使いわけている。

軒平瓦では、重弧文軒平瓦、扁行唐草文軒平瓦どちらも2枚の粘土板をはりあわせて、1枚の軒平瓦を作っている（図版27－1）。重弧文軒平瓦は沈線によって分割され瓦当面の上下幅が等しくなるように施され、その沈線がだいたいその2枚の粘土板のつなぎ目にくる。しかし、上、下少しずつずれたものもある。またその沈線を施す際に付いたと思われる痕跡が凹面先端部にある。

丸瓦は玉縁付、行基葺の2種あるが、その製作時に前者は一般的な筒状の模骨を使用し、後者は筒状のものではなく、幅1cmくらいの竹状のものを48～50本簾状に紐でつなぎ、丸くした模骨を使用している。その紐は6本あり、約6cm等間隔である。当廃寺の瓦供給窯である山田瓦窯跡出土のものでは竹状のものの本数は24～25本で同じであるが、紐は5本で、その間隔は8cm～10cmである。

平瓦は一枚造りと考えられる資料は見出されず、四枚造りで製作されたと考えられる。その使用した桶の一つの大きさは前にⅣ－2(2)で述べたように広端部径約53.7cm、高さ約44.8cmであると推測される。狭端部径はわからない。

以上軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦についてのべたが、他に興味ある特徴として次のものをあげることができる。

1. 凸面のみならず凹面にもタタキを行なったものがある。そのうちあるものはそのあとに指でなでている（第17図2、第18図A－7）。
2. 布目が偶然にではなくて、凹面とは別に凸面にもみることができるものがある（第20図G－3）。
3. 玉縁付丸瓦、平瓦に数点ずつ確認されているが、凹面に1ケ所約2cm四方、高さ約5mmの突起をもつものがある（図版27－2）。

以上３項目をあげたが、製作技法以外では平瓦の凹面に丹を塗ったものがあること、また、胎土にほとんど砂粒を含まず、須恵器に近く焼成が堅緻で青灰色を呈す薄手の瓦があることなどが特徴的なものとしてあげることができよう。

註

(1) 豊前地方でいわゆる百済系単弁瓦を出土している寺院は法鏡寺跡、弥勒寺、相原廃寺、豊前国分寺、上坂廃寺、木山廃寺、椿市廃寺がある。単弁瓦と組むと考えられているものは、法鏡寺跡、弥勒寺では出土状況からいわゆる法隆寺系軒平瓦と組むことが考えられている。相原廃寺では軒平瓦は垂水廃寺と同様な重弧文軒平瓦のみ出土している。豊前国分寺でははっきりしていない。上坂廃寺では単弁瓦の他に老司式軒丸瓦・軒平瓦のくずれたものと重弧文軒平瓦が出土している。木山廃寺も上坂廃寺と同様老司式軒丸瓦・軒平瓦のくずれたものと重弧文軒平瓦が３種出土している。椿市廃寺では単弁瓦の他には軒丸瓦は発見されておらず、軒平瓦は重弧文軒平瓦と新羅系唐草文軒平瓦が発見されている。

(2) この模骨を使用した丸瓦は現在法鏡寺跡、野森窯跡、相原廃寺、木山廃寺、福六瓦窯跡、天台寺廃寺、垂水廃寺、山田窯跡の計８ケ所（すべて豊前国）で発見されている。

(3) 砂粒の含まれた量や焼成の度合によって１割～２割が焼縮が考えられるが、この平瓦は砂粒をあまり含まず、焼成も堅緻であるから一応２割の焼縮を考えて計算した。

(4) 大阪府教育委員会『河内高井田、鳥坂寺跡』1968

(5) 大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究』1958

(6) 佐々木茂禎「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』56巻３号　1971

(7) 山田瓦窯跡、桑野原瓦窯跡では小格子目文を消し残したものがある。

2.　土 器（第22～26図、図版31～33）

寺跡出土の土器は、寺院関係としてまとまったものはないため、ここでは時代順に記述することにする。

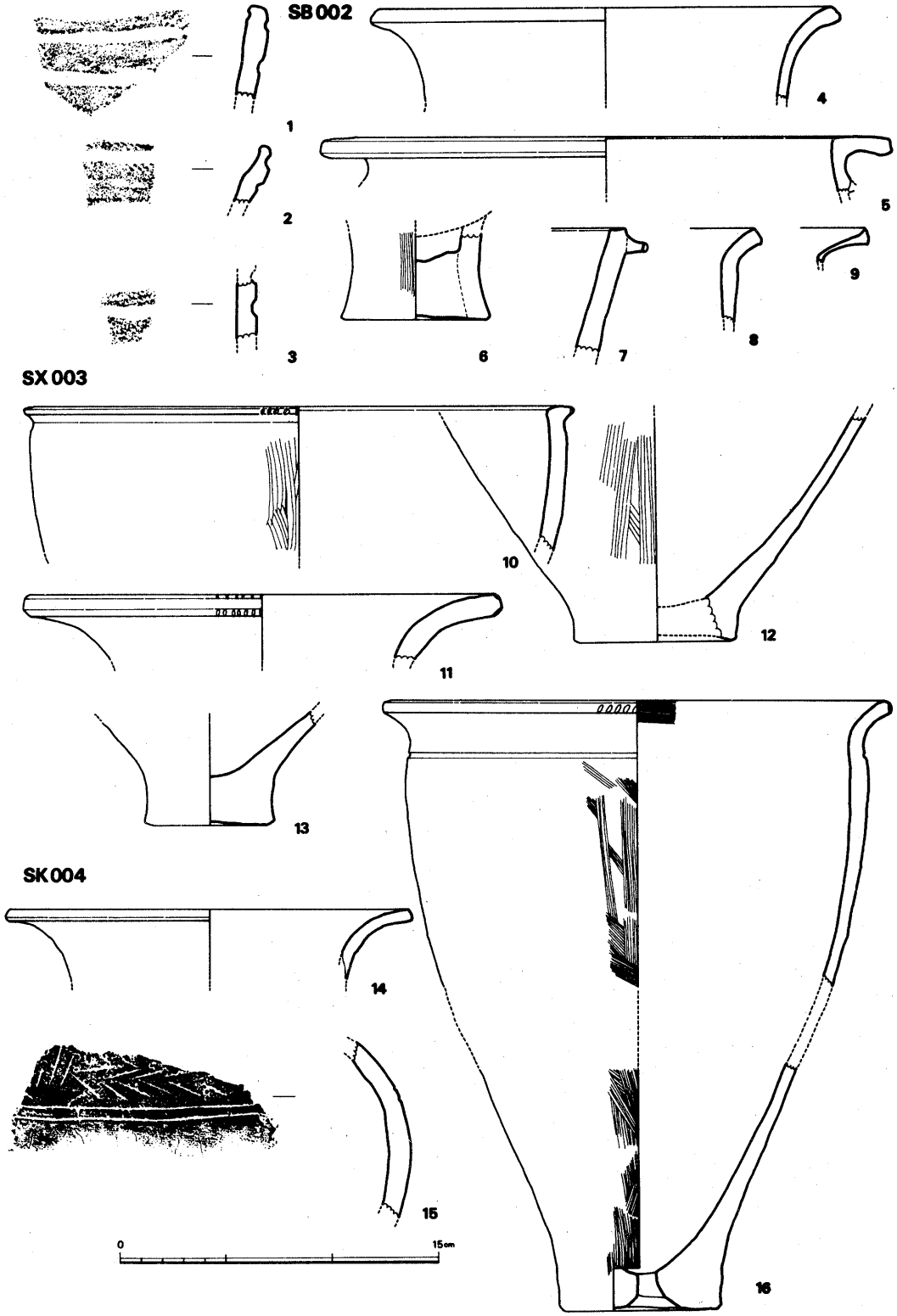
(1) 縄文土器（１～３、図版31）

１・２・３ともに、いわゆる磨消縄文と呼ばれている土器で、縄文時代後期中頃の鐘崎式土器である。１の口縁は山形を呈すと考えられ、若干カーブが認められる。外面の施文は小さな巻具を転がしている可能性がある。２・３の外面は縄文を施している。３点とも内側をヘラミガキし、器面を平滑にしている。

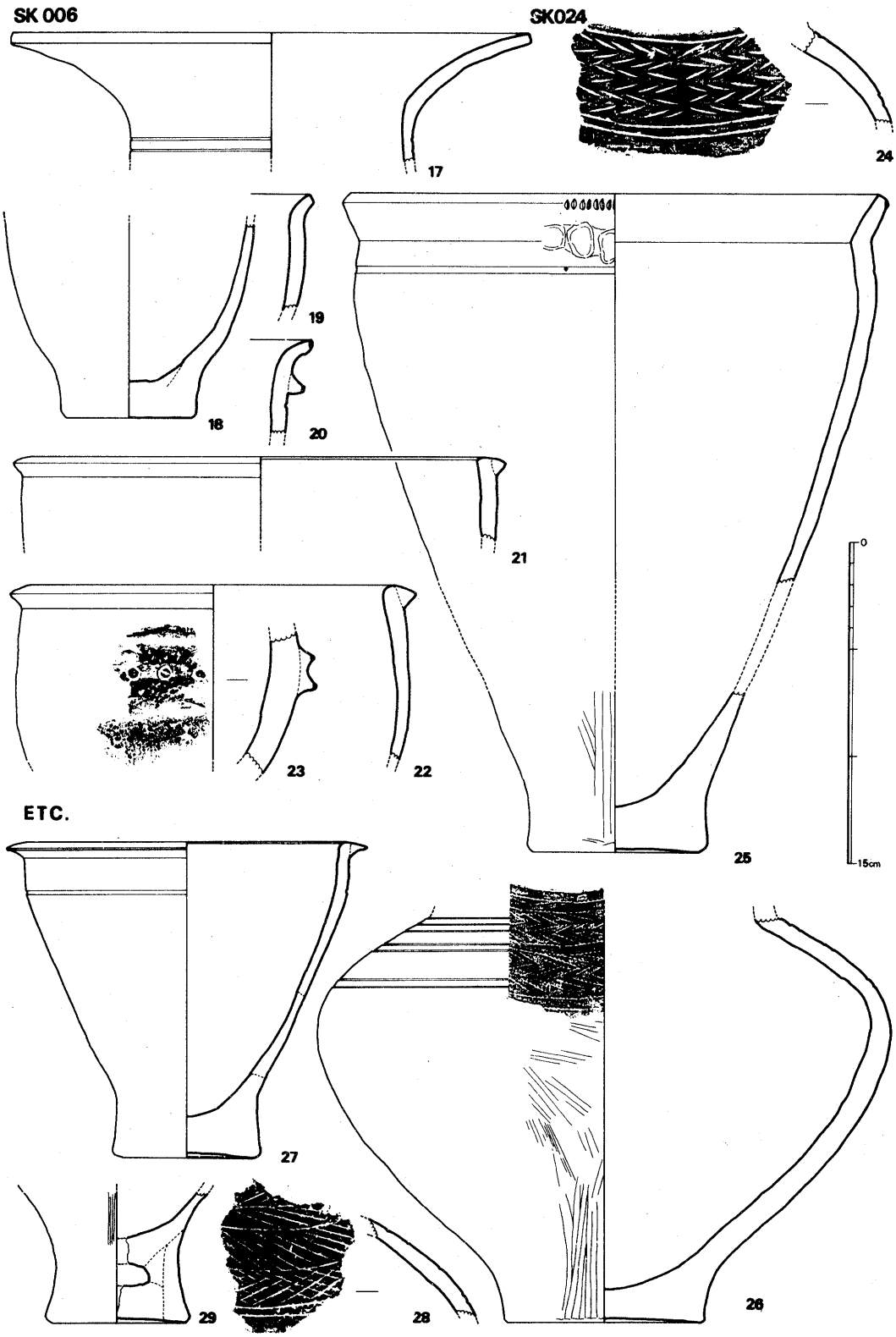
(2) 弥生土器（４～29、図版32）

住居跡ＳＢ002 出土土器（４～９）　壺・甕が出土しているが、いずれも小片である。少量の砂粒を含んだ胎土を硬質に焼成し、淡い赤黄色～赤褐色を呈する例が多い。４は広口壺、５～９は甕の破片である。器面の保存は悪く、６～８の外表にハケ目調整がうかがえる程度である。７は直口に近い口縁の端部直下に突帯をめぐらし、その先端に深い刻み目をほどこしている。類例にとぼしい。これらの土器は前期末から中期中頃の時期のものを含んでいる。

落ち込みＳＸ003 出土土器（10～13）　砂粒を含んだ胎土をやや硬質に焼成した例が多いが、素地の練りの悪さからかもろい。10は口径25.8cmに復原される壺の口縁部片で、赤褐色を呈する。やや内彎気味に立ち上がる直口に近い口縁部に断面三角形の突帯を貼付け、口縁を形成している。口縁端には刻み目がみられ、胴部をハケ目調整している。おそらく12のような底部をもつと思われ、胎土やハ



第22図　土　器　実　測　図（1）



第23図　土　器　実　測　図（2）

ケ目調整の相違などからみて別個体であるが、両者によって甕の全形を推定することができる。11は広口壺の口縁部片で、口縁の上下両端に刻み目がみられる。これらの土器は板付II式から城の越式への過程にある。

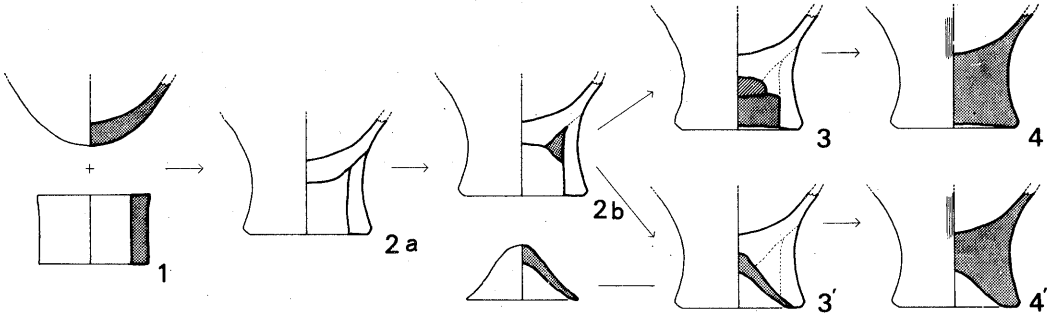
貯蔵穴ＳＫ004 出土土器（14～16）　14・15は壺で、細砂を混じえた胎土をもちいている。14は広口壺片で、赤色を呈する。器表はナデ調整されており、一部にヘラみがきがみられる。15は壺の肩部片で二条の沈線とヘラ描きの無軸羽状文が配されている。16は甕を転用した甑である。わずかに内彎しながら立ち上がる胴部は口縁近くで大きく外反する。口縁の下端部に刻み目をほどこし、そのやや下位に一条の沈線をめぐらす。やや細身の甕の底部を内側から穿孔している。茶褐色を呈するが、底部外表および口縁付近は火熱を強く受け赤変している。器体のつくりはていねいとはいえないが、外表をハケ目、内面をナデでていねいに調整している。これらの土器は14を除いて板付II式であり、前期後半に位置づけうる。14は混入であろう。

貯蔵穴ＳＫ006 出土土器（17～23）　壺・甕が出土している。砂粒を含む胎土をやや硬質に焼成した例が多い。17は広口壺の口縁部片で、淡い黄褐色を呈する。頸部に二条の沈線をめぐらしている。23は壺の胴部片で、断面M字形の突帯の間に竹管文を配している点、注目される。18は体部下半の破片で、底部の特徴からすれば壺であろう。しかし火を受け外表が赤変しており、また胴部がこのまま外反するようにも思われ、甕である可能性が強い。19～22は甕の破片である。19・20は板付II式の甕の口縁部片で、20は如意形口縁の端部のやや下位に突帯を貼付し、さらに突帯の下位に沈線をめぐらしている。21・22は直口に近い甕の口縁に三角突帯を貼付して口縁部を形成する。板付II式から城の越式への過渡的な段階の土器である。

貯蔵穴ＳＫ024 出土土器（24～26）　26は板付II式壺の胴部片で約２分の１が残存している。砂粒を含む胎土を硬質に焼成し、暗褐色を呈する。外表はハケ目調整の後にヘラでみがいている。ことに底部付近は縦方向のていねいなヘラみがきがみられる。肩部には貝殻描きの施文がみられ、平行沈線の間に無軸羽状文を配している。本例は頸部から上を打ち欠いた後に、胴部を斜めに二分し、鍋様の煮沸具に転用している。その部分は赤変し、周囲は黒変している。24は壺の肩部片で、ヘラみがきされた器表には上下各二条の沈線とヘラ描きの無軸羽状文が施文されている。25は４分の１個体分ほどの甕で、砂粒を多く含む胎土を硬質に焼成してつくられている。暗褐色を呈するが、下半部は火熱によって赤黄色に変化している。口径25cm、器高30.5cmほどに復原される。胴張りのほとんどない体部はほぼ同じ肥厚をもってつくられる。「く」字状に外反する口縁部の下端に浅く刻み目がほどこされる。頸部の下位には痕跡的に一条の沈線がめぐる。外表はナデ調整され、下部には粗いハケ目がみられる。頸部には整形時の指圧痕が残る。内外面ともにススが付着しており、米飯の煮沸具としての使用がうかがわれる。これらの土器はいずれも前期後半板付II式に属するものである。

その他の出土土器（27～29）　27は５分の１ほどを残す甕で、赤褐色を呈する。胎土に多くの砂粒を含み、焼成のあまさのためかもろい。底部からほぼ直線的に立ち上がる胴部は直口の口縁に終る。口縁には三角突帯が貼付され、逆Ｌ字状の口縁部をなしている。口縁部の下位に一条の沈線をめぐらす。10・21・22の延長上にある甕である。

29は板付II式～城の越式の甕形土器によくみられる腰高の底部の例である。破片は偶然半切された



第24図　底部接合過程模式図

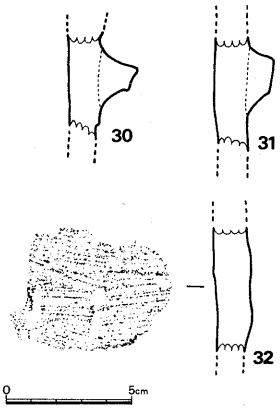
状態となっており、底部の製作過程をうかがわせるものであった。第24図はそれを模式化したものである。すなわち、まず1にみるように丸底気味におさめられた胴部と円筒状の高台とがつくられる。次にそれを接合し（2ａ）、空隙を埋めて補強する（2ｂ）。その後に円筒状の高台に粘土を詰め込む（3）。29あるいは6の場合は斜線部が中空となっていたが、完全に詰め込まれても同様である。こうして4のような腰高の底部が完成される。ところでピット（ＳＫ006）から鉢状の手捏ねと思われる土器が出土している。しかしこれは詳細に観察すれば、一個の成品ではなく、3の段階の詰め込み部分が剝落したものであることが知られる（3′）。この場合には4′のような腰高の上げ底の底部が完成される。したがって一見異なった印象を与える両種の底部が製作技法からみれば一律に考えうることを示す好資料である。

以上のような本遺跡出土の弥生土器から各遺構をみれば、ＳＫ004・ＳＫ024は前期後半の土器を出土し、ＳＸ003・ＳＫ006は前期末～中期初頭の土器を中心とする。ＳＢ002の土器はかなり複合しているが、主体は中期前半～中期中頃にある。したがって今回の調査部分においては弥生時代前期後半から中期初頭にかけての時期を中心として生活の場にあったことがうかがわれる。

(3)　埴　輪（30～32、図版31）

Ｉ－Ｉ・Ｊ区の表土および攪乱土中から数点発見した。Ｉ－Ｊ区にあった古墳に使用されたものであろう。

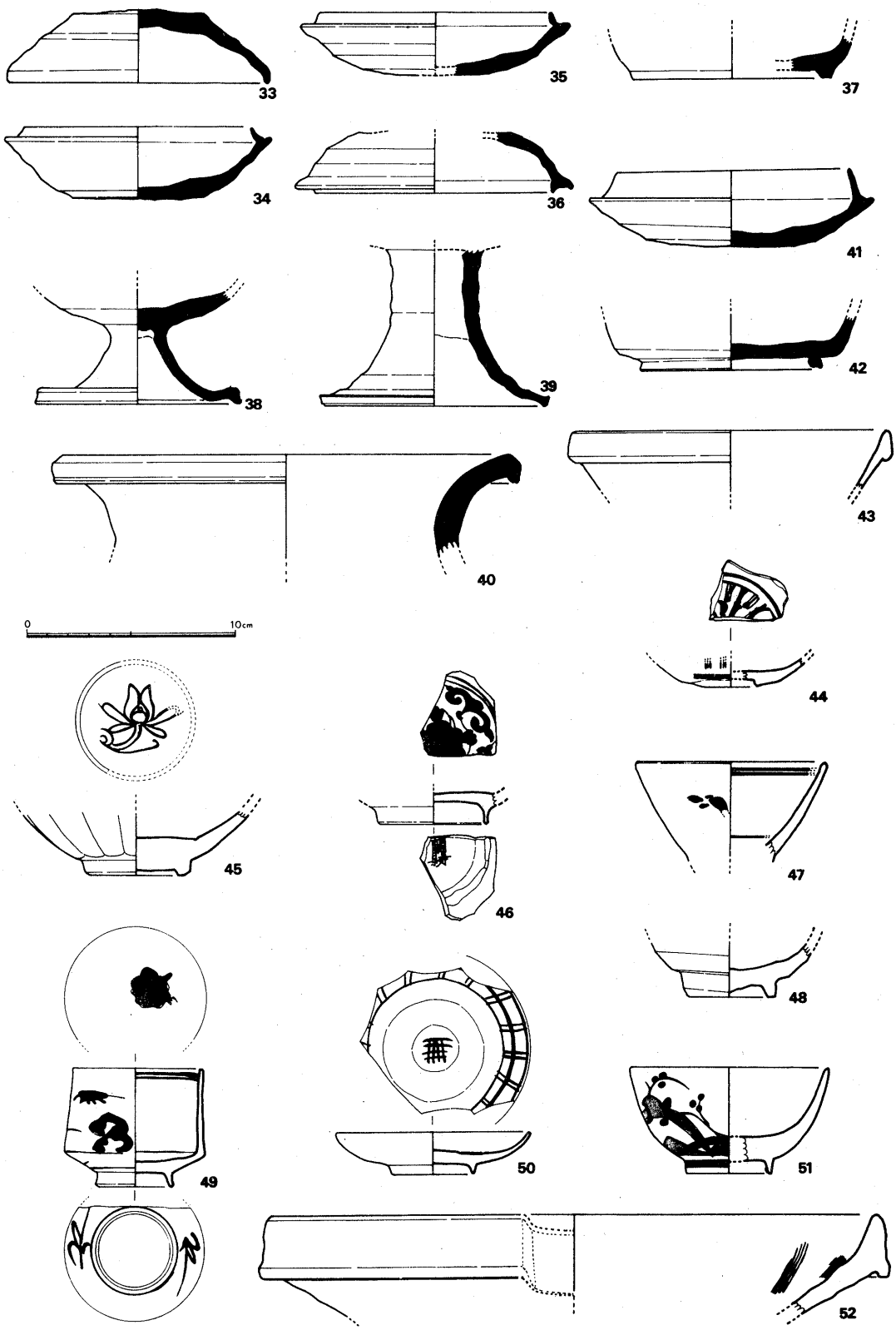
30の外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラ削り、突帯はヨコナデを行なっている。31は内外面とも摩滅のため調整は不明である。32の外面は縦方向のハケ目とそれをヘラで削り消して赤色顔料を塗布し、内面は横方向のハケ目がある。この32は形象埴輪の部分である可能性がある。



第25図　埴輪実測図

(4)　須恵器（33～42、図版33）

33～40はＳＤ015からの出土である。33と34は焼成・胎土・色調とも同一であることからセットになると考えられ、33は口径12.4cm、高さ3.4cm、34は蓋受部外端で12.8cm、高さ3.4cmを測る。天井部・外底部ともにヘラ切り後若干ナデているだけで、ともに平坦な面をなす。ロクロ回転方向は時計まわりである。35も34と同様に蓋受け立上りは低く、外底部はヘラナデを行なっているのみで雑である。36は、34 35と調整・手法とも変わらないが、口縁部の形態からここでは蓋として図示した。37は有高台の杯で、方形を呈す高台からすぐに体部が外上方へ延びる。38・39は高杯の破片でともに残存部は全てヨコナ



第26図　土　器　実　測　図（3）

デ調整である。40は甕の口頸部の破片で、堅緻に焼成され黒色を呈す。41はII－H・I・J区の第1トレンチ第II層から検出した杯身で、蓋受け立上りは高く直線に延びる。外底部は回転ヘラ削りを行ない、その方向からロクロは時計まわりであることがわかる。発見須恵器の中ではもっとも古期に属す。42はIV－B区からの出土で、底部のみ完存している。高台部は底部の端から内側に貼り付けられ、体部は外上方へ直線的延びる。その高台の形状や体部の延び方から奈良時代後半期のものと考えられる。

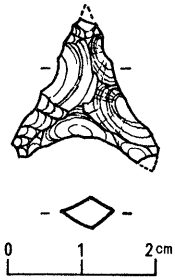
(5) 陶・磁器（43～52、図版33）

43・44はSD015を覆う層、45～48はSX026、49～51はIV－F上層、52はI－I・J区から出土した陶磁器である。

43～45は中国陶磁器で、43は福建省の窯で焼成されたと考えられている宋代の白磁椀、45は同じく宋代の龍泉窯系の青磁椀で、両者とも12世紀から13世紀にかけてのものといえる。44は明代の青花皿の破片で、外底部は碁ケ底である。46・47・49～51は伊万里窯で焼成されたと考えられる染付けで、その年代は江戸時代末期ではないかと思われる。48は内面に黄味をおびた黒色の釉がかった天目椀で、唐津窯のものであろう。52は備前焼の片口の擂鉢で、その口縁の特徴から室町時代のものと考えられる。

3. 石器（第27図、図版31）

調査により発見した石器は、旧石器時代のものと考えられるチャートの破片と弥生時代の石鏃・石剣・石庖丁・石斧である。



第27図　I-I・J出土石鏃実測図

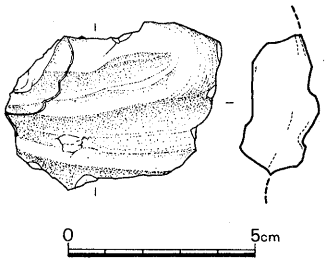
4. 塑像残片（第28図・図版30）〔I－O区、第1トレンチ第2層〕

1個（4.1cm×5.5cm×1.9cm）

塑像の残片と思われるもの1個が金堂跡と推定される東方建物の西側から出土した。この剥離した残片の裏面には、塑形上土に混じた藁苫の痕跡を認め得るが、火中したものと思われ藁苫そのものはみられない。

この残片は、少なくとも2層からなり、内層は粗土に藁苫を混じたもので、おそらく塑像造形上心木の上に麻縄等をまきつけて、その上に像の概形をつくる層と思われる。そして、外層の精土は、その概形の上に仕上げとしての細部のモデリングをしたものであり、紙苫等を混じ、あるいは雲母（きら）の混じったのをみることがあるが、この小片からだけでは明白に知り得ない。表面の0.5ミリほどの薄い層は、表面精土の剥離か、それとも彩色層の固着か判じ得ない。表面の仕上げ精土層の波状からみて塑像の衣文の一部と思われる。

時代判定は、他の出土遺物からみて13世紀を降ることはないが、垂水廃寺の出土遺物や、日本での塑像の隆盛期、九州所在の塑像例から推して、奈良時代とするのが妥当であろう。



第28図　塑像残片実測図

従来、九州の塑像例は、筑紫観世音寺の木造不空羂索観音立像の体内から大正4年に発見された塑像頭部残片4個と心木、そのほか天部像の腕の一部ほか数個と、昭和49年6月宇佐市天福寺奥院で見い出された4軀の破損塑像についで、小片ながら、塑像の所在を遺物で示し得る第3の寺院を得たことになろう。

今後古代寺院発掘によって、塑像残片の発見は多くなると思われ、分布資料の増加を俟ちたいと思う。

V　窯跡の調査

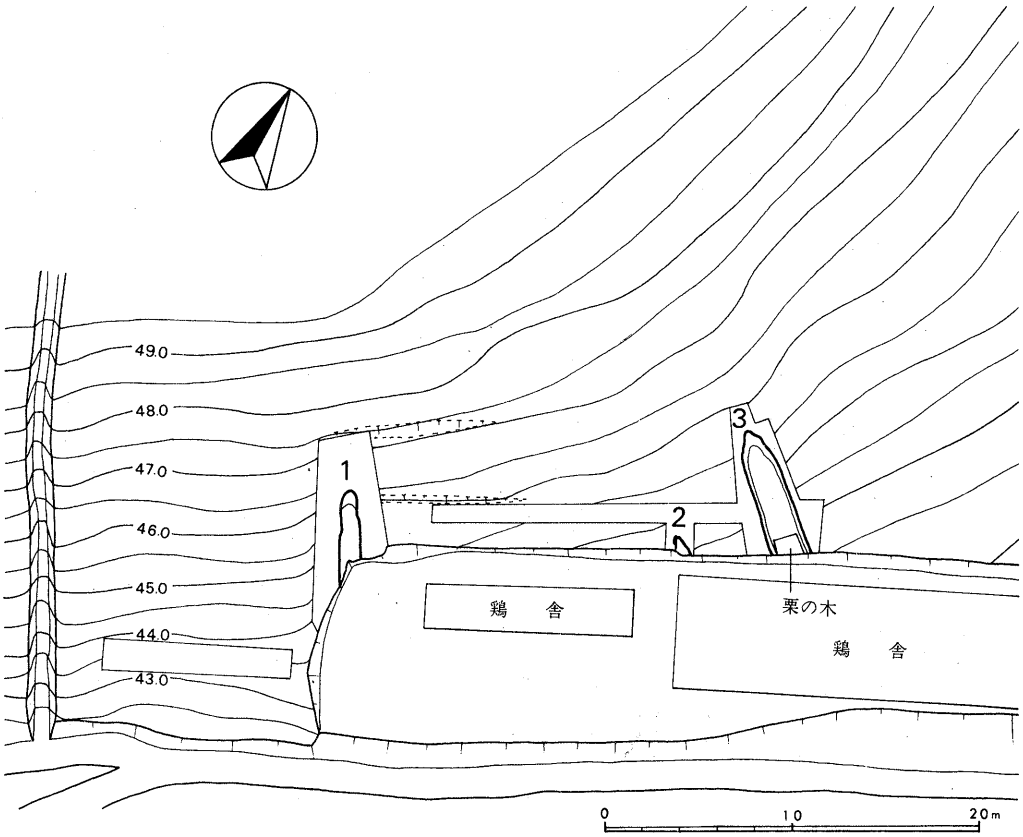
3年次に調査を行った山田窯跡および昭和49年9月に地形および窯内の実測を実施した国指定史跡の友枝瓦窯跡、現存しないがかって多量の瓦が出土したといわれている桑野原瓦窯跡も合せてここで報告することにする。

1.　山田窯跡の調査

山田窯跡は築上郡新吉富村大字安雲字テルヒに所在する。昭和43年に鶏舎建設のため造成した折に発見されたものである。

窯跡は、標高807mを測る雁股山から東北方に延びる尾根が松尾山を基点として三つの支脈に分かれ、更に南の支脈は二つに分かれるが、その北方に延びた丘陵の先端近くの東側斜面に位置している。現水田面との比高差は10m前後である。

調査前には瓦窯跡が1基と考えていたが、他に2基の窯が確認され計3基となったので、南から1・



第29図　山田窯跡地形地測図

2・3号窯とした。

〔1〕 遺　　構

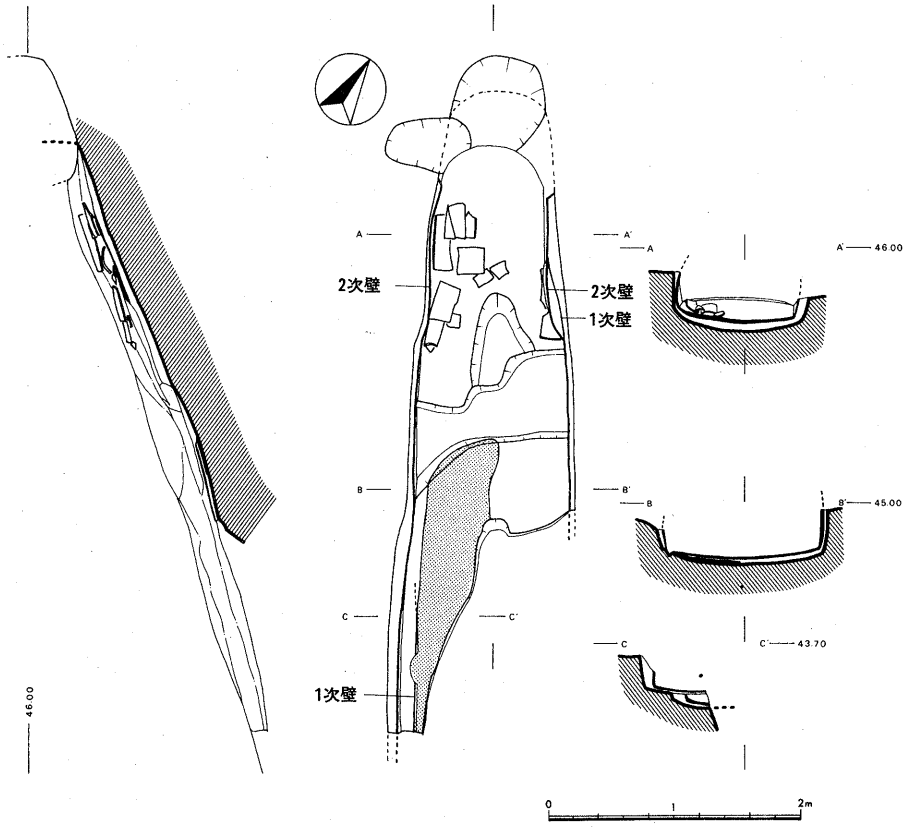
1. 第1号窯跡（第30図、図版11～13）

焼成部のみが約6.4m残存していた。窯の中軸線はN－32°－Wで、地形上から半地下式の登窯であったと考えられる。窯底面は、21°30′の傾斜をもつ。

改修を1回行っており、その改修は、燃焼部寄りの焼成部では壁を約15cm拡張し、中央部窯尻寄りでは第1次の壁に粘土と丸瓦片を塗り込んで逆に約10cmその幅を縮少している。窯尻は大きく攪乱を受けているため、明確にはし難いが、若干立上りが認められる部分があることから、ここが窯尻と考えられる。

落下して遺存していた天井部および壁体の塊りからそれらはスサ入り粘土で塗られていたと想定できる。

出土遺物は、燃焼部寄りでは丸瓦、中央部付近から窯尻にかけては平瓦が多く発見されたことから、瓦の種類により焼成する場所が違っていた可能性がある。



第30図　山田第1号窯跡実測図

2．第２号窯（第31図、図版13）

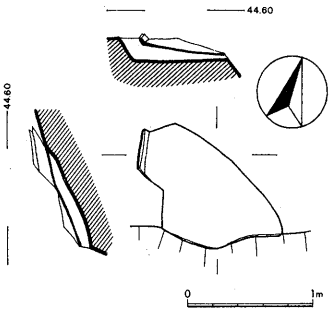
床面および壁の一部が残っているのみで、かろうじて窯跡と判別できるのみである。

床面上から瓦片および須恵器の蓋が出土していることから瓦陶兼業の可能性を有している。

3．第３号窯（第32図、図版14）

調査開始前に断面観察により確認した窯で、その断面から２回の改修が知られた。

そこで、最終期のプランを先ず検出し、次いで、東西・南北に床をわり、その断面を観察することにより、II・I期の規模を探る調査方法を採ることにした。

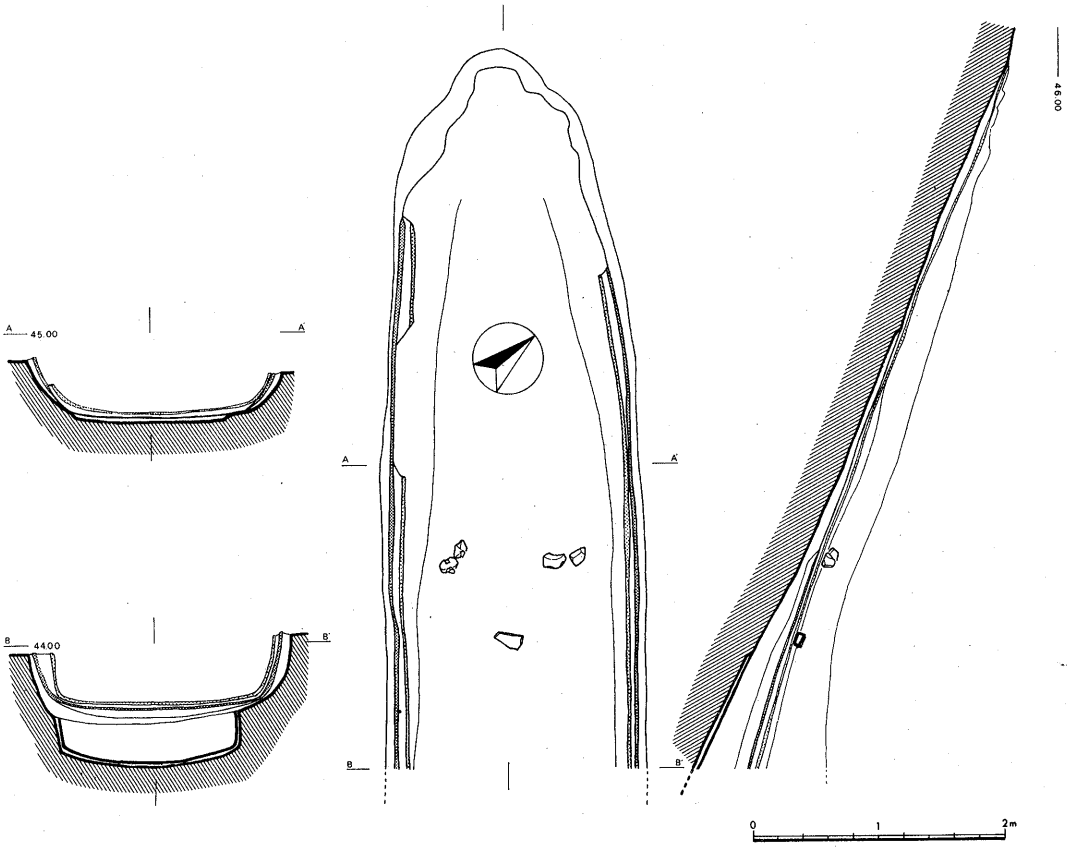


第31図　山田第２号窯跡実測図

崖面近くに栗の木があるため、残存部の全掘はできなかった。

主軸はN－40°30′－Wで、床面傾斜は新らしくなるにつれて緩やかになる。

III期　最終期のもので、窯底面は17°の傾斜を持つ。煙出し部は削平のため不明であるが、残存部先端が平面的には穴状に丸味を有することからこの付近が窯尻になると考えられる。幅は、AA′部分で



第32図　山田第３号窯跡実測図

1.7m、BB′部分で1.75mを測る。II期に比して壁を5～7cm縮少し、床を5～10cm上げている。

焼成途中で天井および側壁が崩壊したと考えられ、焼け固まったスサ入り粘土の下から多量の須恵器の破片の出土をみた。

窯内中位に横に並び床に付着した4個の石を検出したが、そのうち2個には杯片が付着していたことから石も焼台として使用していたと考えられる。

II期　窯底面は18°30′の傾斜を持つ。I期の窯を大改造し、大きく拡張している。BB′部分では約45cm床上げし、右壁は35cm、左壁は15cm幅を広げている。II期の床は途中でIII期の窯改修の際カットされているため、調査により検出した長さは1.7mほどである。

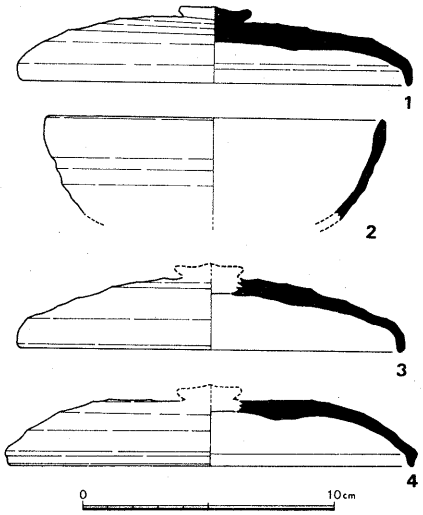
I期　床面傾斜は25°30′である。BB′部分では幅1.4m、高さ0.3mを測り、壁は直近くに立上り、床面は丸味を呈す。

〔2〕 遺　　物

1. 第1・2号窯跡出土土器（第33図、図版37）

出土した遺物は全て須恵器である。杯蓋天井部のヘラ削りは全体的に丁寧で、ロクロ回転方向は時計まわりである。

1・2は1号窯出土のもので、1は昭和43年に丸瓦とともに発見された暗灰色を呈す完形の杯蓋である。口縁部外側は丸味を持つため、稜線はにぶく、この稜線が最大径となるため、口縁端部は若干内側に入いる。2はAA′部分付近で平瓦とともに発見したものである。細片のため正確な法量は不明である。残存部は全てヨコメデ調整である。焼成は軟質で黒色および赤黄色を呈す。器形は高台付杯身かと考えられるが、高杯の杯部かも知れない。3・4は2号窯出土の杯蓋で、3は床上、4は攪乱土中から発見したものである。3は細片のため、4は焼き歪みのため口径は推定復元して図示した。両者ともつまみが剝げた痕があることから1と同種のそれが付くものと思われる。3は口縁部の稜線よりも口縁端部の径が大きく口縁部は外開きとなる。4の口縁は断面三角形を呈し、最大径は口縁部稜線にある。



第33図　山田第1・2号窯跡窯内出土土器

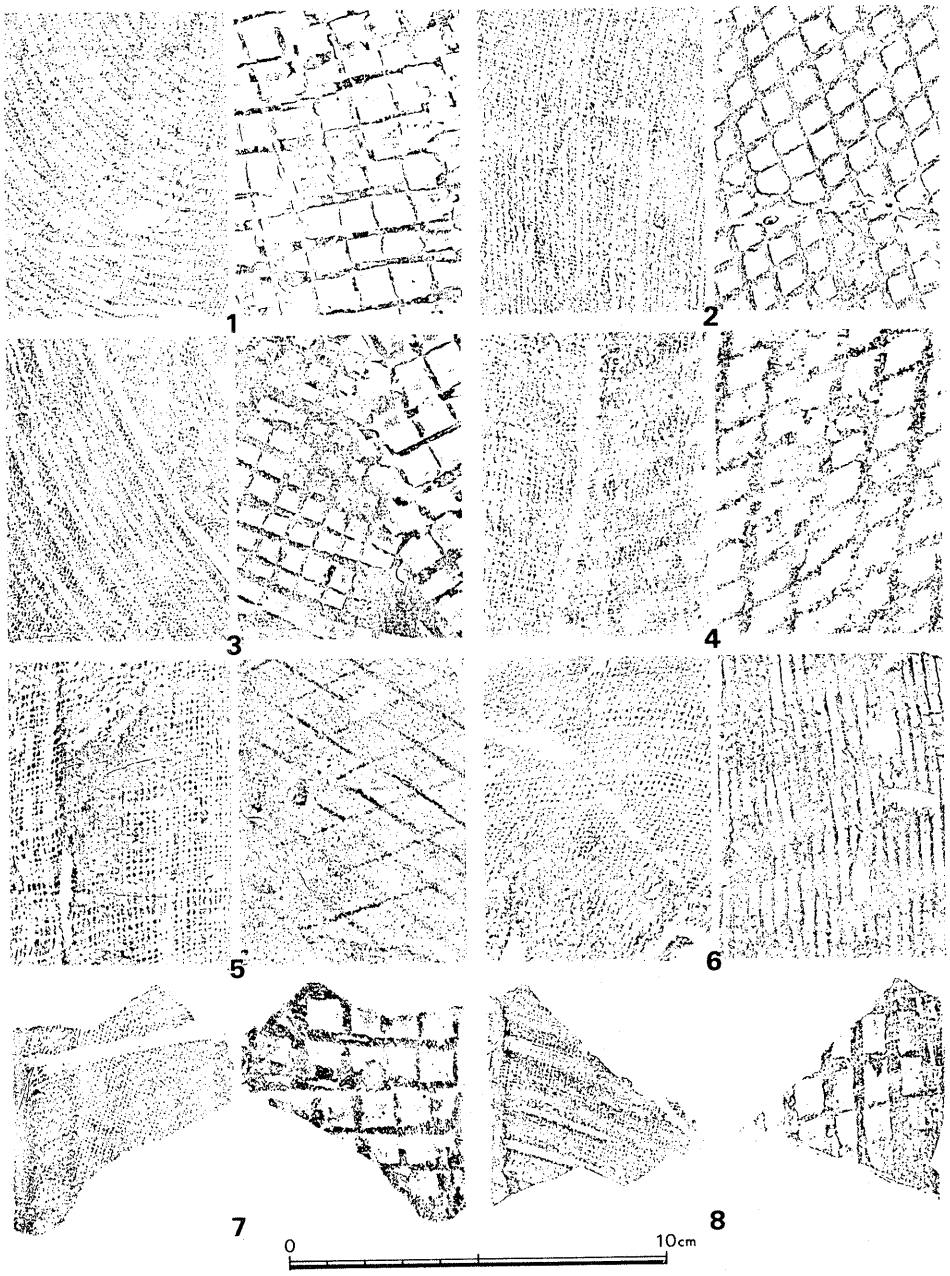
以上、4点の須恵器はその形態・特徴からほぼ同時期のものと考えられ、その年代は少数の杯蓋のみから即断しがたいが、4の口縁にみられた特徴と同様な蓋が大宰府政庁東北回廊跡調査時に検出した最下層（第1次整地層）から有返りの蓋とともに少数ではあるが出土していることから、その上限を7世紀後半に求めることができる。

2. 第1・2号窯跡出土瓦（第34図、図版34～36）

今回の調査で出土した瓦類は、丸・平瓦である。1号窯跡では焼成部中から多量に出土した。又2号窯跡からは須恵器と共に3個体出土した。第34図1～6は1号窯跡、7・8は2号窯 跡から出土し

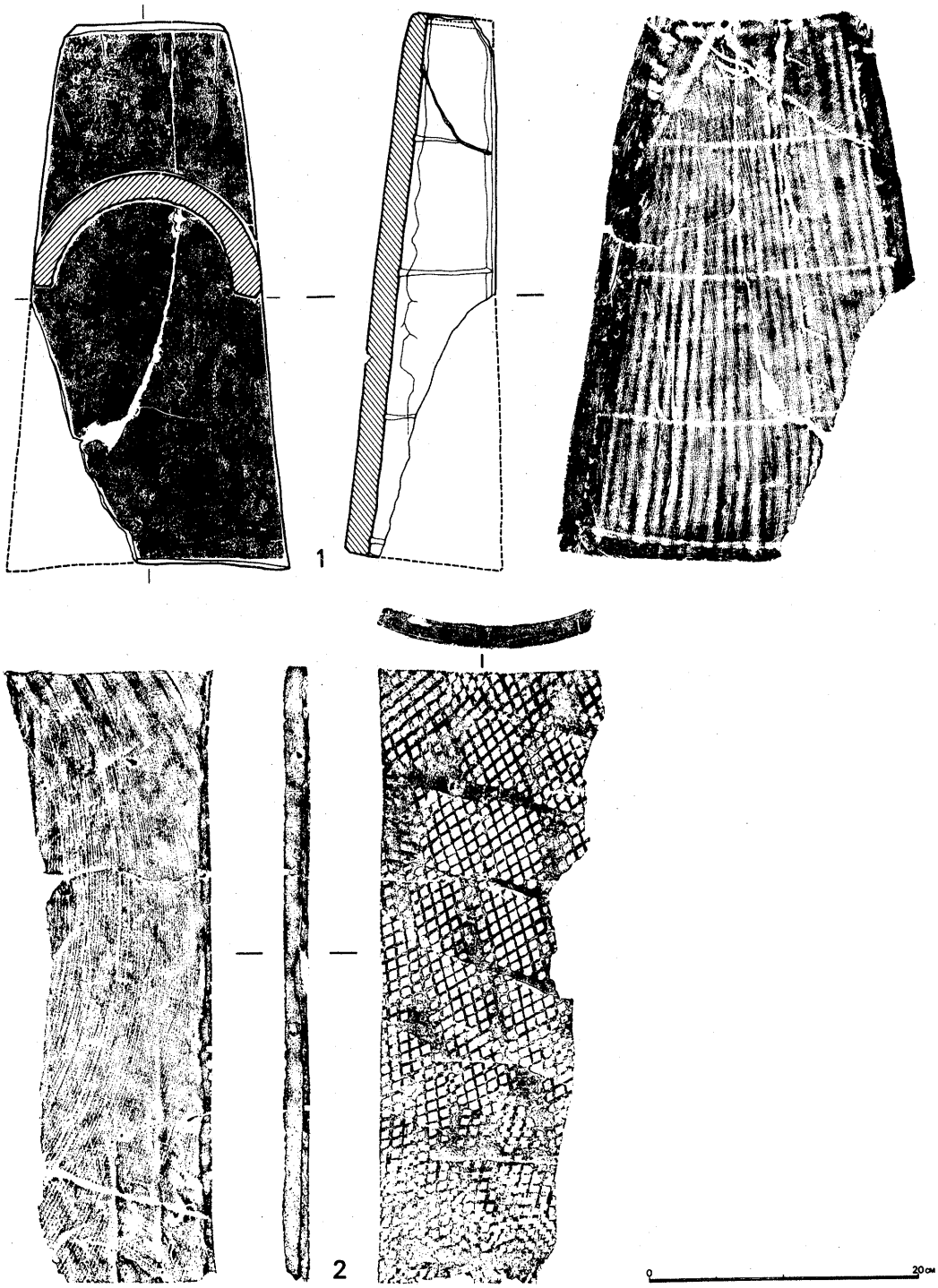
たものである。これらの瓦類の中で第35図に示したものは、完形に近いものないし製作技法の明らかなものを載せた。

叩文様は1号窯跡で6種類、2号窯跡で2種類に分けられる。1は幅約0.2cmの太線に囲まれた一辺0.8cmの不整格子目文である。胎土には砂粒が多く、焼成は硬質である。今回発見したものの中では最も出土数が多い。凹面は粘土板糸切痕が明瞭である。2は一辺が0.7cmの斜格子目文で、一見菱形に近い整った叩文様である。凹面の布目痕は細い糸切痕が明瞭である。垂水廃寺跡出土の叩文様の第18図A－25、26に類似する。3は一辺が0.4cm～0.5cmの不整格子目文と1の叩文を組合せたものである。細い不整格子目文は第18図A－8に類似する。凹面の糸切痕が明瞭である。4は0.3cm～0.4cmの太線により構成された荒い斜格子目文様である。一辺が1.1cm～1.2cmで、凹面の布目痕も荒



第34図　山田第1・2号窯跡出土瓦拓影

い。５は第18図Ａ－28に酷似し、一辺が1.2cmと1.5cmを測る整った平行四辺形状のものである。６は一辺が0.3cmの細い正格子目文で、第18図Ａ－37に類似する。須恵器（甕）の叩文に酷似している。７は１に類似した不整格子目文である。焼成は軟質で胎土には砂粒が多い。第18図Ａ－19に類似す



第35図　山田第１号窯跡出土瓦実測図・拓影

る。８は横1.0cm、縦1.2cmのゆがんだ長方形を一単位とした格子目文である。７にやや類似するところがある。

次に本窯跡出土瓦に見られる製作技法について若干述べることにする。

丸瓦は行基葺のみ出土した。第35図－1は長さ40.2cm、厚さ1.9cmを測る。模骨による技法で、凹面には１本が広端部で幅約1.0cm、狭端部に従い徐々に細くなり幅0.5cmとなる。その１本が半裁した丸瓦凹面に24～25本あり、簾状に紐で組編まれ、その紐は幅約8.5cm～10cmの間隔で5ケ所認められる。したがって円筒模骨を復原すると約50本前後の本数となる。これらの模骨は豊前地方のみに出土するもので、垂水廃寺をはじめ法鏡寺、木山廃寺などからも発見されている。その他、模骨への粘土板の重ね方は瓦側縁にそって、平行に重ねている。又布の継目は明瞭である。凸面および小口面はヘラないし指ナデにより整形しているが、凸面部に第34図－６に類似した叩文様が一部のこっているのもある。

平瓦（第35図－２）は長さ45.2cm、厚さ1.8cmを測る。凹面は糸切痕を有し、凸面には幅約６cmの斜格子目文が連打されている。叩板の幅は６cmを測るが、その長さは明らかでない。

３．第３号窯跡出土土器（第36・37・38図、図版37・38）

Ⅲ期　（１～42）　出土した須恵器は、杯蓋・杯身・無蓋高杯・有蓋高杯・坩・瓶・甑・鉢・甕で、このうち甕は焼成後二次的に火を受けているものがあることから石とともに焼台として使用されたものと考えられる。須恵器は多量に出土したにもかかわらず、完形のものは一点もなく、全て破砕している。また、焼成途中のためか焼成不良のものが多い。ロクロ回転方向は全て時計まわりである。

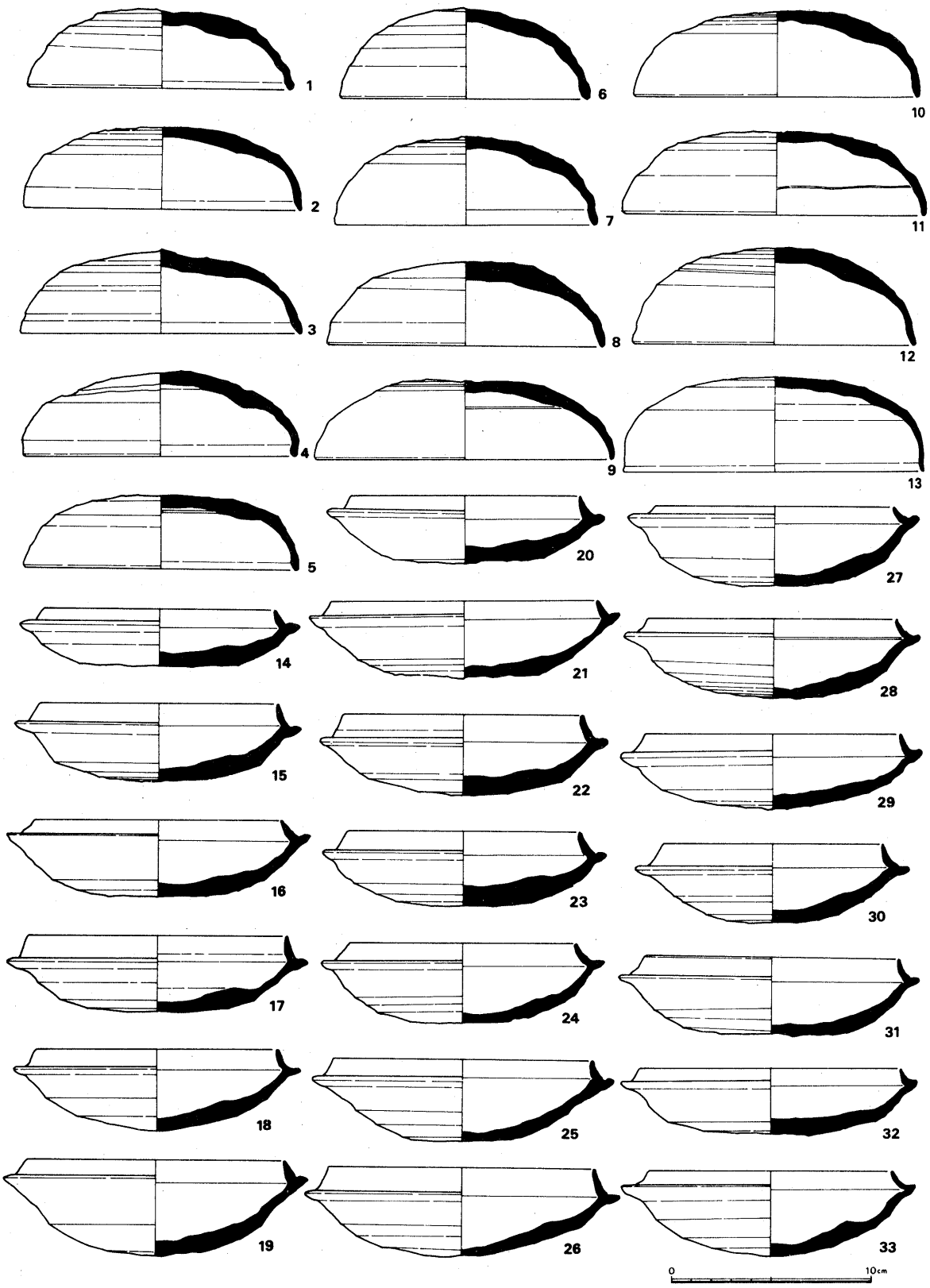
杯蓋（１～13）　口径から13cm前後のもの（１・６・７）、14cm前後のもの（２～５・８・10・12）および15cm前後の大型のもの（９・11・13）に大別できるが、形態上の大きな差異はない。天井部は全て回転ヘラ削りを行っている。しかし、少数ではあるが天井部中心部を削り残こしているものもある。内面に青海波文のタタキ痕があるもの（4・5）もあるが量的には少ない。これは杯蓋のみにみられ、杯身にはない。

杯身（14～33）　杯身蓋受け立上りは、粘土で貼付し成形している。直線的に内上方へ延びるものと内彎しつつ上方へ延びるものと２種あり、量的には前者の方が多い。内彎しつつ立ち上るものは蓋受けと体部との内面の境いに明瞭な沈線を生じる。これは立上りの中位を内側に押すことによって体部との間に瞭間が生じたためであろう。外底部のヘラ削りは蓋と同様に丁寧であるが、底部中心まで削っていないものも少数ある。受部外端で径は13.8cm～15.7cmを測るが、大体15cm前後の範囲におさまる。

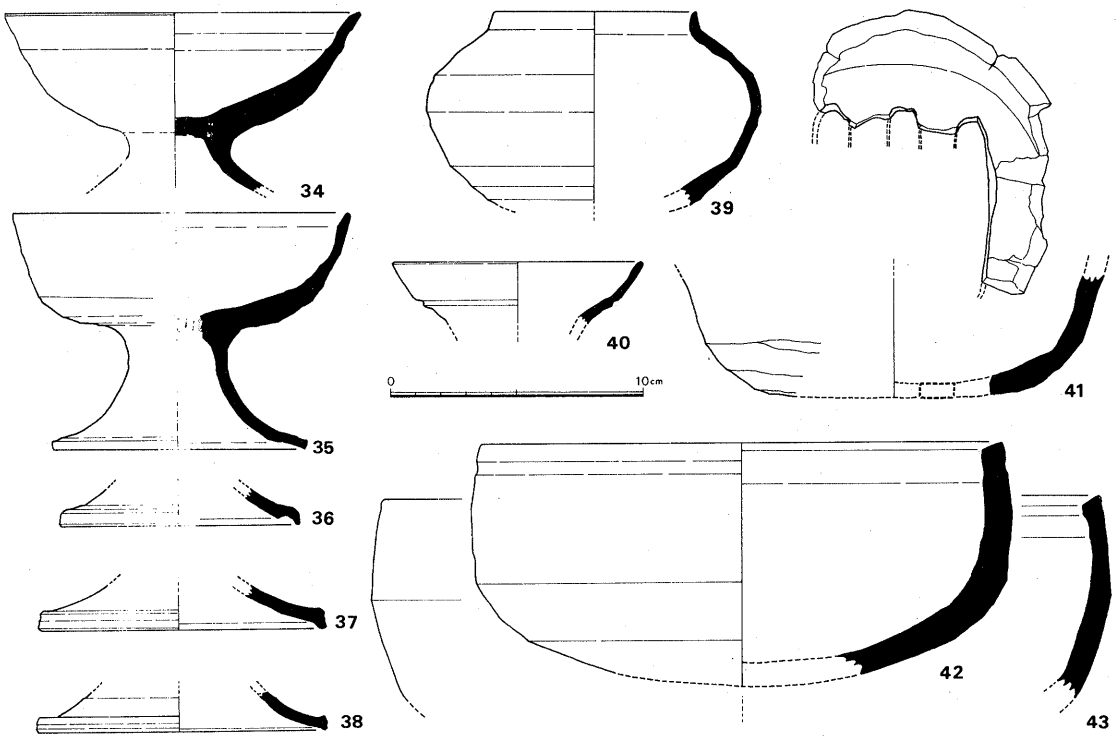
無蓋高杯（34・35）　34は口径14.8cmを測り、杯部・脚部ともにヨコナデ調整をしている。胎土は荒い砂粒を少量含み、焼成軟質で淡茶色を呈す。35は口径13.8cm器高9.3cmを測り、脚部は低く大きく開く。35は34と焼成・色調とも同様であるが相違する点は杯部体部下半は回転ヘラ削を行っていることである。

高杯の脚部（36～38）　有蓋高杯の脚なのか無蓋高杯の脚部なのか不明であるが、38にヘラによって穿孔された痕跡があることからあるいは有蓋高杯の脚部かもしれない。全て堅緻な焼成であり、胎土中に細砂を含む。

坩（39）　口径8.1cmの短頸坩で、底部を欠損している。口縁部は垂直近くに立上り、肩部はゆるや



第36図　山田第３号窯跡窯内出土土器（１）



第37図　山田第３号窯跡窯内出土土器（２）

かに下がり胴部に続く、この胴部上位で最大径を持ち13.1cmを測る。胴部下半から底部にかけてヘラ削りを行っている他はヨコナデ調整である。

瑤（40）　口頸部の一部が残存しているのみであり、口縁と頸部との境いに１条の沈線をもつ。

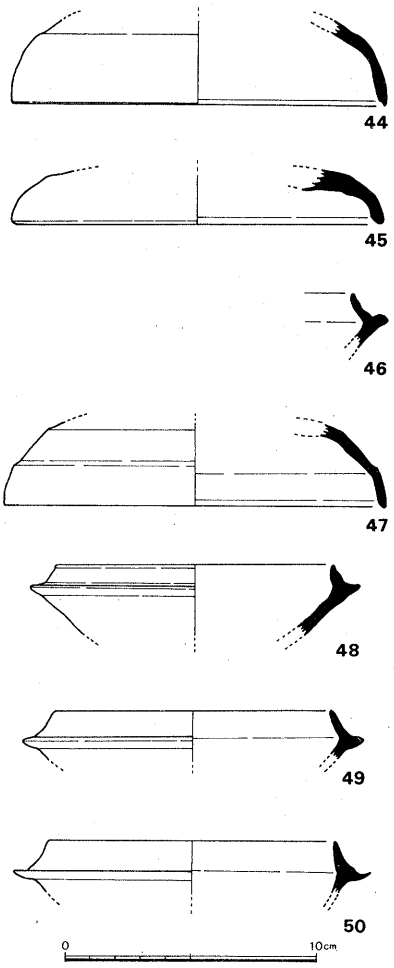
甑（41）　底部および体部の一部が残っているのみである。幅1.1cm前後を測る長方形の穴を底部に３個所穿孔している。焼成は不良で、乳黄色を呈す。

鉢（42・43）　大小２種出土したが、いずれも底部を欠損している。42は口径20.7cm、43は28.5cmを測る。体部下半から底部にかけてヘラ削りを行っている外はヨコナデ調整である。両者とも砂粒を多く含み、焼成は軟らかく、乳黄色を呈す。

Ⅰ・Ⅱ期（44～50）　Ⅰ・Ⅱ期出土の須恵器は全てＢＢ′部分に設定した断面観察用トレンチからの出土である。全て、細片であるため法量はいくぶん不正確である。44～46はⅠ期の窯内から検出した杯蓋・杯身で、44は口縁端部に沈線を残す古い特徴を有している。46・48～50の蓋受け立上りは、粘土を貼り付けて成形している。内彎する立上りを有するものはＢＢ′部分からは出土しなかった。

〔３〕　ま　と　め

山田窯跡群のうち今回３基の調査を実施したのであるが、更に南の斜面および西側の北斜面にも数基須恵器窯が所在している。採集品からみるかぎりではそれらの窯は７世紀前半代のものと考えられ、今回調査を実施した３号窯がもっとも古い時期の窯と考えられる。



第38図　山田第3号窯跡窯内出土土器（3）

1・2号窯は、友枝瓦窯の構造と相違し、半地下式の無段登り窯であり、瓦陶兼業の可能性を有している。また、両窯から出土する須恵器からこの瓦窯は7世紀後半代が上限と考えられる。

丸瓦は全て行基葺であり、また、平瓦の叩文様からみると垂水廃寺出土のそれと同一であることから、丸・平瓦ともに垂水廃寺に供給した瓦窯であることがいえる。

2.　友枝瓦窯跡の調査

〔Ⅰ〕　調査の経過

友枝瓦窯跡は、新羅系の古瓦が出土することから、古くから知られた遺跡である。

窯跡は、築上郡大平村大字西友枝字瓦ウドに位置する。

本瓦窯跡は旧山口高等学校教授弘津史文氏と地元の旧築上史談会有志によって大正2年に発見調査された。次いで柴田常恵氏が踏査され、大正11年10月12日に内務省の史蹟指定を受けた。後昭和5年の夏に森貞次郎氏により再び調査が行なわれた。

窯跡附近一帯は村で買い上げ教育委員会が管理しているが、昭和46年7月説明板、門扉や外柵を整備し、同48年10月懸案の窯跡周辺の大松や雑木20株余を伐採した。1号窯跡は雨水の浸入と風化現象が著しく、天井部は塊真砂の状態にまで進化して壁面全体は亀裂が目立ち、一部は既に剝落も起り憂慮に堪えない状況にあった。そこで保存策を講じるため、関係者によって数回にわたり調査がなされ、幸い昭和49年度国庫補助事業として400万円の予算が確定した。

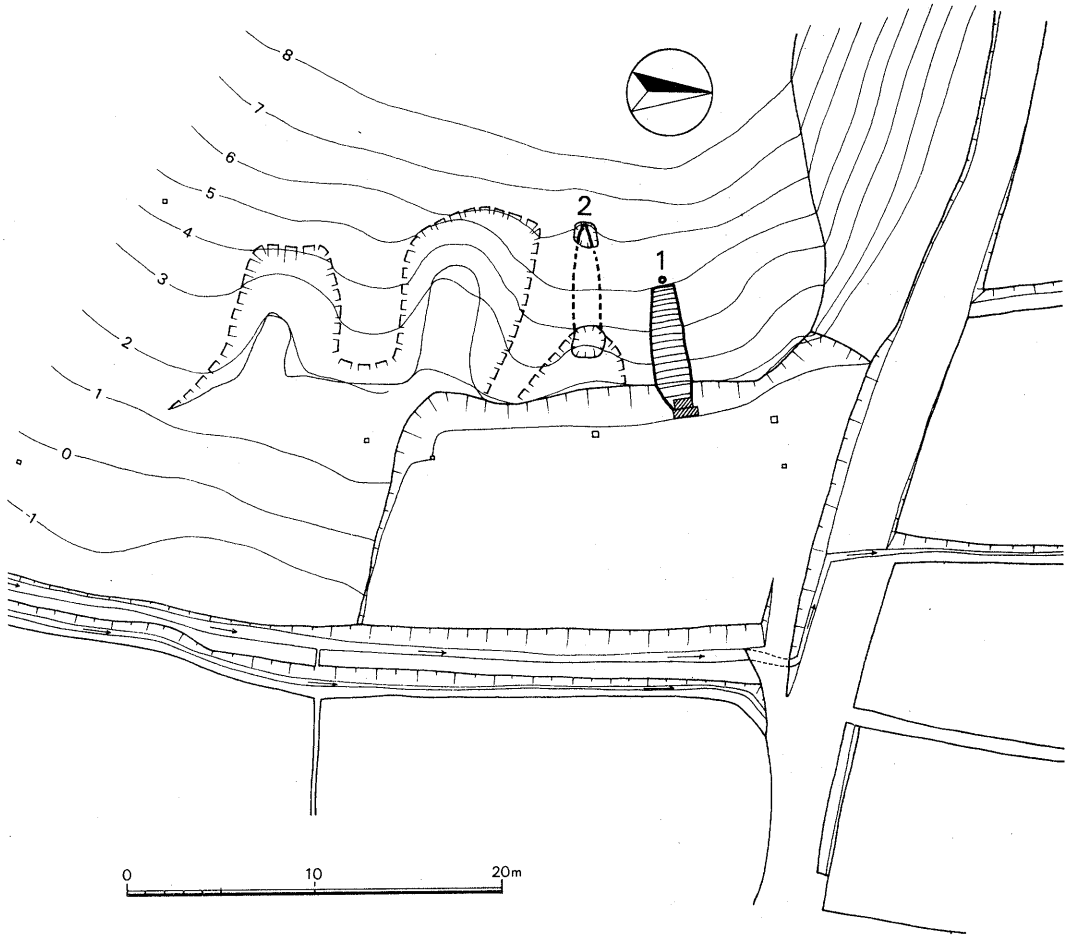
その保存修理工事は石素産業ＫＫ（福岡市）によって昭和49年10月5日着工、同11月2日完了し、タックス注入等による最新式の工法でアーチの壁面や階段の亀裂および欠損部が見事に復旧され関係者一同愁眉を開いた次第である。

〔2〕　遺　　構

前で述べたように、本跡はこれまで3回にわたって調査が行なわれている。よって弘津氏[(1)]と森氏[(2)]の報告をもとにそれらの結果と概要をまとめてみると次のようになる。

① 窯跡は4基遺存し、うち1基は調査を行なっている。[(3)]

② 窯跡は地下式有段登窯で段は15段で2孔の煙道が設けられている。



第39図　友枝瓦窯跡地形実測図

③　焼成物は瓦以外に「陶器」も焼成されていた。

④　原料採取場として２個所指摘している。

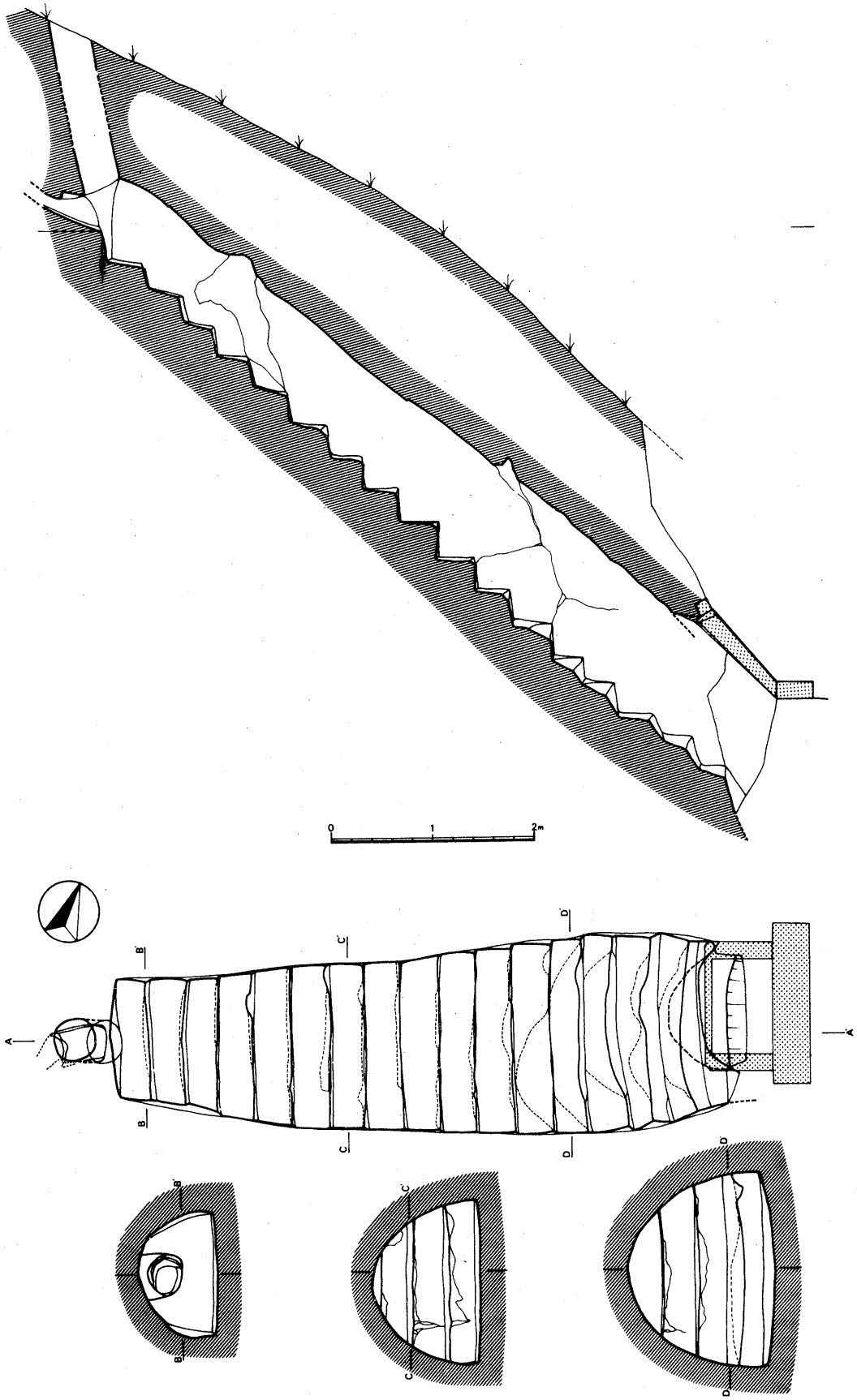
今回はこれらの成果をもとに、１号窯跡について調査を行なった。

１．　第１号窯跡（第40図、図版15・16）

本窯は、硬質の砂岩の岩盤をくり抜いた窯で、いわゆる地下式有階有段登窯である。燃焼部付近がコンクリートによって保存工事がなされているため、燃焼部、焚口部さらに前庭部は調査を実施できなかった。窯体の方位はN－112°40′－Wである。

焚口・燃焼部　一部のみの発掘調査であったので森氏の論文を引用すると「火口幅125㎝、高さ60㎝で火口室幅160㎝、奥行70㎝」と記されている。今回、一部発掘を行なった結果、火口室とした部分は実は埋土であり、さらに２段の段階を追加し、その下に約40㎝以上（それ以上は発掘調査できなかった）を測る落ちが確認された。その形状から、おそらく階と思われる。

焼成部（図版16－１）　焼成部は階の立上り上端部から奥壁までとした。森氏は「火口室より、40度近くの仰角を以て、焼成目的物を置く階段（高さ32㎝、奥行40㎝）を刻みつつ上昇し、15段目にて



第40図　友枝第１号瓦窯跡遺構実測図

735cmの斜面が尽き、煙出し穴となる」と記され、さらに３・７・15段目の幅と高さを記している。今回の調査結果[(4)]では、焼成部の長さは6.15m、最大幅は４段目にあり1.94m、窯尻部で幅1.16mを計測でき、窯尻方に従い徐々にその幅を狭めている。段は15段とのことであったが、それに２段追加され、計17段を検出した。一段の高さは約30～32cm、幅約38cmである。焼成部の床面傾斜角は約44度の急傾斜である。床面は長年の経過もあって、非常にもろく風化した状態で特に中心部付近は摩滅が激しいが、両壁際は比較的遺存状態はよかった。

側壁および天井　天井部はアーチ状を呈し、焼成部前での高さ約1.43m、窯尻部で約0.78mである。そのアーチ線と側壁は、やや側壁が内彎気味に接続し、窯の筒を形成している。側壁、天井共に堅緻に焼けているが、粘土やスサ入粘土等で構築している形跡はない。

煙道部　奥壁から２孔の煙道が設けられている。煙道部においては「上方に通ずるものは直径45cm、奥方は径40cmで、深さ50cm余で埋閉している」と記されている。よって上方のものは約78度の急角度で表土面に通じ、煙出口約40cm、吸煙口約36cm、高さ1.60mの円筒形のものである。さらに一方は奥壁から約24度の勾配で斜後方に通じ、吸煙口約30cmを測るが、この煙出口は発見できなかった。

２．　第２号窯跡（図版16－２）

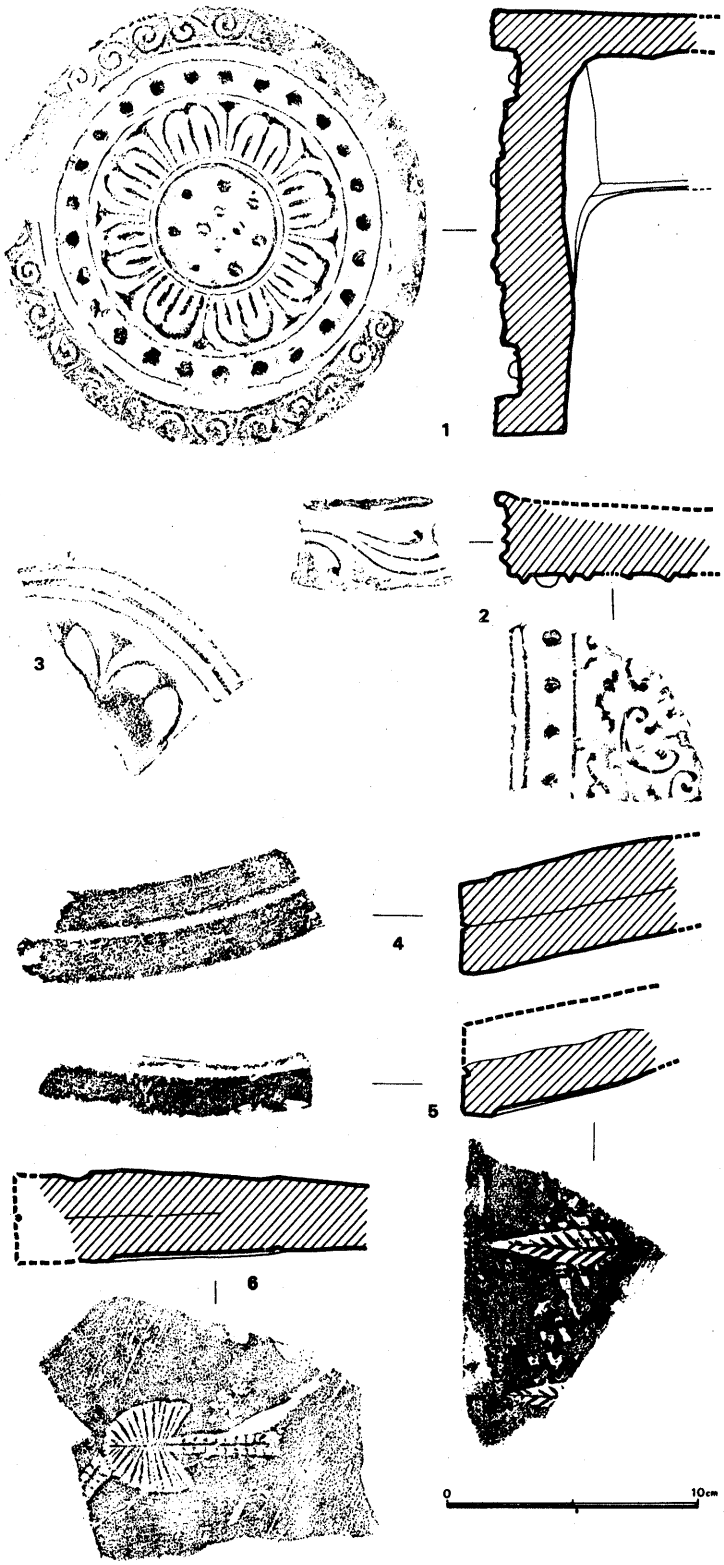
現在燃焼部付近と煙道部と思われる位置に径約1.5m程の穴が穿たれている。燃焼部付近の穴は盗掘されたものと思われ攪乱の形跡が目立つ。穴の距離は約7mあり、1号跡の長さにほぼ一致する。穴中は土砂が堆積しているが、煙道部の穴の壁に焼けた形跡がうかがわれ、窯跡として誤りないと思われる。

〔３〕　遺　　物（第41・42図、図版38）

これまで発掘調査、その他採集等により発見された瓦類の数は多く、今回はそれらのうち主要なものについて載せることとした。軒丸瓦３個体、軒平瓦４個体と丸・平瓦片である。

軒丸瓦はいわゆる新羅系、百済系の２種類あり、１は複弁八葉軒丸瓦で、大平村教育委員会が保管している。瓦当径16.9cmで内区中房に４＋７の蓮子を配している。中房の周囲に細い圏線がめぐり、蓮弁はととのったやや肉厚で丸味をおび、周囲に25個の珠文が廻る。外縁は直立縁で唐草文を簡略化した渦状文が左廻りにめぐっている。胎土には砂粒を含有し、丁寧に指ナデないしヘラで整形している。垂水廃寺出土のものと文様、製作技法が同じである。３はいわゆる百済系といわれるもので垂水廃寺・相原廃寺および木山廃寺などより出土している例から、単弁八葉軒丸瓦と思われる。蓮弁は幅が広く、丸味があり先端はやや尖り気味で強く外反する。外縁は直立縁で一重の圏線が廻る。

軒平瓦は大別して２種類に分かれる。２は小片ではあるが垂水廃寺のものと同種で上弦弧長34.2cm幅3.5cmの狭長なものである。瓦当面は左から右に流れる扁行唐草文を主体とし、その流麗さは老司式軒平瓦の唐草文と類似するところがある。又下顎には約22cmの顎幅の中に方形状の宝相華文様２個を配しその四隅には８個の覗花文をおき、周縁には46個の珠文がめぐる。新羅瓦塼にみられるような様式をふまえている。１と組合うものであろう。４・５・６は平瓦の小口面に一本の沈線を施した重弧文



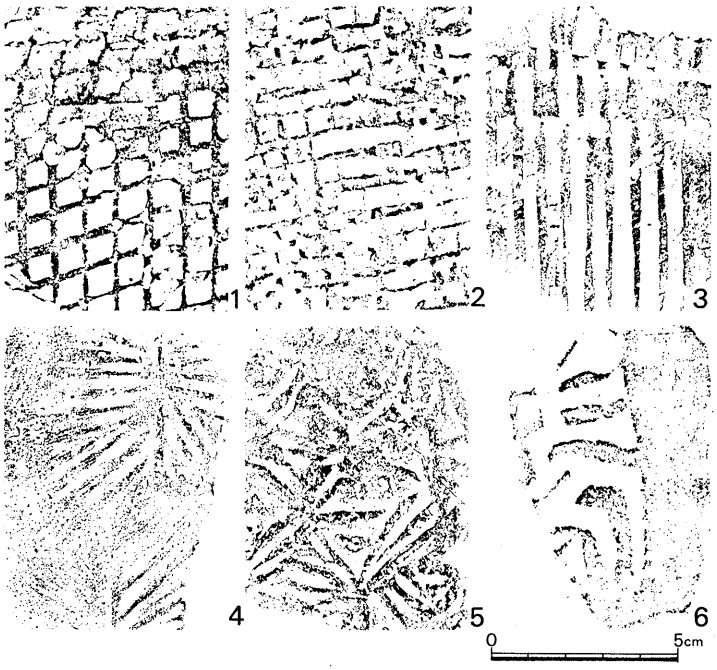
第41図　友枝瓦窯跡出土軒先瓦実測図・拓影

軒平瓦である。これらは、3とセット関係をもつものと考えられる。4は九州大学考古学研究室が保管している。瓦当幅3.7cmで、沈線はなだらかなV字形を呈する。背面は丁寧なナデ調整を行っている。2枚合せの痕が明瞭である。胎土には砂粒が若干含まれ、焼成はやや軟質である。5は瓦当上部が欠損し不明であるが、その沈線は上向きでやや幅広となり、一枚の瓦の厚さ約2cmを測る。顎部に長さ7cm、最大幅1.5cmの木葉文を押印し、文様と文様の間隔約6cmを測る。胎土には砂粒が若干含まれ、焼成は軟質である。一部斜格子目文の痕が残っている。6の瓦当面は欠損し不明であるが、5と同様顎部に翳(さしば)状木葉文を施し、その長さ7cmを測る。文様中央に一本の基線を配し、葉柄部では左右に9本の柄脈を配し、葉部は右に13本、左に14本の葉脈が派生する。胎土は砂粒を含み丁寧なヘラ整形をほどこしている。

丸・平瓦（第42図）は叩文様から全部で6種類に分けられる。1は0.2cmのやや太線による斜格子目文叩きで菱形に近い。格子の一辺は0.6cm～0.7cm前後である。2は一辺が0.4cm～0.5cmの不整格子目文

で二重三重に叩きしめている。3は幅0.4cm～0.5cmの太線の平行条文で、笠型は深く力強く感じられる。4は1基線を中心に9～10本の直線が派生している。5は菊花状文を思わせるが小片であるため文様構成は明らかでない。6は小片のため文様構成は定かでない。

以上瓦類について記したが、友枝瓦窯跡出土瓦は、以前弘津氏より紹介されている。ここに述べた百済系、新羅系と称する瓦類のセット関係については、その文様構成（特に新羅系では唐草文・宝相華文様の使用）ないし垂水廃寺、天台寺等の出土瓦から、1と2、3と4・5・6が組合うものと考えられる。



第42図　友枝瓦窯跡出土瓦拓影

〔4〕　ま　と　め

大正2年の調査以来、注目されてきた遺跡であるが、本格的な発掘調査は実施されず、今日に至っている。したがって構造上の特色を若干記しまとめとする。

まず、有階有段登窯の形態を有する例は、九州では熊本県の陳内瓦窯跡[(5)]と本窯跡の2例である。これらは、焚口部が狭く、燃焼部が丸く、広いもので、急勾配の段が十数段設けられており、全体に細長い形をした特色が指摘される。このような形態は、畿内には飛鳥瓦窯跡、三井瓦窯跡、久米瓦窯跡などがあり、6世紀末から8世紀において構築されたものである。本窯跡もこれらの形態に属しているといえよう。

これとはやや異なるが、新羅系軒先瓦を生産した天台寺2号窯跡（7世紀末）をみると、半地下式で階は設けられていないが、段から段へ登る時の段の張出し方ないし横幅なども[(6)]本窯跡と類似しているところがある。

以上の例などを勘案し、又百済系、新羅系古瓦などから、本窯は7世紀末頃に推定されよう。

註

(1)　弘津史文「瓦窯址発見」考古学雑誌12巻3号　1921

(2)　森貞次郎「我等が郷土の史蹟友枝古代窯に就いて」築上中学校校友会誌　1935

(3)　註2の論点の中で窯跡4基を指摘しているが、そのうち2基は現地表から確認される。のこりの2基については、地形状から、凹凸がうかがわれ窯跡の存在に似合うものであるが、判別しにくいため、本

報告では記さない。

(4) これは斜距離の数値である。

(5) 松本雅明「城南町史」—第二章古代—1965

(6) 小田富士雄「日本の考古学・Ⅵ」Ⅲ－九州 1967

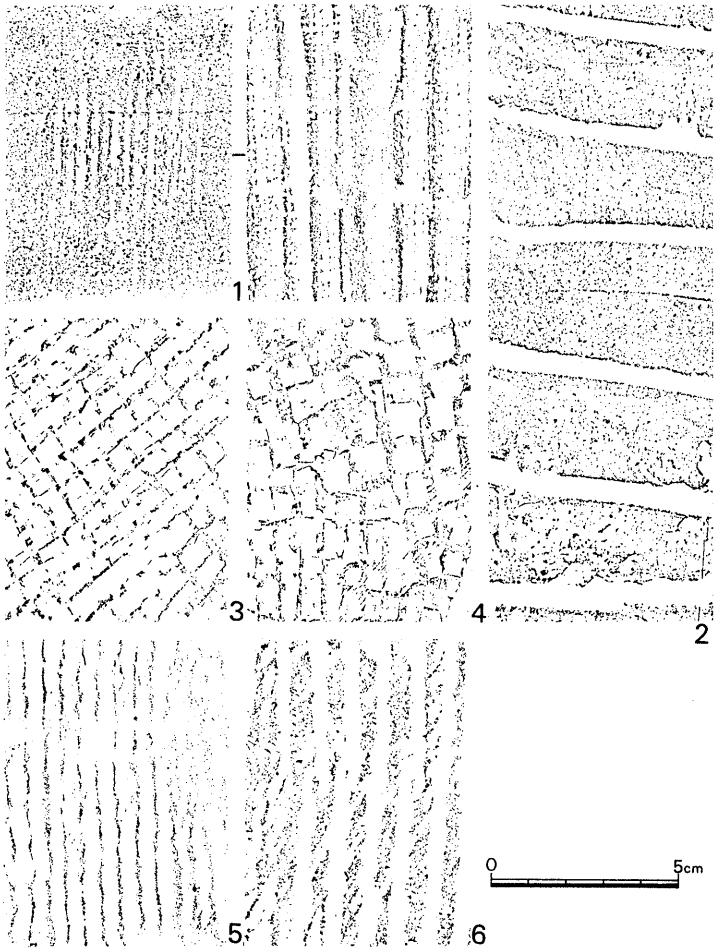
3. 桑野原瓦窯跡

桑野原瓦窯跡は福岡県築上郡新吉富村大字宇野字桑野にある。福岡県と大分県の境に位置する山国川の支流友枝川の東岸河岸段丘上にそれはあり、垂水廃寺から南約1.2kmの地点で、垂水廃寺の３ケ所の供給瓦窯の中では１番近い。

以前は友枝川を眼下にみおろすやや急な斜面から瓦が発見されていたが、現在は道路によってその付近一帯が削られ、遺構は全くわからない。しかし、ごく狭い範囲からかなりの瓦が出土すること、及びその地形などから瓦窯跡と考えられる。遺物はすべて表採品であるが、軒先瓦は発見されておらず、丸瓦、平瓦のみが発見されている。

丸瓦は２種発見されており、１は凸面をすり消しているのではっきりわからないが、約２㎜四方の小格子目文をもち、模骨に幅の狭い竹状のものを使用したものである。２は凸面に６本の沈線を深くほったもので、模骨は普通の筒状のものを使用している。これは垂水廃寺出土瓦叩文集成図のＧ－１と同様のものである。

平瓦の叩文は格子目文と縄目文の２種に大別できる。格子目文は２種の叩文があり、３は３㎜×５㎜～4㎜×6㎜の長方形格子目文で、垂水廃寺のＡ－22と同種である。４は３の叩文と5㎜×7㎜～8㎜×9㎜の正方形格子目文を併用したものであり、垂水廃寺のＥ－2である。縄目文は２種に分けることができる。5は5cm幅に10本の縄目をもったものである。６は５cm幅に６本の縄目をもったものである。これは垂水



第43図 桑野原瓦窯跡出土瓦拓影

廃寺のＦ－８に近いと思われる。縄目文の瓦は一般的に焼成がやわらかく、黄褐色を呈したものが多い。特に６のような縄目の荒いものは厚いものが多いようである。

以上格子目文２種、縄目文２種に分類したが、発見されている量は縄目文が多い。

友枝瓦窯跡、山田瓦窯跡との関係の上では両瓦窯跡が同じ山続きの所に位置していることに対して桑野原瓦窯跡のみが一つ離れて位置することはその性格において他二者とやや異なる点があるのであろうか。また他の二瓦窯跡では現在まで縄目文が発見されておらず、一つの特徴といえよう。しかし、格子目文は類似するものが三瓦窯跡すべてで出土しており、注意を要すると思われる。

Ⅵ　お　わ　り　に

昭和48年度を初年度として３カ年国・県の補助のもとに垂水廃寺の発掘調査を実施してきたが、その成果と問題点を指摘し、おわりとする。

ＳＡ020とＳＢ025およびＳＤ015から方二町と考えられ、地方地院としては広大な寺域を有している。外郭地域から瓦を発見し得ないことから外郭施設は板葺か桧皮葺であったと考えられる。また、寺の方向はＳＡ020を基準とするとＮ－34°11′－Ｅの方位を取り、条里方向がＮ－30°－Ｅであるので若干東に振れている。しかし、ＳＡ020の調査区は狭いことと、遺存状態がきわめて悪かったことを考慮に入れると略条里方向と同一であるといえる。

次いで、寺域内東方建物ＳＢ010は３カ年調査で検出した唯一の掘り込み基壇を持つ建物で、その規模は南北約16ｍ、東西16ｍ以上の東西棟であり、これを金堂跡と推定した。この推定が正しければ、法隆寺式伽藍配置となる。また、この建物の西に接した部分から塑像残片を発見したことは仏教美術史のうえからも貴重なことであった。

寺域中心地域においてはＩ－Ｏ区以外は大きく改変を受けている。その時期は中国陶磁器が示す年代であると考えられ、Ｉ－Ｏ区西半、Ｉ－Ｓ区ＳＤ015、II－Ｃ区、II－Ｈ・Ｉ・Ｊ区では、床土と地山にはさまれた層から出土するもっとも新しい遺物は中国陶磁器であり、また礎石を落とし込んだ穴ＳＸ001からも同安窯の椀、龍泉窯系の青磁椀が出土している。このように中心地域は鎌倉時代12世紀から13世紀にかけてこの地を何らかの目的で使用するために大きく整地しているようである。昭和12年の字図を見ると、この寺域にあたる地は上土居で、その北は中土居、更にその北は下土居、大土居と記されている。そして、この中土居の西は門田という小字名が残っている。このことからこの地に居館があったと推定できる。この居館跡の年代は文献的には不明ではあるが、中国陶磁器を使用した頃に求めることができないであろうか。このことが認められるとすると、Ｉ－Ｊ区の狭長に削られた古墳も、この期に土塁として使用された可能性を持ち、ＳＤ015はその外濠と考えることもできる。

寺院関係の遺物は瓦が主で、他に塼、塑像残片、須恵器などがある。瓦は軒丸瓦（２種）、軒平瓦（２種）、丸瓦、平瓦だけで、鬼瓦などは発見されていない。

軒先瓦はいわゆる百済系単弁八葉軒丸瓦、新羅系複弁八葉軒丸瓦、重弧文軒平瓦、扁行唐草文軒平

瓦である。百済系単弁瓦は豊前、筑前、筑後、肥前など北部九州に主に分布しているが、その中でも豊前は８ケ寺で出土し、１つのグループを形成していたと考えられる。その文様は当廃寺出土のＩ－ｂの類が最も多く、６ケ寺で出土している。Ｉ－ａは垂水廃寺と相原廃寺のみである。文様の変遷はＩ－ａ→Ｉ－ｂが考えられよう。

複弁八葉軒丸瓦は同じ豊前の天台寺廃寺出土の豪壮華麗な軒丸瓦から略化したものと考えられている。

重弧文軒平瓦と近似するものは相原廃寺のみで出しているが、豊前地方全体ではこれに近い重弧文が一般的である。他地方（畿内など）で一般的にみられる瓦当面の幅に比べて広い幅の沈線をもつものは豊前では木山廃寺のみでみられる。

扁行唐草文軒平瓦瓦当面には簡素な扁行唐草文を配しているが、下顎面には他に類をみないすばらしい宝相華文を飾っている。この軒平瓦と直接関係がありそうな瓦はこの付近ではわかっておらず、この文様がどこから生まれてきたかは今後の問題となろう。ただ、小田富士雄氏が指摘しているように下顎面に飾っている宝相華文は新羅では一般的に塼に飾っている文様である。(1)

丸瓦、平瓦ではその叩文が当廃寺の一つの特色であるが、84種もの多種多様の叩文は他の寺院ではほとんど例をみないものである。その中でも特殊文として分類した多様な草葉文、放射線文などは特異なものである。

また製作技法上の問題としては、行基葺丸瓦の竹状材料を使用した模骨は小田富士雄氏が指摘しているように、豊前地方の百済系単弁瓦との関係の中で考えられるものであろう。(2)

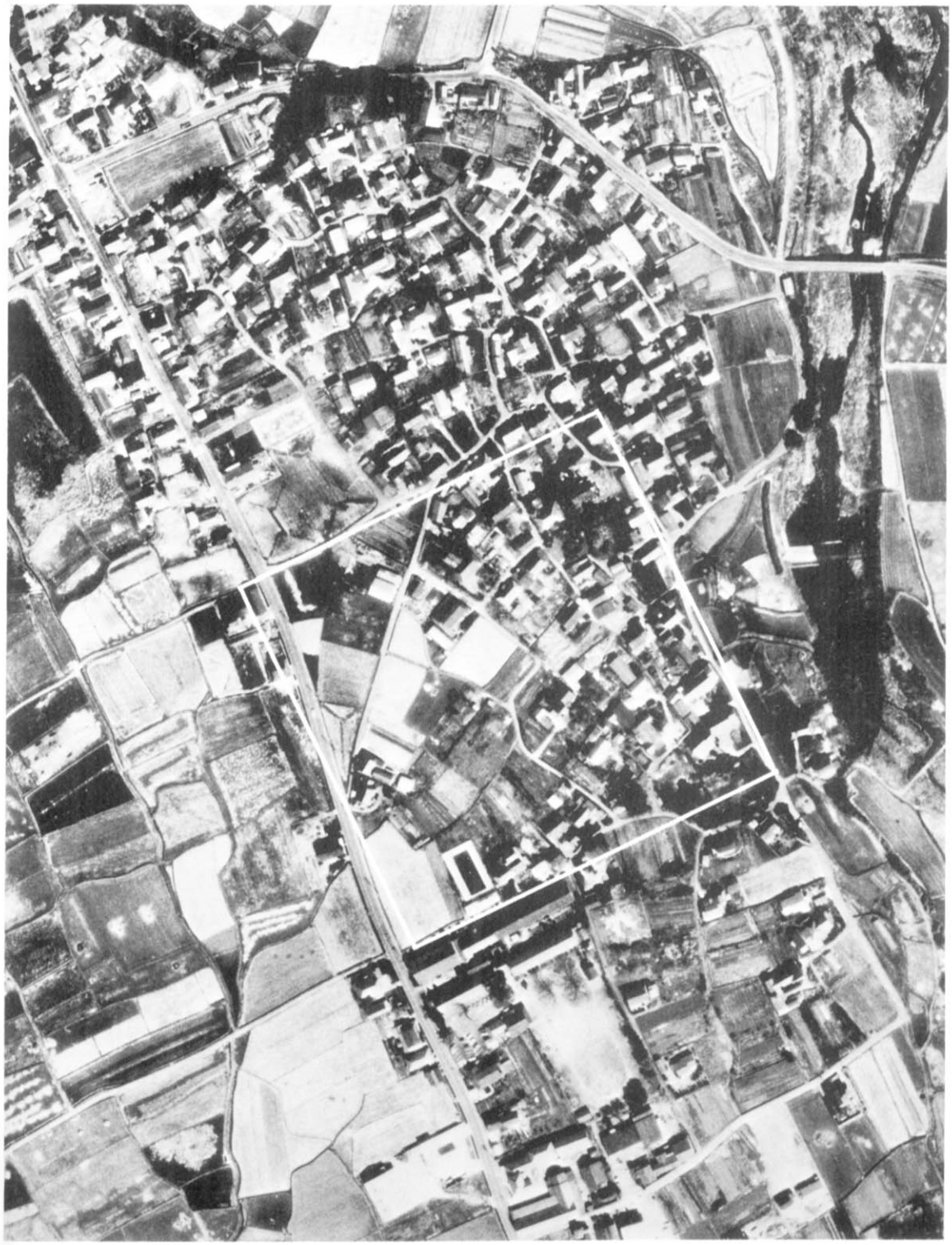
最後に、寺の存続年代は寺跡内からの出土瓦、須恵器および山田１・２号窯跡から出土した須恵器から７世紀後半から８世紀後半の短い期間であったと考えられる。

註

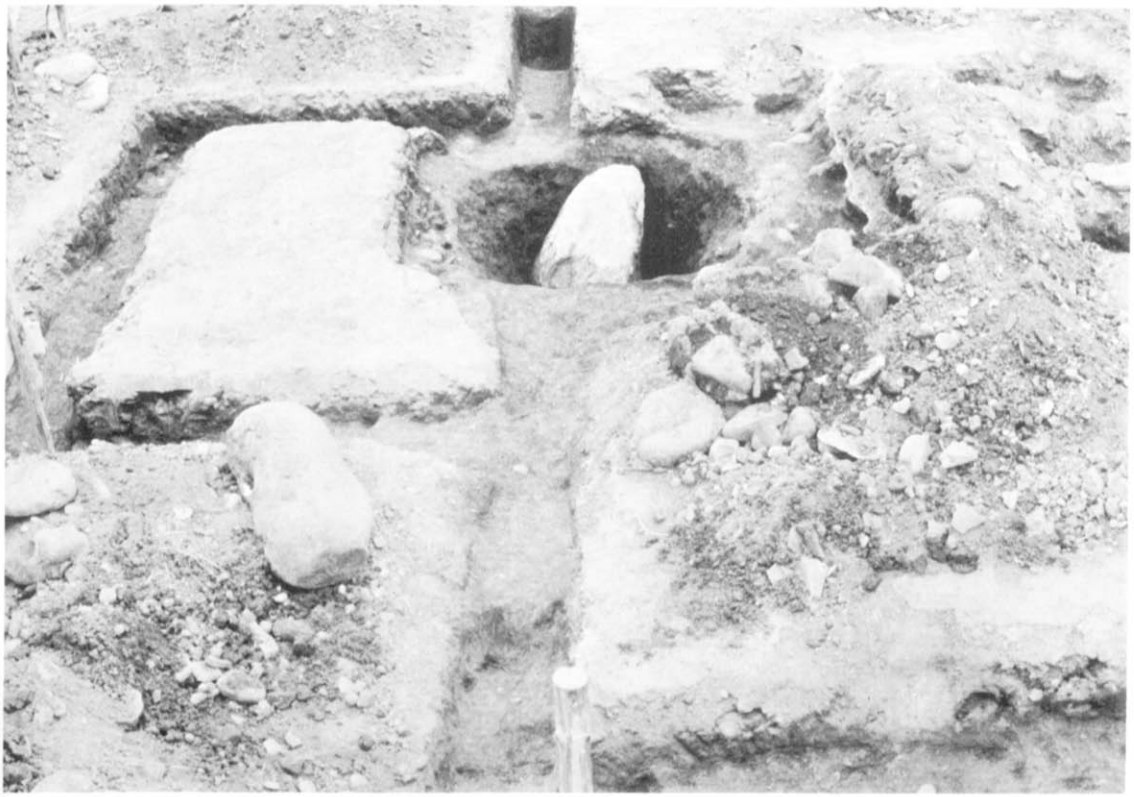
(1) 小田富士雄『図録新羅の古瓦塼』1975

(2) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・二―九州発見朝鮮系古瓦の研究㈢―」『九州文化史研究所紀要』20 1975

図　　版



垂水廃寺航空写真



Ⅰ　SB 010（第1トレンチ・西から）

Ⅱ　SB 010（第3トレンチ・南から）

I　礎石および礎石落とし穴 SX 011（南から）

II　I－O区第1トレンチ発掘調査北側部（西から）

I　SA020（第2トレンチ・南から）

II　SA020（第1トレンチ・南から）

Ⅰ　Ⅳ－F区発掘調査全景（南から）

Ⅱ　SD 015（南から）

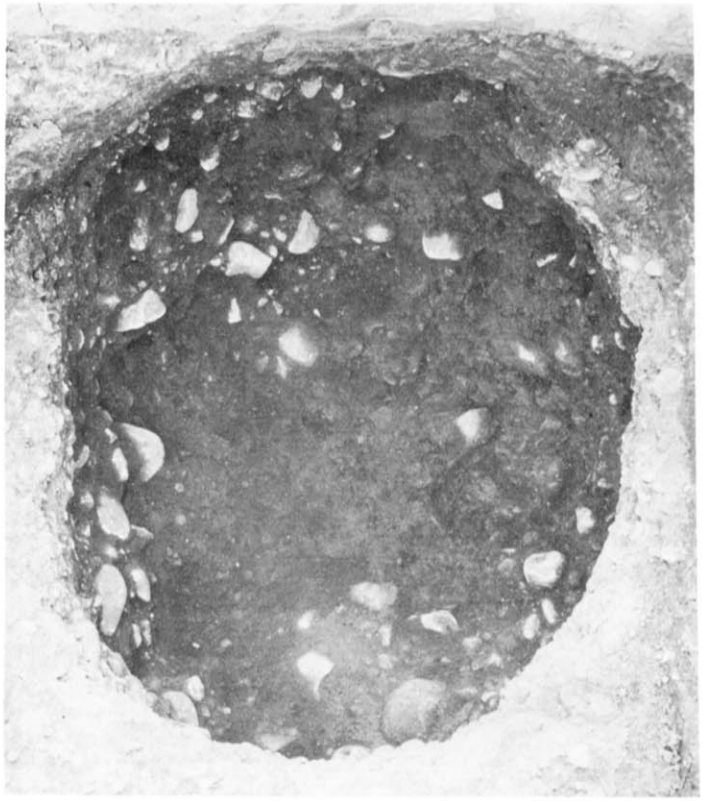
I　Ⅳ－B区発掘調査全景（南から）

II　II－C区第2トレンチ発掘調査（南から）

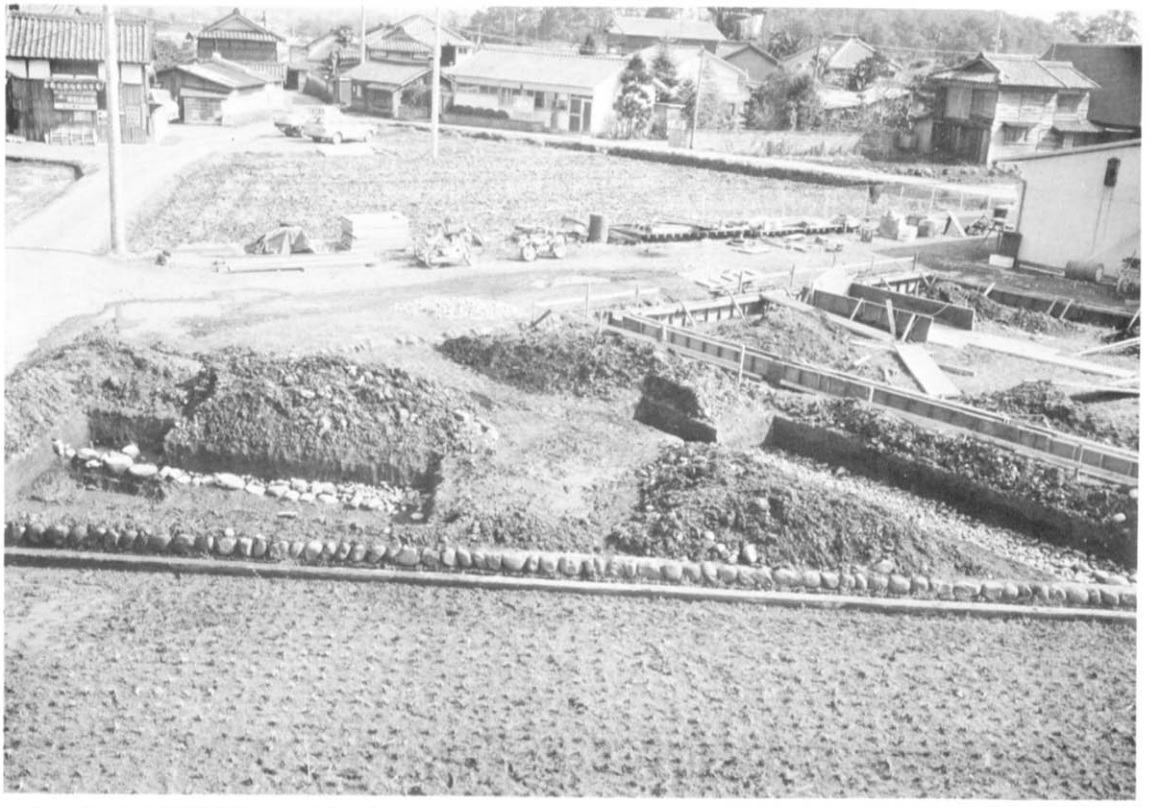
Ⅰ　Ⅱ－H・I・J区第1トレンチ発掘調査全景（西から）

Ⅱ　Ⅰ－I・J区発掘調査全景（北から）

I　SB 002（東北から）

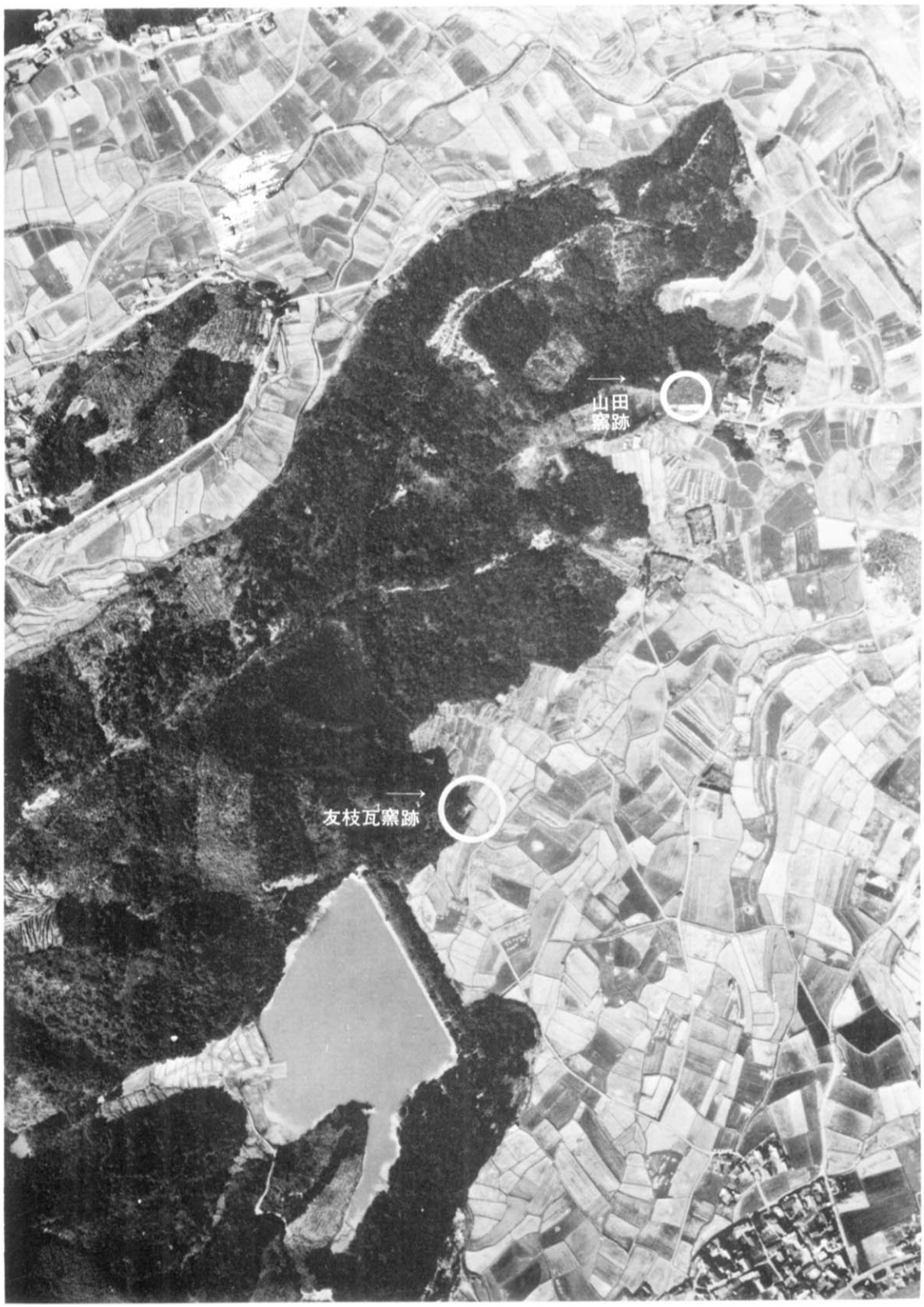


II　SK 024（北 か ら）

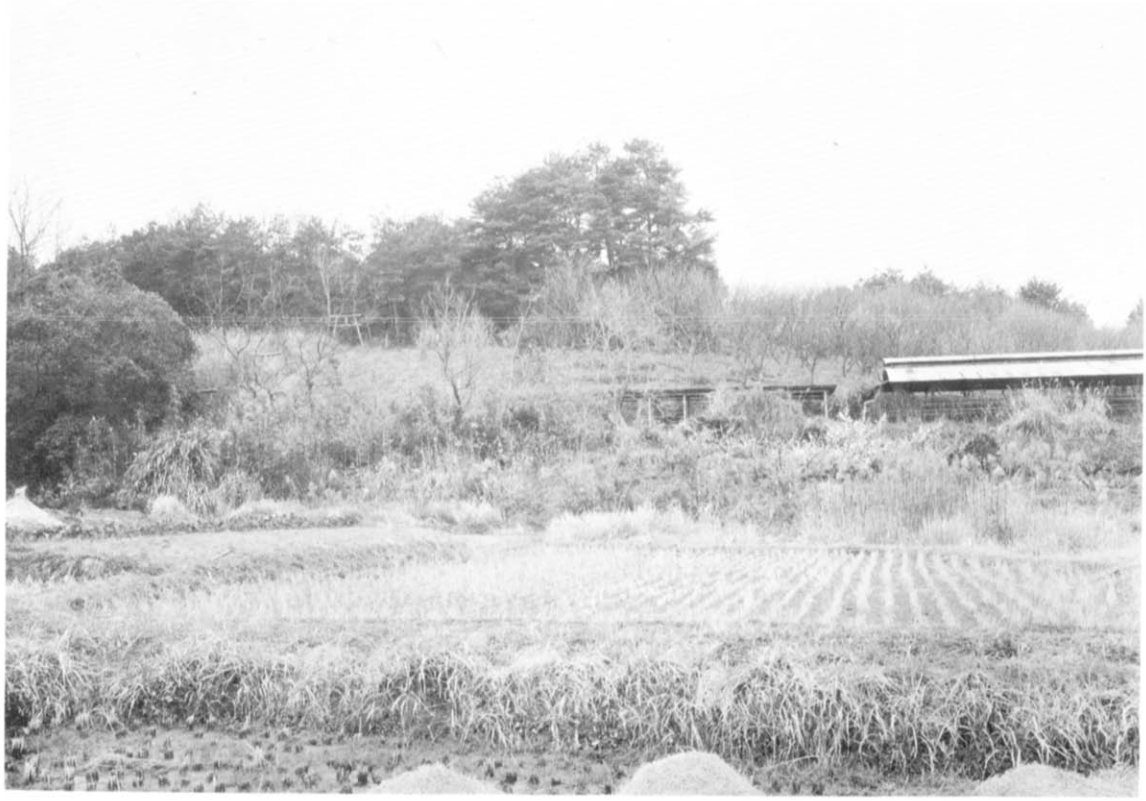


I　Ⅳ－H区発掘調査全景（西から）

II　SX 026（西 か ら）



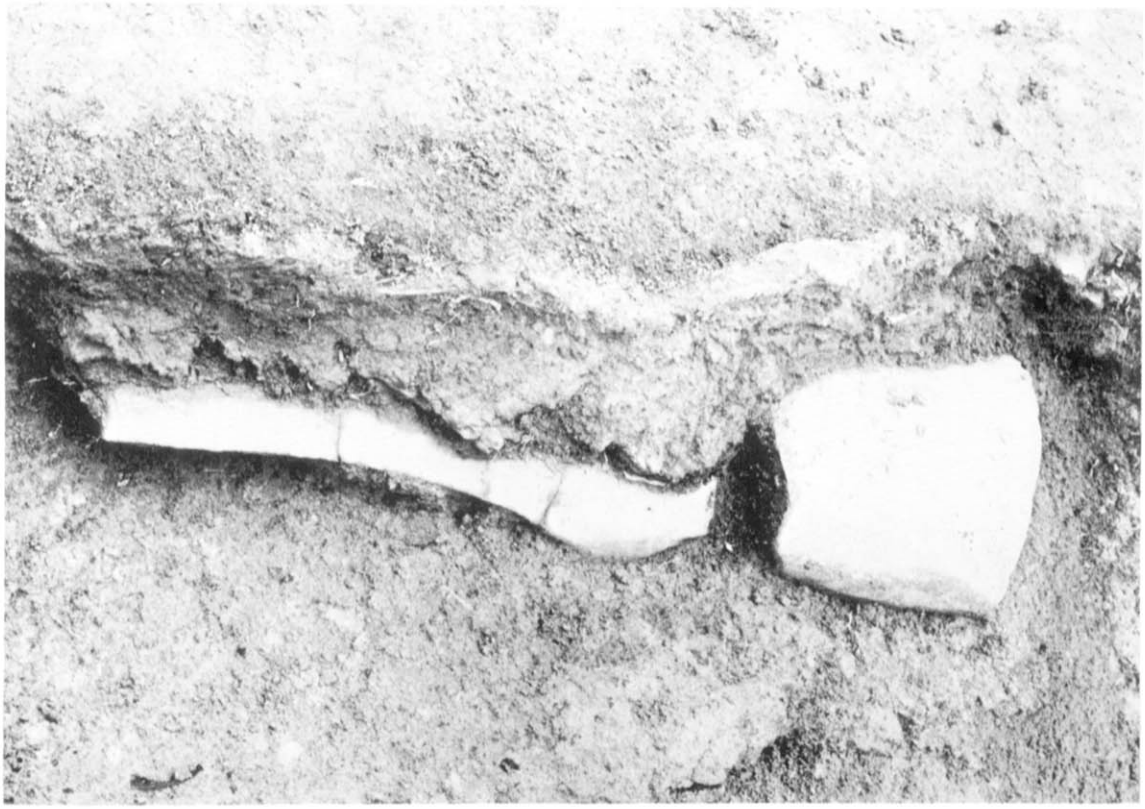
山田・友枝窯跡航空写真



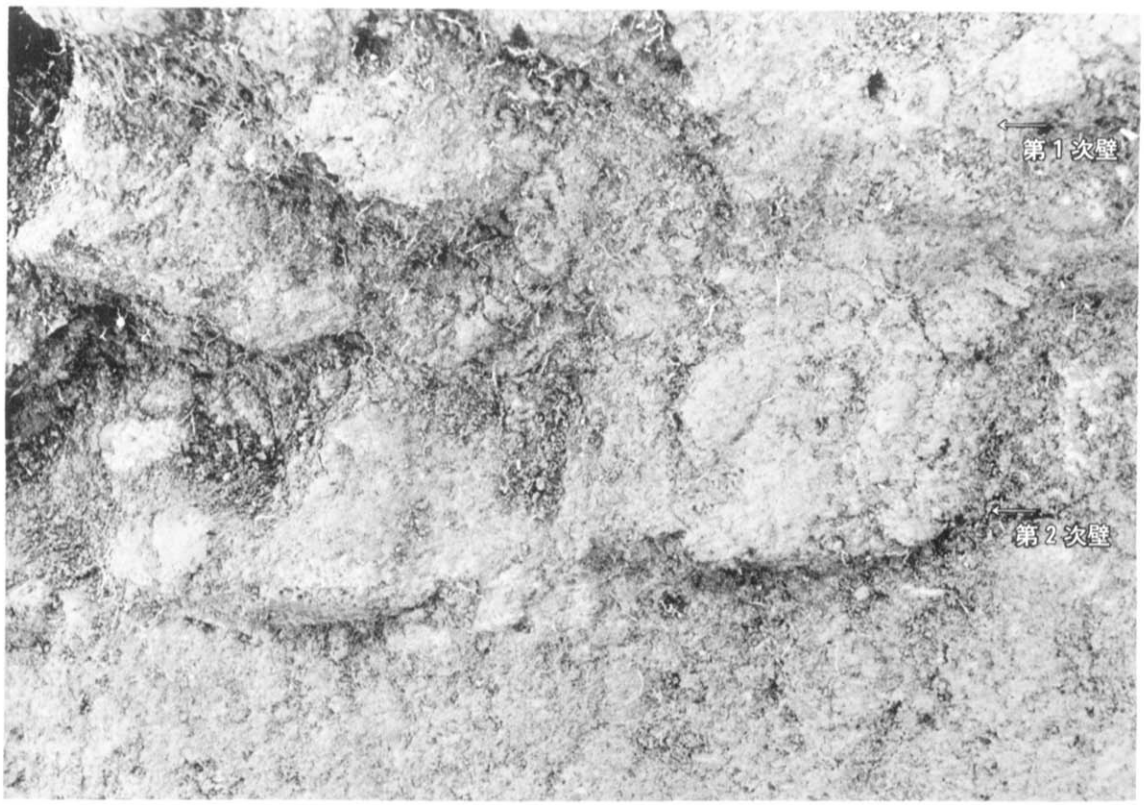
I　山田窯跡全景（東から）

II　山田第1号窯跡（東から）

I　山田第1号窯跡（東から）



II　山田第1号窯跡焼成部右壁改修状態



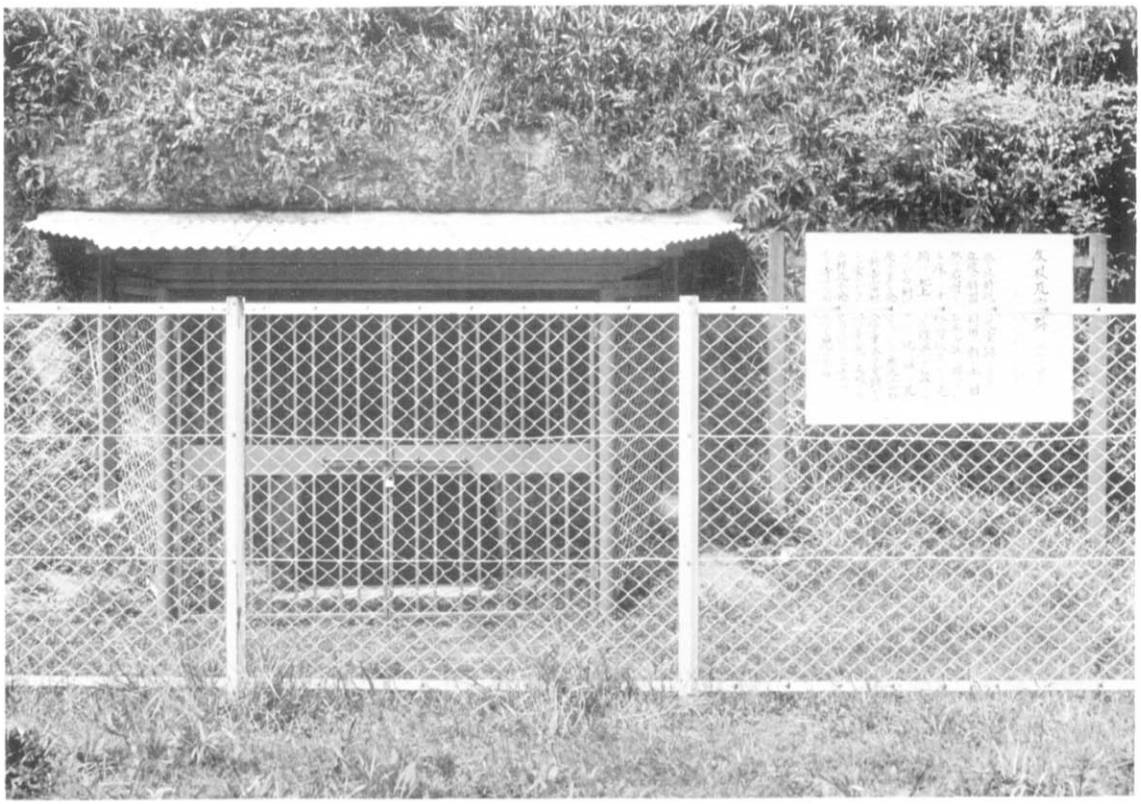
I　山田第1号窯跡焼成部第1次壁，第2次壁

II　山田第2号窯跡（西から）

I　山田第3号窯跡全景（西から）

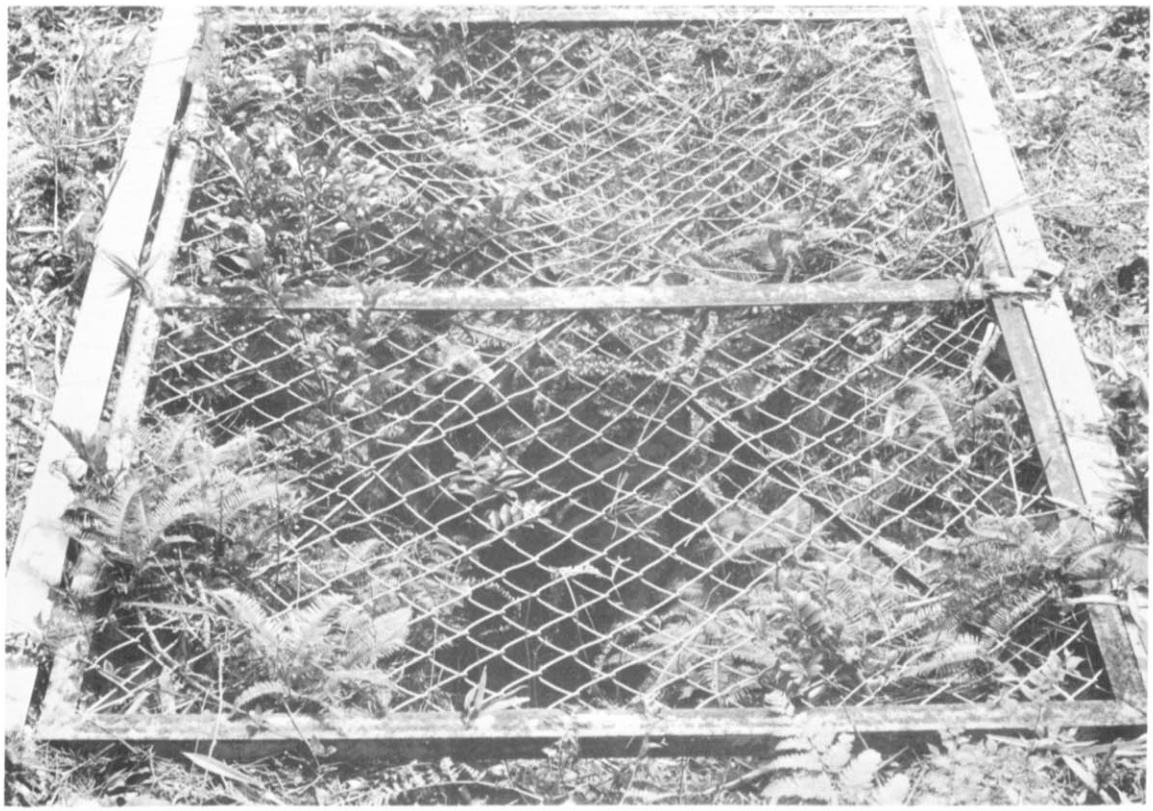
II　山田第3号窯跡窯内須恵器出土状態

I　友枝瓦窯跡全景（東から）



II　友枝第１号瓦窯跡保存施設（北から）

I　友枝第1号瓦窯跡焼成部



II　友枝第2号瓦窯跡陥没穴保存施設

1

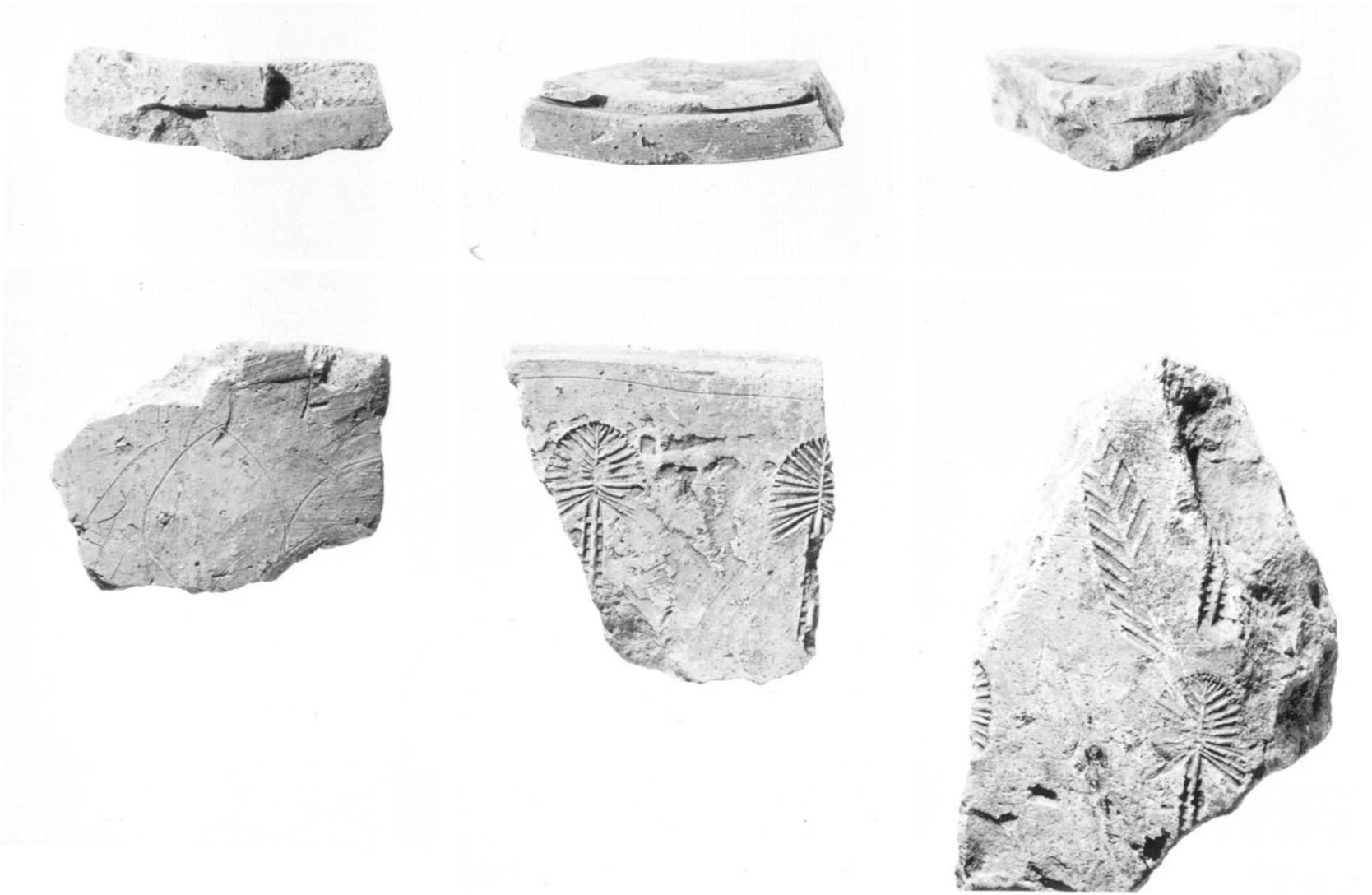
2

垂水廃寺出土軒丸瓦（1）

3

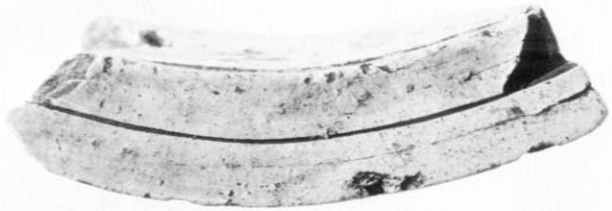
垂水廃寺出土軒丸瓦（2）

垂水廃寺出土軒平瓦（1）



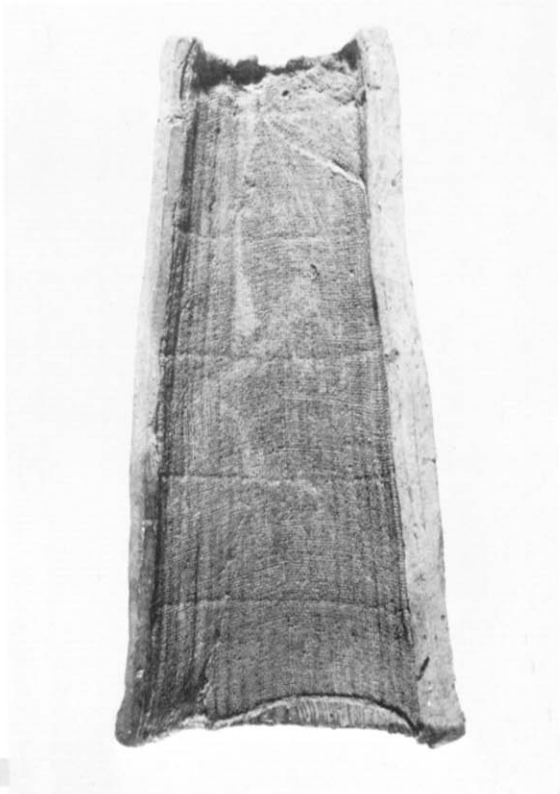
垂水廃寺出土軒平瓦（2）

図版20



垂水廃寺出土軒平瓦（3）

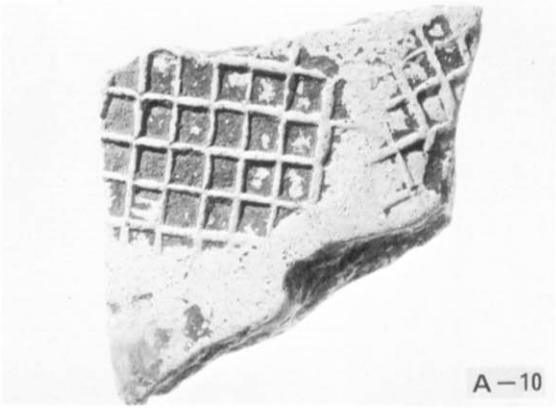
図版21

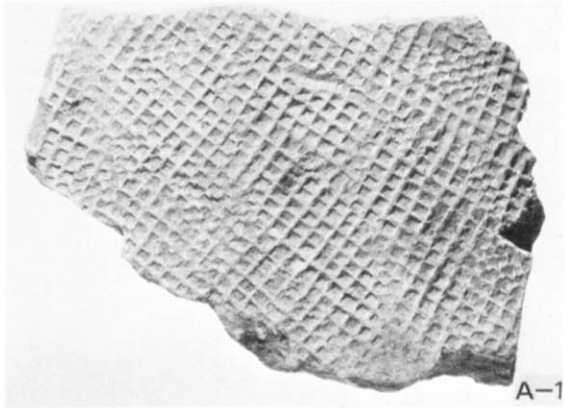


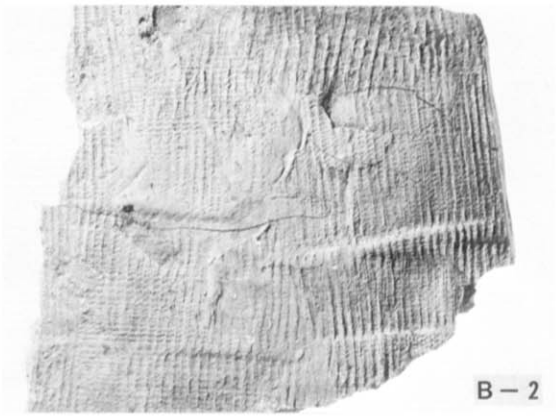
1

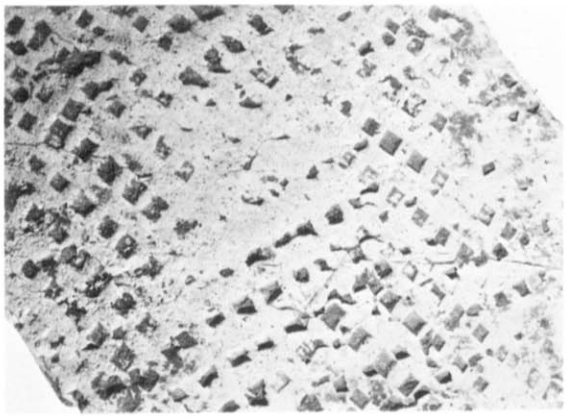
2

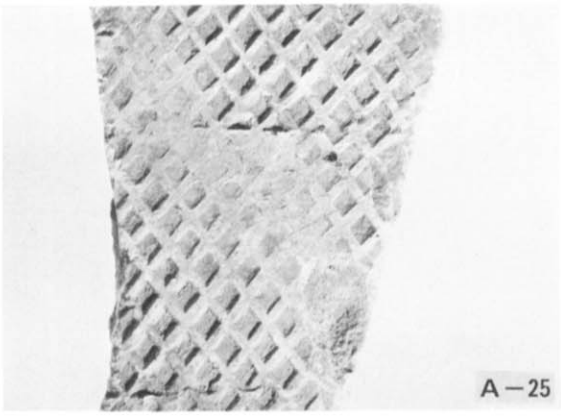
垂水廃寺出土丸・平瓦



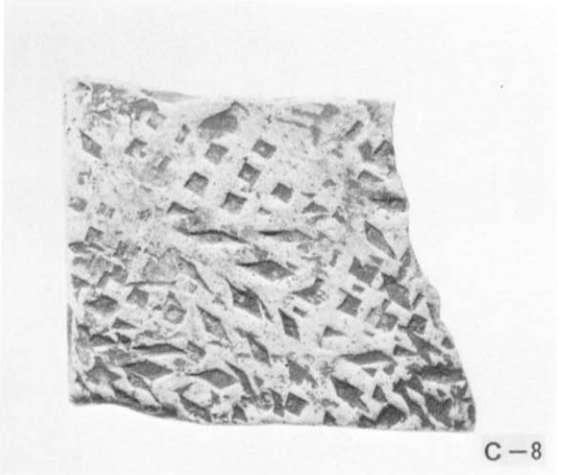




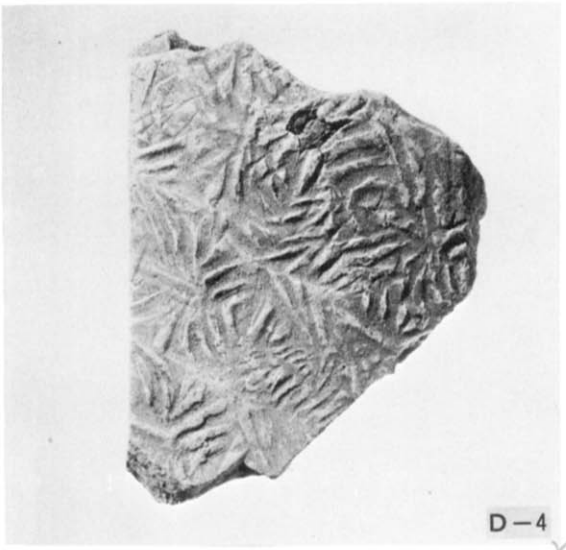


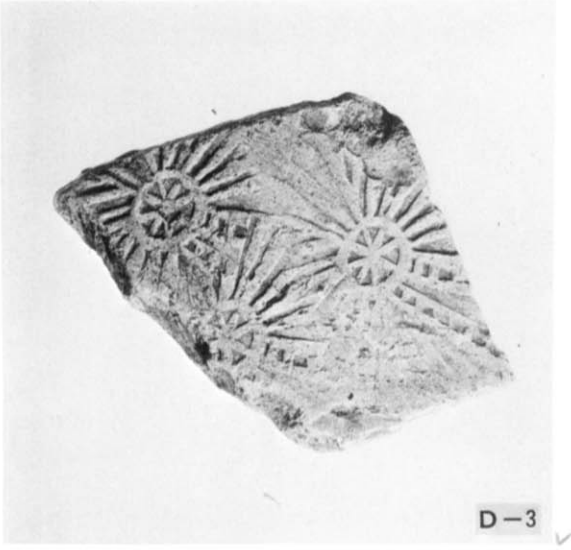


垂水廃寺出土瓦叩文様（1）

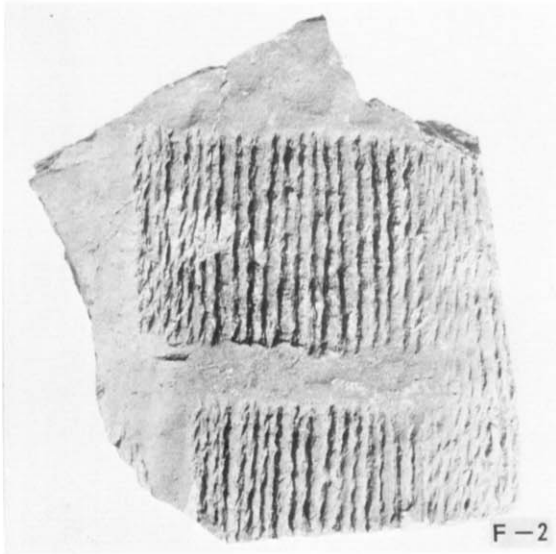


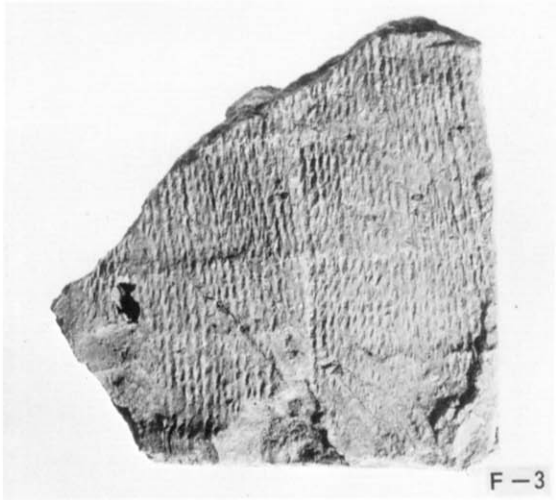
垂水廃寺出土瓦叩文様（2）



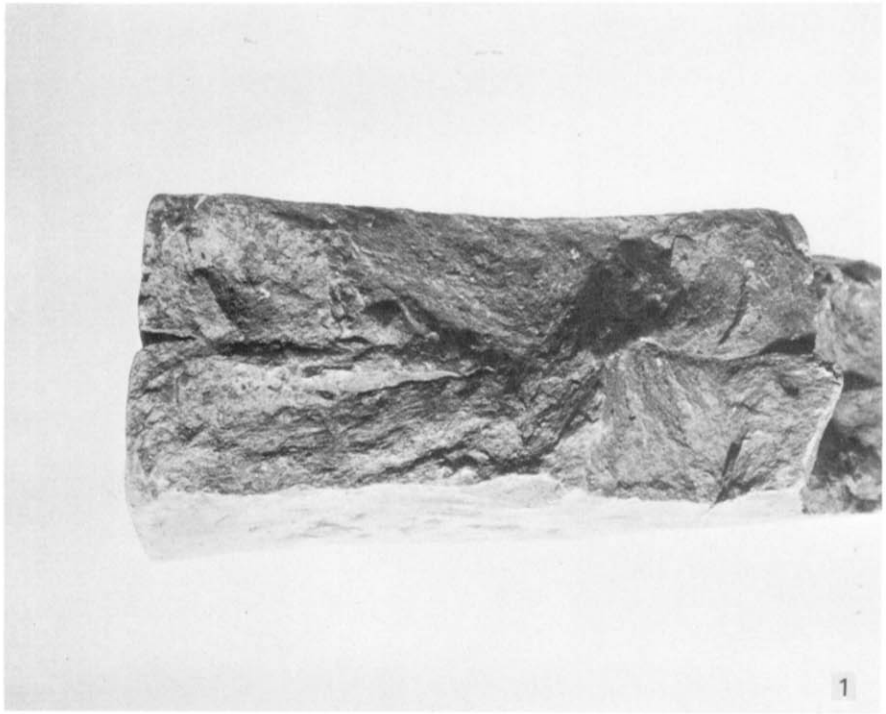


垂水廃寺出土瓦叩文様（3）

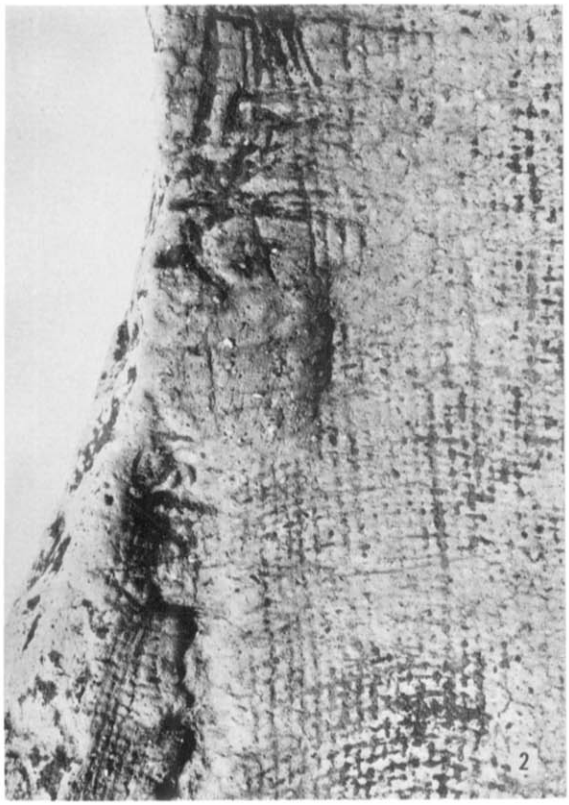




垂水廃寺出土瓦叩文様（4）

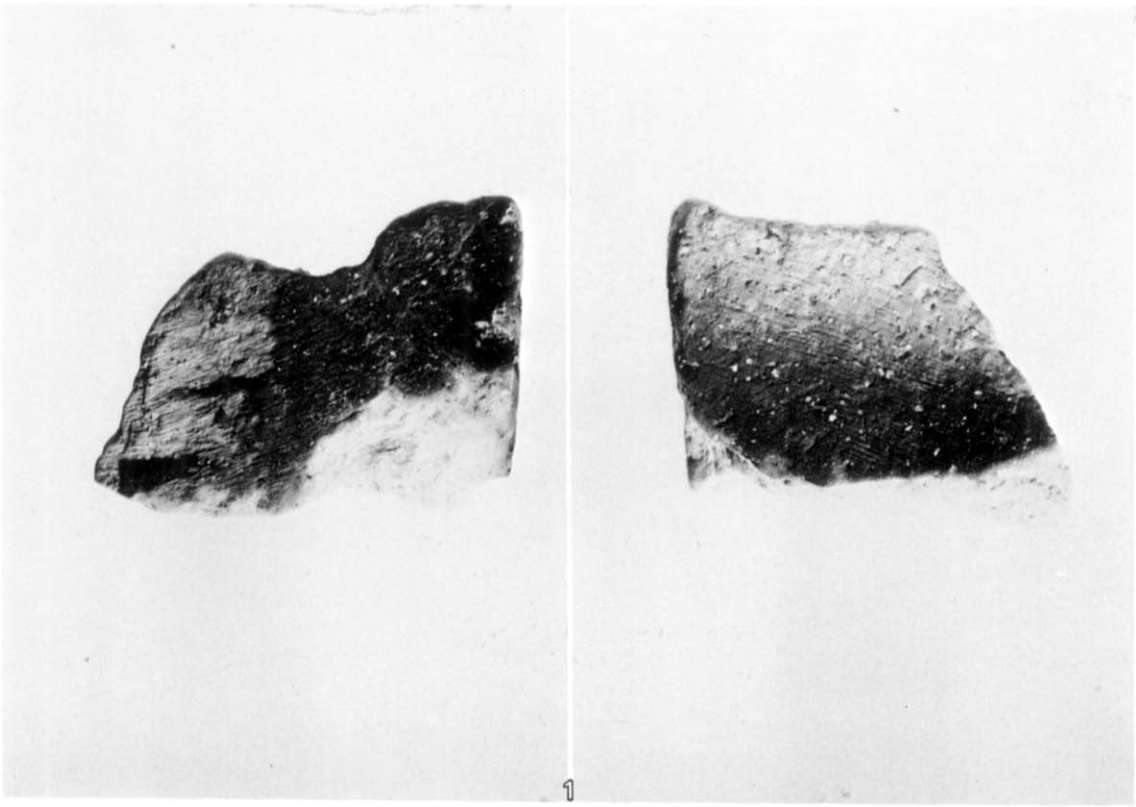


1. 粘土板はりつけ状態
2. 凹面の方形突起
3. 凸面の布目

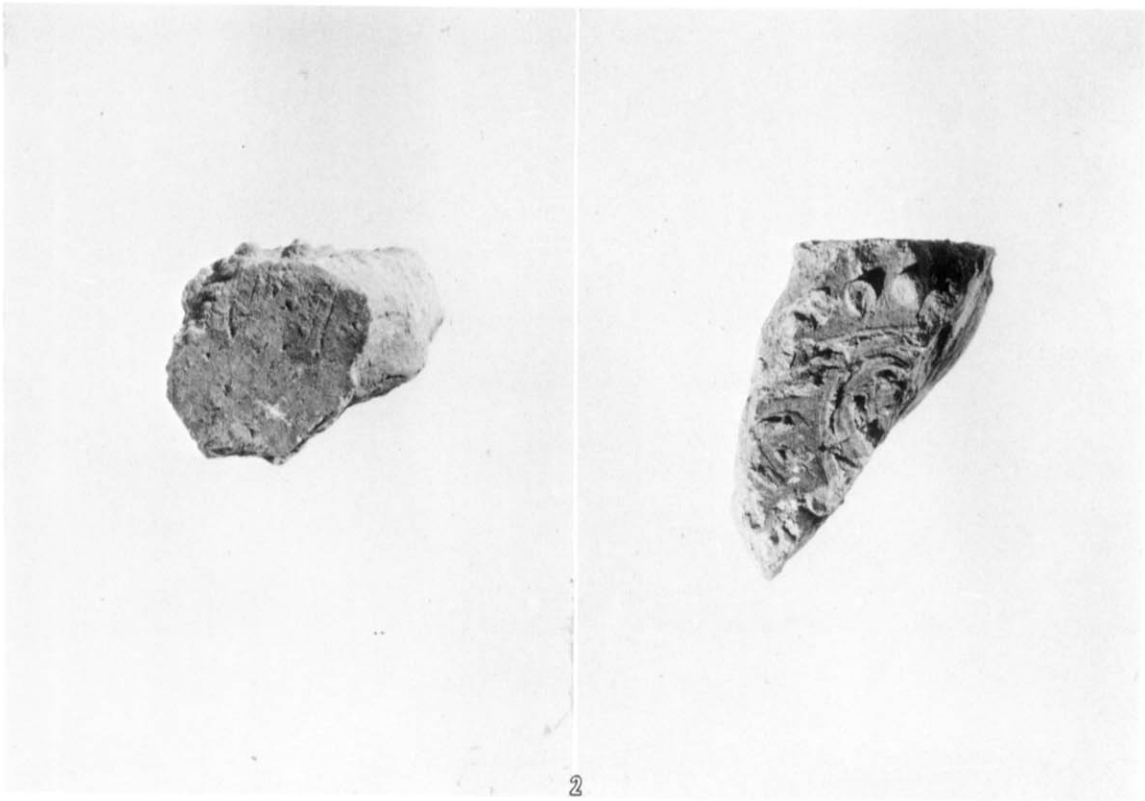


垂水廃寺出土瓦（製作技法）

垂水廃寺出土文字瓦（実大）

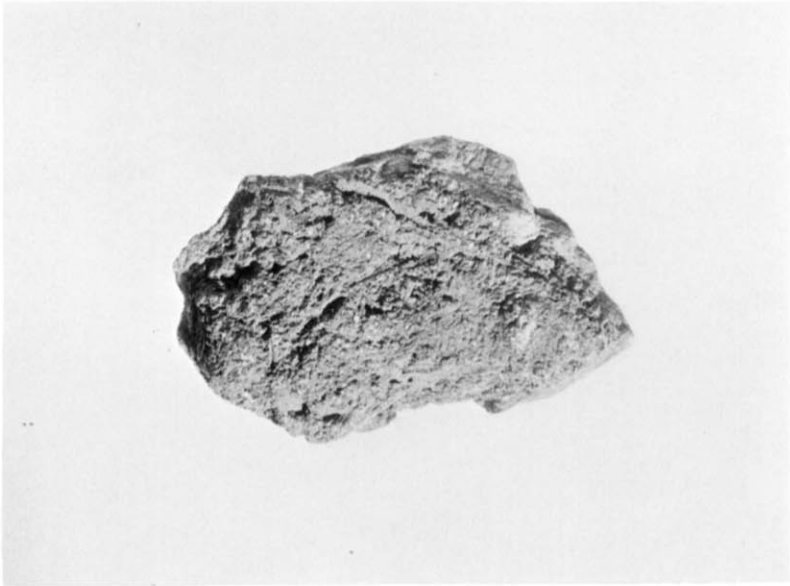


1

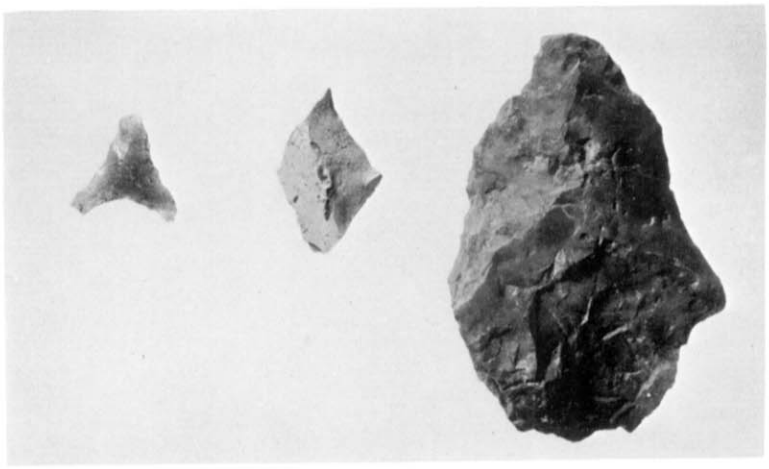


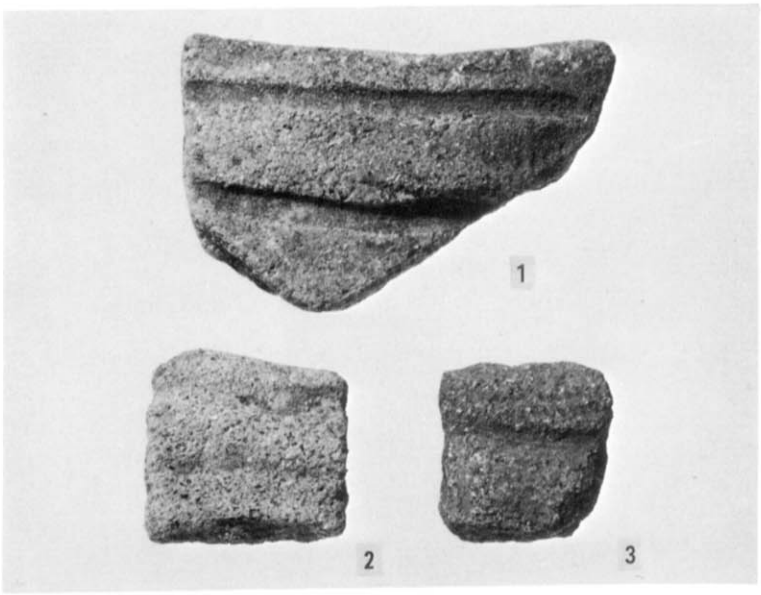
2

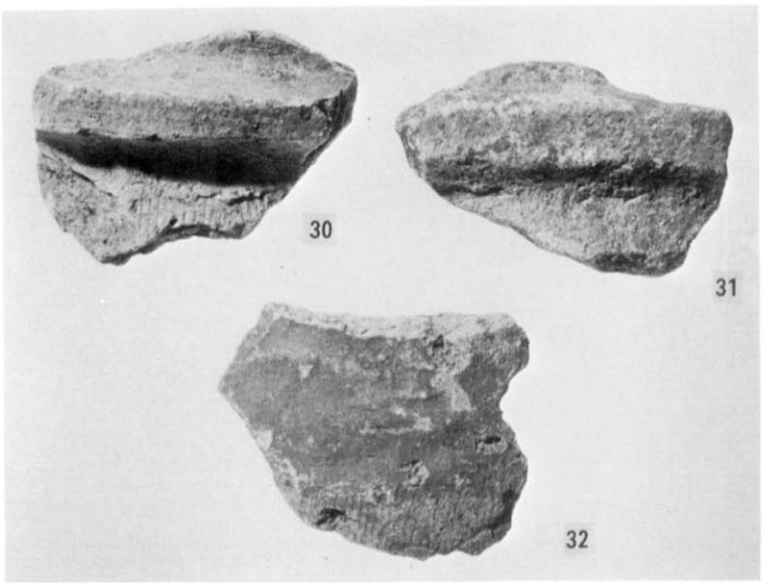
出土塼　1 無文塼　2 文様塼



塑　像　残　片

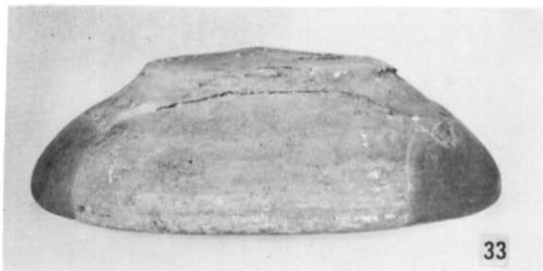


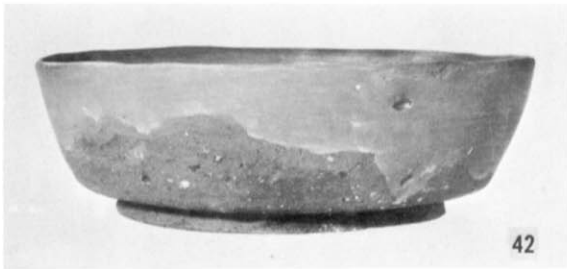


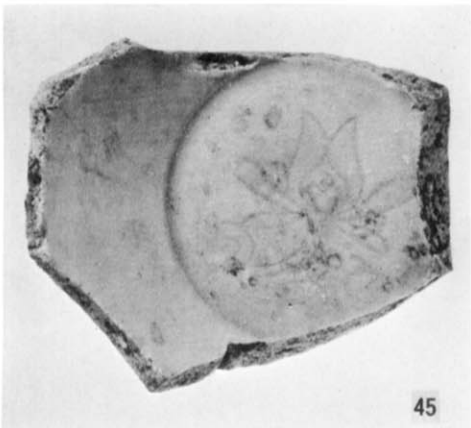


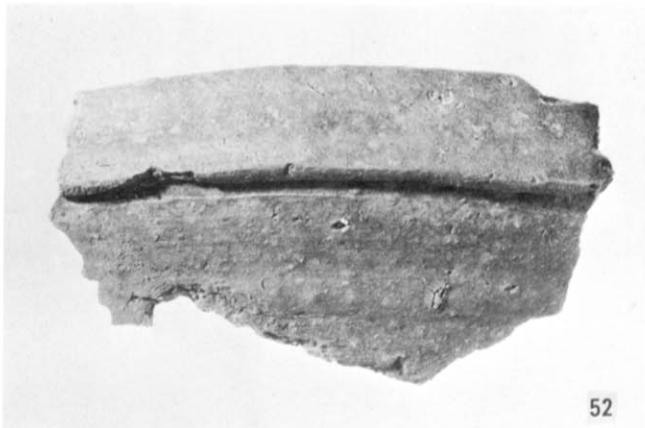
石器・縄文土器・埴輪

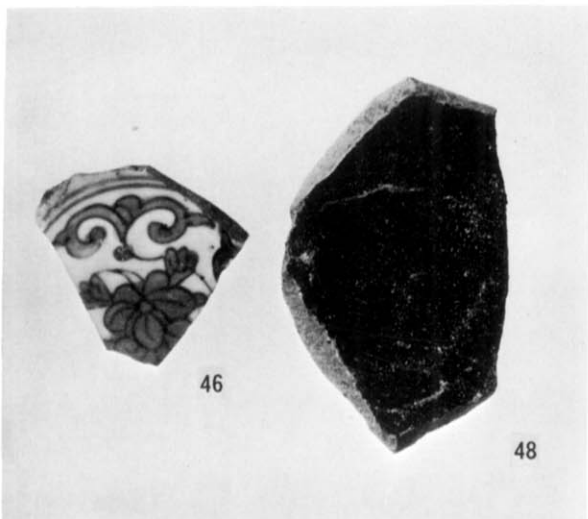
弥　生　土　器

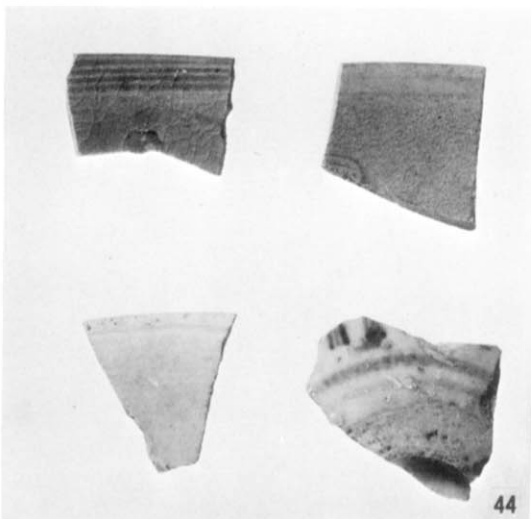












須恵器・陶磁器

1

4

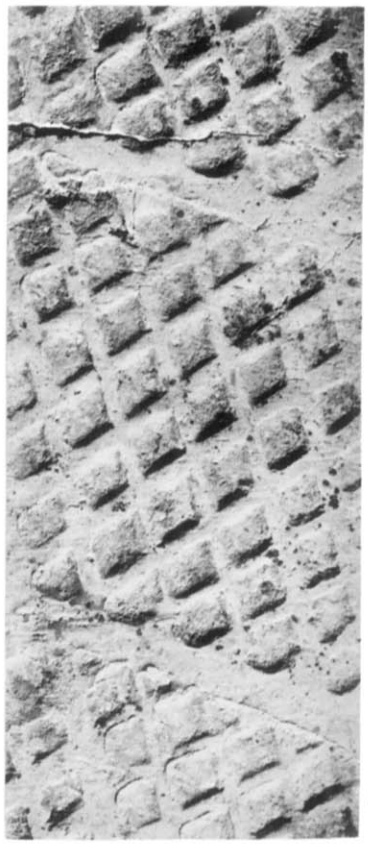
5

3

6

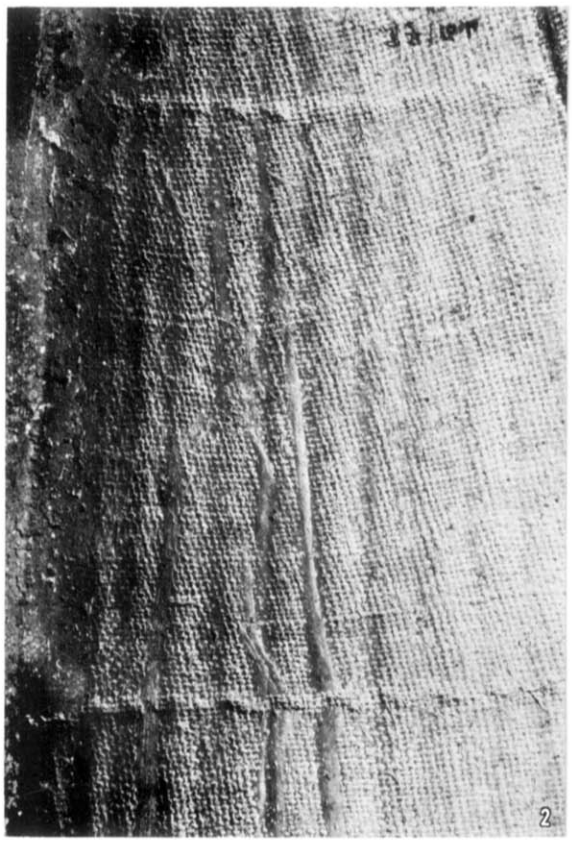
山田第1号窯跡出土平瓦(1/4)

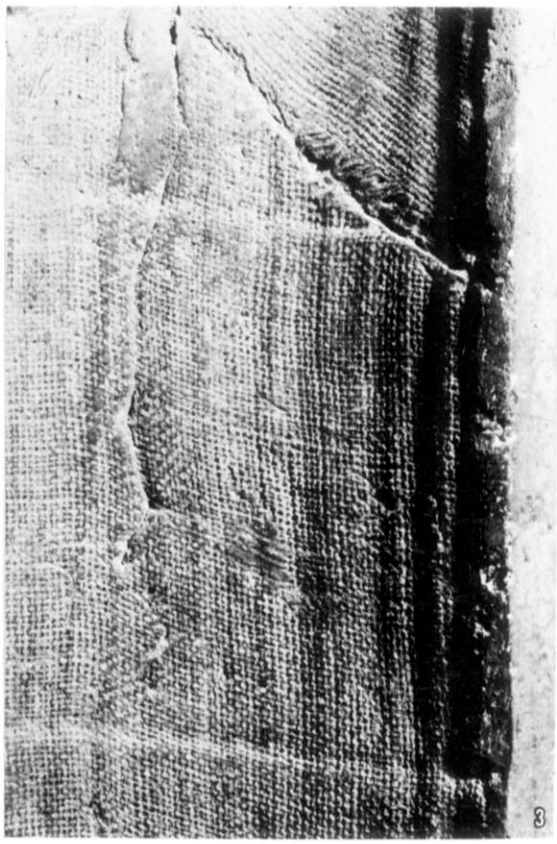
2



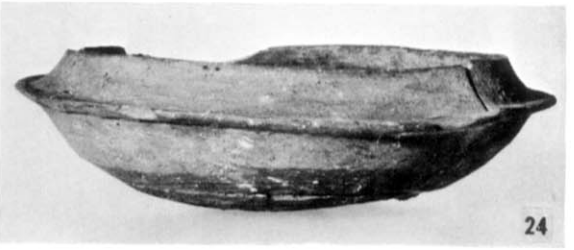
3

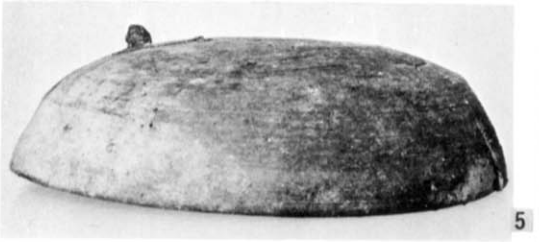
山田第1号窯跡出土丸・平瓦

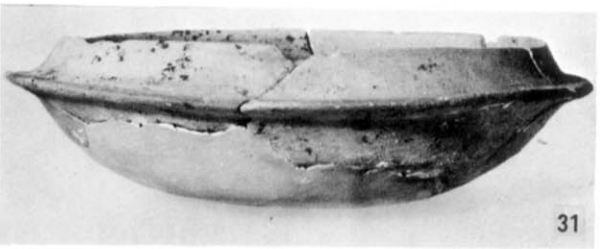




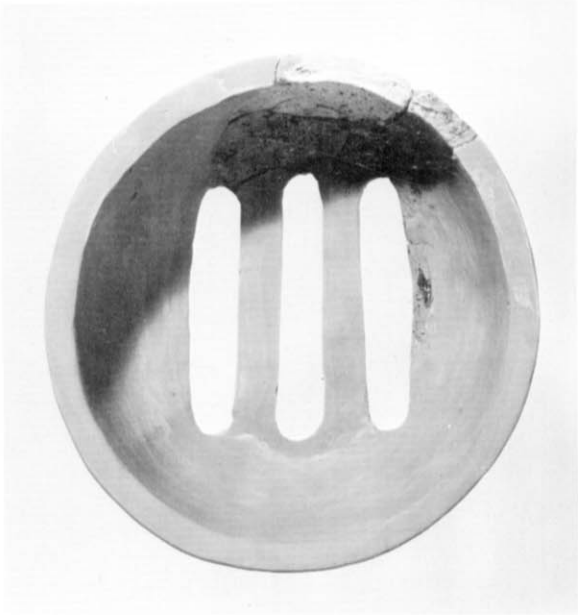
山田第1号窯跡出土丸瓦　　2　竹状模骨痕(実大)　　3　粘土板合せ目痕と布目合せ目痕(大大)



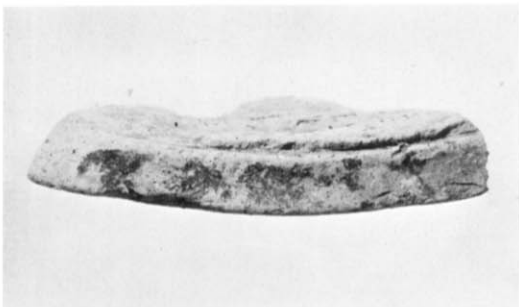


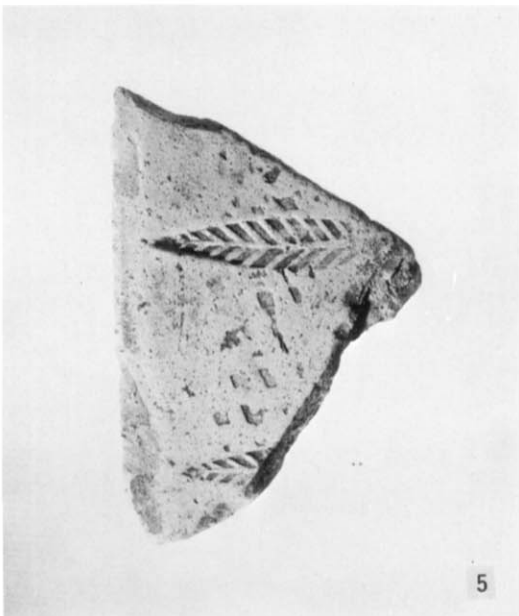


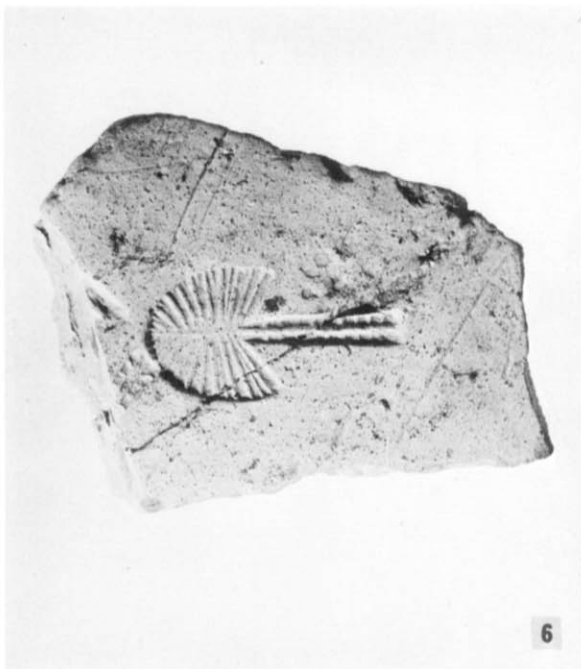
山田第１・３号窯跡出土須恵器



山田第3号窯跡出土須恵器







友枝瓦窯跡出土瓦

垂　水　廃　寺

1976 年 3 月 31 日

発　行　　新吉富村教育委員会
福岡県築上郡新吉富村大字垂水

印　刷　　青柳工業株式会社印刷部
福岡市中央区古小烏70番地